大　県　遺　跡

—堅下小学校屋内運動場に伴う—

１９８５年度

１９８８年１１月

柏原市教育委員会

はしがき

大県遺跡は、生駒山地西麓部に位置し、縄文時代から歴史時代まで継続する集落関連の複合集落で、近接する遺跡の中でも規模が大きく出土する遺構等も多彩な内容のものがある。

遺跡の現状は、大半が住宅化しており、生駒山地からの流出土が厚く堆積して深く埋もれている。近年、住宅の高層化や公共事業による上下水道の整備等により、事前の発掘調査を実施する事例が増化し、次第に遺跡の状況把握がなされるようになった。この中で、縄文時代早期の遺物が多数出土する事や古墳時代の鉄器生産に関わる遺物や遺構が広範囲に密度が高く発見されている。

今回の調査は、隣接して大県郡衙や大県廃寺等が存在する遺跡の中心部にあたることから、遺跡の時期や性格を検証するための課題が山積していた。調査成果は、本書に報告する通り当初予測していた内容を上回るものが得られ、報告するものである。

これらの資料は、柏原市の歴史的環境復元にとどまらずより多くの他方面の人々の活用を期待したい。最後に、調査及び報告書作製にあたり、関係各位にご理解とご協力を頂いた事を記して感謝いたす次第である。

昭和63年11月

柏原市教育委員会

教育長　庖　刀　和　秀

例　　言

1．本書は、柏原市教育委員会が堅下小学校屋内運動場建設に伴って実施した大県遺跡の事前緊急発掘調査概要報告書である。

2．発掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課　北野　重を担当者として昭和60年6月5日から同年8月末日まで実施した。

3．発掘調査及び本書作製にあたって下記の方に御指導、御助言を賜わりました。
帝塚山考古学研究所所長　堅田　直、同志社大学教授　森　浩一、帝塚山短期大学講師　山本　昭、橿原考古学研究所　石野博信、たたら研究会会員　大澤正己、大谷大学助教授　中村　浩の諸先生の他に、大阪府教育委員会技師　尾上　実、堺市教育委員会技師　森村健一、八尾市立刑部小学校教諭　奥田　尚、光洋精工、研究部部長　森原源治、研究員　永井康章

4．調査協力者は、次の方々です。

石田　博	竹下　賢	安村俊一	桑野一幸	田中久雄
谷口京子	石田成年	仲井光代	秋田大介	伊藤康臣
清瀧健二	稲岡利彦	菊井健一	梶　説子	今中太郎
松村富子	江波京子	藤本直美	中田ゆかり	横関勢津子
吉居喜子	乃一敏恵	松成早苗		

5．遺物の整理・実測は、北野・仲井が主に行い、石田成年、松村富子の協力を得た。

6．実測中に表示した方位は、磁北、標高はT．Pである。

7．本書の編集、執筆は、北野が行った。

目　　次

第１章　調査に至る経過…… 1
第２章　遺跡の概要…… 3
第３章　調　　査…… 4
　第１節　調査の概要…… 4
　第２節　遺　　構…… 7
　第３節　遺　　物…… 22
第４章　ま　と　め…… 53

図－１　周辺の遺跡…… 2
図－２　字名図…… 3
図－３　地区割図…… 4
図－４　遺構概略図…… 5
図－５　断面図…… 6
図－６　溝５．６．７…… 9
図－７　建物１．５．６．８…… 11
図－８　土坑１．２．３…… 12
図－９　土坑４…… 13
図－10　井戸２…… 16
図－11　鍛冶炉１．２…… 17
図－12　鍛冶炉３…… 18
図－13　鞴羽口出土状況…… 19
図－14　鍛冶炉４…… 19
図－15　弥生住居１…… 21
図－16　溝１上層出土遺物…… 23
図－17　溝１下層出土遺物　その１…… 24
図－18　溝１下層出土遺物　その２…… 25
図－19　溝１下層出土遺物　その３…… 26
図－20　溝２．５．６．７出土遺物…… 27
図－21　溝４出土遺物…… 28
図－22　ピット出土遺物…… 30
図－23　土坑４出土遺物　その１…… 32
図－24　土坑４出土遺物　その２…… 33
図　25　井戸２出土遺物…… 34
図－26　鍛冶炉３出土遺物…… 35
図－27　弥生住居１出土遺物…… 37
図－28　上層包含層出土遺物…… 39
図－29　黒灰色粘質土出土遺物…… 40
図－30　黒灰色粘質土出土遺物…… 41
図－31　黒灰色粘質土出土遺物…… 42
図－32　黒灰色粘質土出土遺物…… 43
図－33　下層包含層出土遺物…… 44
図－34　弥生～布留式土器…… 45
図－35　製塩土器…… 46
図－36　鞴羽口…… 49
図－37　砥石…… 50
図－38　石器…… 51
図－39　縄文土器…… 52
図－40　遺構変遷図…… 55

表　目　次

表1　鞴羽口比較表…… 48
表2　鍛冶炉3出土鉄滓分析値…… 52

図　版　目　次

図版1　調査区全景
図版2　上層遺構
図版3　溝1
図版4　溝2．3
図版5　溝4
図版6　溝5．6．7
図版7　建物1．3
図版8　建物5．6
図版9　建物8．9
図版10　ピット断面
図版11　遺物出土状況
図版12　土坑2．3
図版13　土坑4
図版14　井戸2
図版15　井戸2
図版16　鍛冶鉾1．2
図版17　鍛冶炉3　その1
図版18　鍛冶炉3　その2
図版19　鍛冶炉3　その3
図版20　鍛冶炉4
図版21　弥生住居1
図版22　土層断面
図版23　遺物出土状況
図版24　溝1出土遺物
図版25　土坑4出土遺物
図版26　鍛冶炉3．溝4出土遺物
図版27　弥生住居1出土遺物
図版28　奈良時代の遺物
図版29　包含層出土遺物　その1
図版30　包含層出土遺物　その2
図版31　包含層出土遺物
図版32　鞴羽口、鉄滓、砥石

第１章　調査に至る経過

柏原市は、市立堅下小学校の敷地（柏原市平野２丁目１－５番地）内に屋内運動場の建築計画を立てた。この計画は、現代使用している木造講堂が老朽化したため建替えによって教育環境の改善をはかる目的である。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれるので、市当局は昭和59年12月３日付「土木工事等による埋蔵文化財包蔵地の発掘通知書」を提出した。

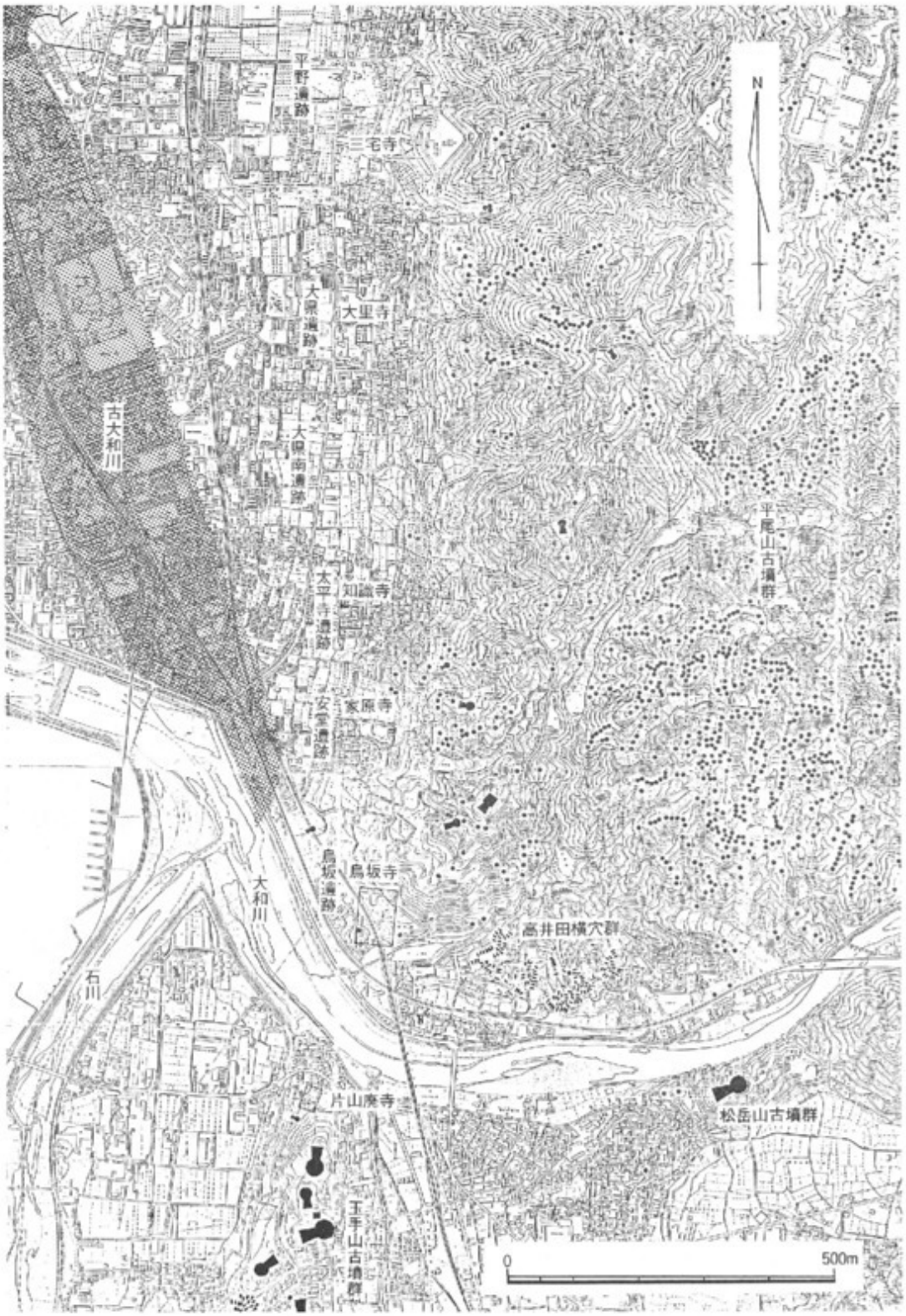
柏原市教育委員会は、同市より発掘調査の依頼を受け、調査を実施するための協議を実施した。当該地における遺跡の状況は、周辺部の調査成果によって次第に判明しつつある時期であった。大県83－５次調査[注1)]は、昭和58年７月21日から８月８日まで当該地の北接地を遺跡確認調査として実施している。調査は、約75㎡掘削し、３時期の遺構面を検出している。第１遺構面は、奈良時代の掘立柱建物関係の遺構群を検出し、第２遺構面は、古墳時代後期の溝等遺構を検出した。第３遺構面は、弥生時代中期の溝や土坑等を検出した。また、遺物は、各遺構に伴い及び遺物包含層から須恵器、土師器、弥生土器、瓦、鉄滓、獣骨、サヌカイト石器等が多数出土した。大県84－１次調査[注2)]は、当該地に南接する道路内を下水道埋設に伴う事前調査として実施したものである。調査は、約150㎡掘削し、地表下４ｍの深さまで遺物包含層があることを確認した。遺構は、古墳時代後期の溝、石敷遺構、鍛冶炉等と奈良時代の石組みの井戸等を検出した。遺物は、須恵器、土師器、瓦、鞴羽口、鉄滓、獣骨、サヌカイト石器等が多数出土した。特に井戸内より多量の遺物が出土し、「大里寺」記載の墨書土器が発見されている。

以上の調査成果から、当該地は、大県遺跡の中心部にあたり多くの遺構と遺物が検出される事が予測された。遺跡の状況は、生駒山地の西麓部の下方あたり、西向きの緩斜面地であり、東側部は学校建設次に削平されている可能性があるが、西側部は良好な遺跡が遺存していると考えられた。

調査を実施するにあたり、安全対策として、調査深度等による影響を考慮し、西及南側鋼矢板（l＝５～７ｍ長）を打ち込み、周囲に防止柵を巡す等安全措置を講じた。調査は、昭和60年６月５日から８月31日まで実施した。

調査の結果、弥生時代から奈良時代に至る多くの遺構と遺物が検出された。各時代共に多種多彩なものがあり、本書に掲載した通りである。

注１　柏原市教育委員会　「柏原市埋蔵文化財発掘調査概報」　柏原市文化財概報　1983－Ⅱ
注２　柏原市教育委員会　「大県・大県南遺跡」　柏原市文化財概報　1984－Ⅳ


N
平野遺跡
三宅寺
大里遺跡
大里寺
古大和川
大保南遺跡
平尾山古墳群
太平寺遺跡
知識寺
家原寺
安堂遺跡
鳥坂遺跡
鳥坂寺
大和川
高井田横穴群
石川
片山廃寺
松岳山古墳群
玉手山古墳群
0
500m

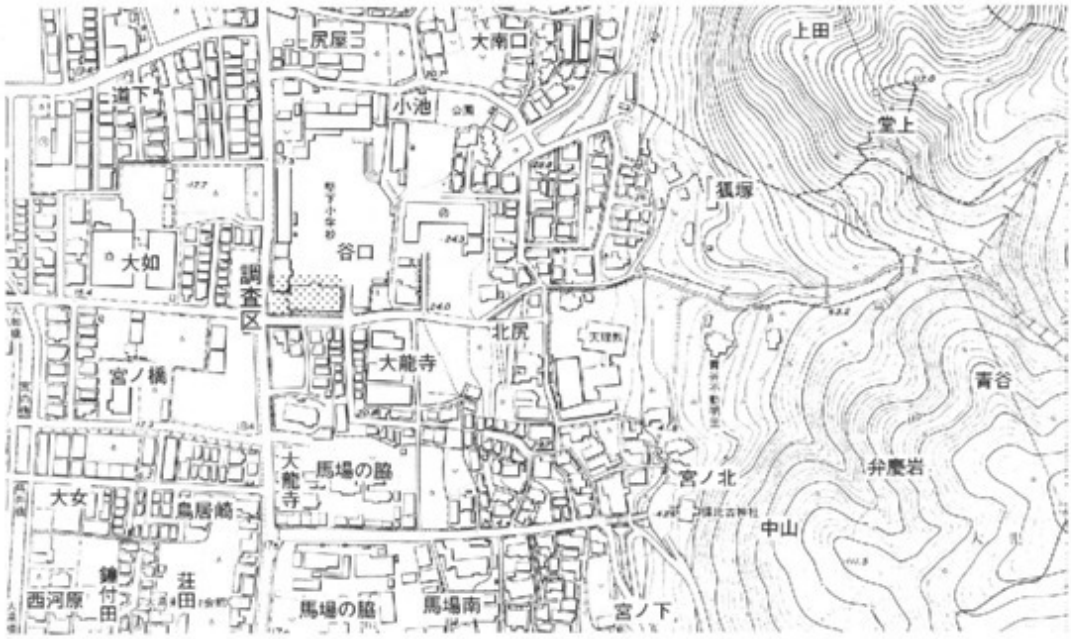
図－1　周辺の遺跡

第2章　遺跡の概要

大県遺跡は、柏原市平野、大里一帯にかけて所在する集落遺跡である。その範囲は、東は生駒山地山裾やや上方から西は恩智川までの約500m、南は大県南遺跡、北は平野遺跡に接して約650mの拡がりを持つ。

当遺跡の南西約1.5kmに大和川と石川の合流点があり、河内平野の入口部となって流れ込んでいる。この対岸には、古市古墳群、国府遺跡、船橋遺跡等著名な遺跡が多い。

遺跡の時代は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世と幾つもの時代が重複する複合遺跡である。縄文時代は、神宮寺・大川式の押型文土器から晩期まで継続した各期の遺物と遺構が検出される。集落の中心は、生駒山地から派生した尾根筋の安定した丘陵上に存在し、竪穴住居、石囲炉、ピット、溝、甕棺墓等が検出されている。弥生時代は、縄文集落域を中心に形成し、前期から後期までの遺物と遺構が検出される。遺構は、竪穴住居、ピット、溝、土壙等がある。また、背後の高尾山山頂には、高地性集落があり、中後期の土器類と石器類が出土している。古墳時代は、中期以降から製鉄関連の遺構と遺物が顕著に検出される。遺構は、鍛冶炉、炭層、石敷、溝があり、遺物は、鉄滓、羽口、砥石等が多量に出土する。広範囲にわたり出土するところから、鉄器生産（鍛冶）専門集団の居住地と考えられる。飛鳥・奈良時代は、「続日本記」に記載された河内六寺の内の二寺（三宅、大里）が建立され、当遺跡内に含まれている。



図－2　字名図

第３章　調査概要

第１節　調査の概要

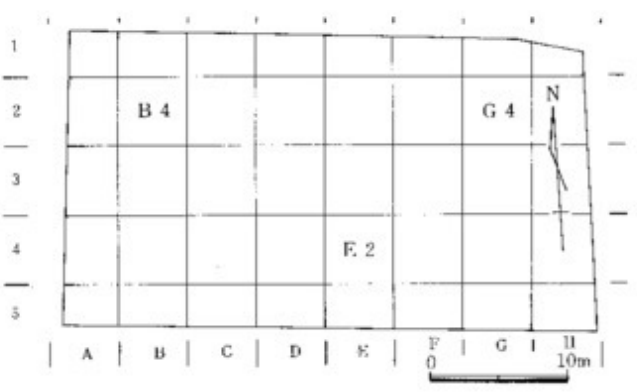
調査は、昭和60年６月５日から同年８月末日まで61日間実施した。調査対象面積は、約1200㎡である。現状は、事前に旧講堂が取り壊され平坦に地ならしが行なわれており、校庭と同一平面を成している。本来の地形は、東から西にかけての緩斜面地であり、畑地の開墾や学校造成によって東側の標高が高い部分を掘削し西側の低地へ土砂を盛ったと考えられる。この事は遺物包含層が露出している状況や試掘調査結果から明らかなように、当該地の東半部は上層の堆積土が削平を受けており、西側寄りになるに従い良好な遺存となっている事がわかる。

西側端の遺物包含層の深度は、４ｍ以上が推察される事や旧国道170号線（東高野街道）や民家が隣接している事等を考慮して安全のため鋼矢板を打ち込んだ後調査を実施した。

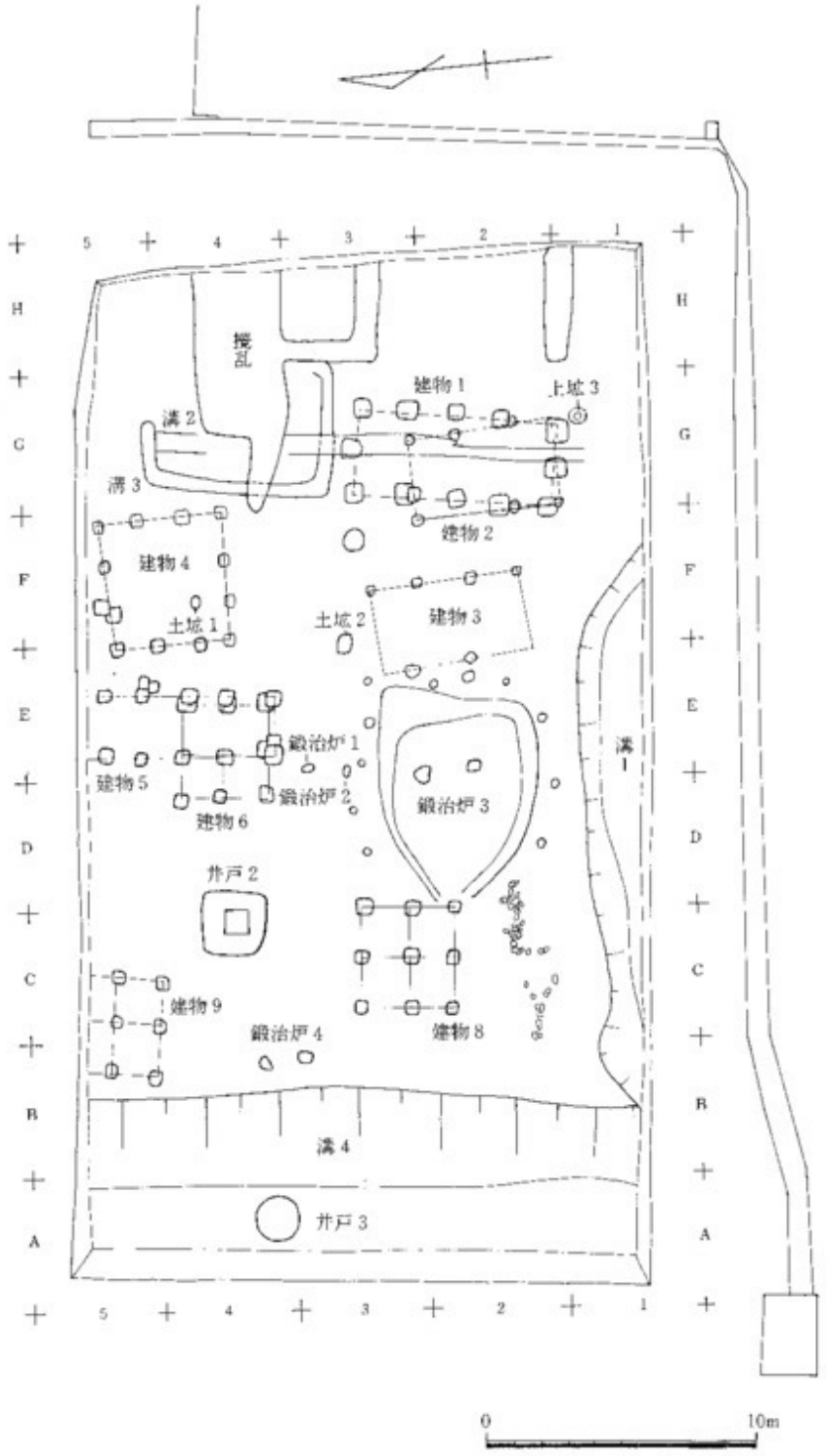
調査は、東西約40m、南北約22mの長方形調査区を設定し５ｍ区画のグリッドを組み遺物の取り上げ及び遺構平面図の基準とした。東側からＡ．Ｂ．Ｃ……Ｈ区、南側から１．２……５区とした。割付軸は、磁北よりＮ－５°－Ｅ傾く。

調査の結果、３時期の遺物包含層と遺構面を検出した。第１遺構面は、古墳時代後期から奈良時代にかけての溝、掘立柱建物、土坑、井戸、鍛冶炉等の遺構が全体から検出された。第２遺構面は、弥生時代後期から古墳時代中期までの溝と土坑である。第３遺構面は、弥生時代中期の竪穴住居１棟が最下層から検出された。これらの３つの遺構面の上層に各期の遺物包含層が形成しており、前述の如く西向きの緩斜面地とほぼ平行するように堆積している。１層は、盛土及び表土が20～100㎝の厚さで上層に堆積していた。部分的には旧家屋の基礎による撹乱坑が見られた。２層は、薄茶灰色砂質土が20～50㎝堆積する。近世から古代までの土器片が出土したが細片で摩耗が激しいものである。畑の耕作土であろう。３層は、２層と同じく畑地の床土である。ほとんど遺物を含まない。４層は、茶灰色粘質土でほとんど遺物を含まない。周辺の調査例では中世の遺物包含層が類似しており、４層が対応するのではないかと考えられる。

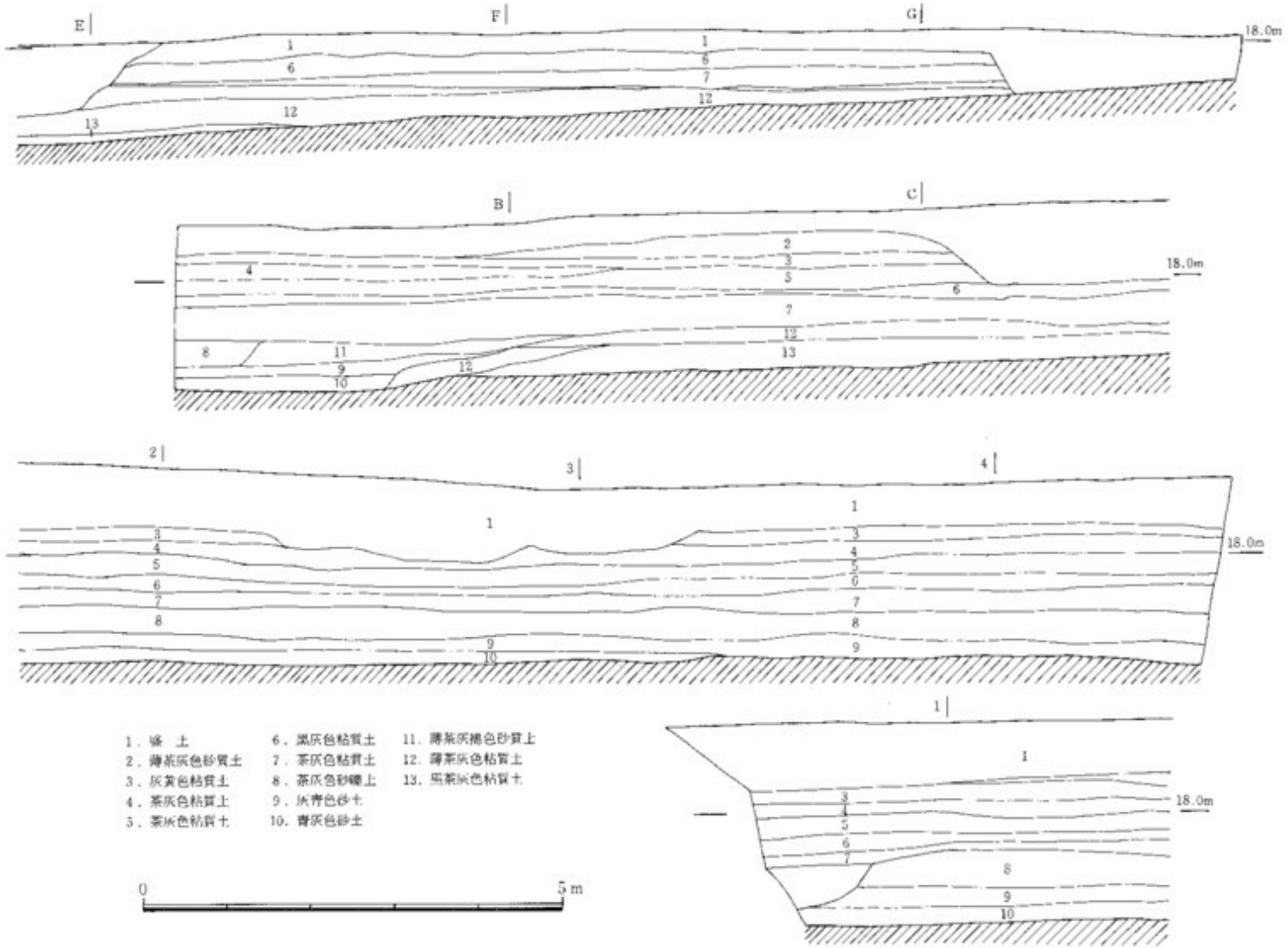
５層は、同じく茶灰色粘質土である。鉱物質の斑点が多く混入している。厚さは、約20㎝を測り、遺物が細片ながら多量に出土した。時期は、奈良時代前後の土器類が出土する。同土層除去後にピットや土坑等が検出された。



図－３　地区割図


撹乱
建物1
土坑3
溝2
溝3
建物2
建物4
土坑1
土坑2
建物3
溝1
鍛冶炉1
建物5
鍛冶炉2
建物6
鍛冶炉3
井戸2
建物9
鍛冶炉4
建物8
溝4
井戸3
0
10m

図－4　遺構概略図


E
F
G
18.0m
B
C
18.0m
2
3
4
18.0m
1
18.0m
1．盛　土
2．薄茶灰色砂質土
3．灰黄色粘質土
4．茶灰色粘質土
5．茶灰色粘質土
6．黒灰色粘質土
7．茶灰色粘質土
8．茶灰色砂礫土
9．灰青色砂土
10．青灰色砂土
11．薄茶灰褐色砂質土
12．薄茶灰色粘質土
13．暗茶灰色粘質土
0
5 m

図－5　断面図

ピットは、一辺20～100cmを測る隅丸方形のものが多く掘立柱建物に伴なうものであろう。6層は、黒灰色粘質土で20～30cmの厚さがある。非常に多くの遺物が混入しており、特に、須恵器や土師器の土器類の他に鍛冶関係の遺物（鉄滓、羽口、砥石）が多い。時期は、6～7世紀までのものが主流である。この上層は、東端部ではあまり確認されなくて中央部以西で検出した。下層から溝、ピット、土坑、鍛冶炉等の遺構が検出された。7層は、茶灰色粘質土である。25～30cm。この土層も中央部以西で確認された。12層は、薄茶灰色粘質土である。調査区の部分的に10～15cmの厚さでみられた。7．12層の下層から溝、土坑を検出した。13層は、黒灰色粘質土である。この土層も部分的にしか存在せず弥生住居周辺以北に伸びている。弥生時代中期の土器とサヌカイト石器が出土し、同上層下より竪穴住居1棟を検出した。

第2節　遺　構

第1遺構面から溝1～4、建物1～9、土坑1～3、井戸1等の遺構を検出した。第2．3遺構面から、溝5～7、土坑4、竪穴住居1を検出した。各遺構の種類毎に説明を加えていきたい。

溝　1

調査区の南端をA－1区からF－1区までほぼ直線的に東西方向に伸びた溝である。検出規模は、長さ20m、幅2.5m以上、深さ約50cmを測る。84年度の下水道埋設に伴なう事前の調査において同一溝の一部が検出されており、横幅5m以上を測る大溝と考えられる。検出部分は溝の北側肩部だけである。底部は、南側に緩く弧状を呈し下がる。埋土は、上下2層に分かれ、上層は、赤茶褐色砂礫土、下層は、青灰色粘質土である。上層、拳大から人頭大の自然石が非常に多く含まれている。下層は、水が淀んだ時に出来る粘質土又はピット層である。出土遺物は、須恵器、土師器、鉄滓、羽口、獣骨等がある。この大溝は、大里寺の北部域を区画する溝と考えられ、同寺院の瓦が上層埋土から出土している。時期は、上層が7世紀前半から後半、下層が6世紀末頃から7世紀初頭である。

溝　2

G－1～4区までほぼ南北方向に直線的に伸びる溝である。横幅50～60cmの溝が2本で構成され中程で接合している。長さ15m以上を測り、両端が削平の為か自然消滅している。深さは5～10cmで断面はゆるい円弧を成す。埋土は、茶灰色砂質土である。上部が削平されている事、出土遺物がほとんどない事からどのような性格のものか不明である。時期は、遺構の切り合い関係から中世以降と考えられる。

溝　3

G－3．4区に3方が方形に屈曲した区画性を有する溝である。溝は、横幅40～50cmとほぼ

一定の幅を持ち、掘方断面は、方形に掘り込まれている。溝で囲まれた部分の大きさは、東西4.0m、南北6.2mの長方形を呈する。深さは、約30cmである。東側部分は撹乱によって遺存が悪い。しかし、全周していない可能性が高い。軸は、ほぼ磁北を向く。埋土は、薄茶灰色粘質土で堅緻な堆積をしている。出土遺物は、須恵器や土師器の細片のものが少量出土した。しかし、時期を明確にするものは出土しなかった。遺構の切り合い関係から8世紀代の遺構と考える。

溝　4

A．B－1～5区に検出した溝で、溝1に直交した南北方向に走る。規模は、南北20m以上東西7m以上である。溝の東側肩部だけを検出した。埋土は、茶灰色砂礫土、灰青色砂土がある。茶灰色砂礫土は、溝1上層とよく似た土層で拳大から人頭大までの自然礫を多く含む。灰青色砂土は、砂粒の大きさによって2層に分かれる。出土遺物は、須恵器、土師器、鉄滓、鞴羽口、獣骨等が出土した。時期は、上層が7世紀初頭、下層が6世紀後半である。鍛冶関係遺物は、上下両層から出土している。

溝　5

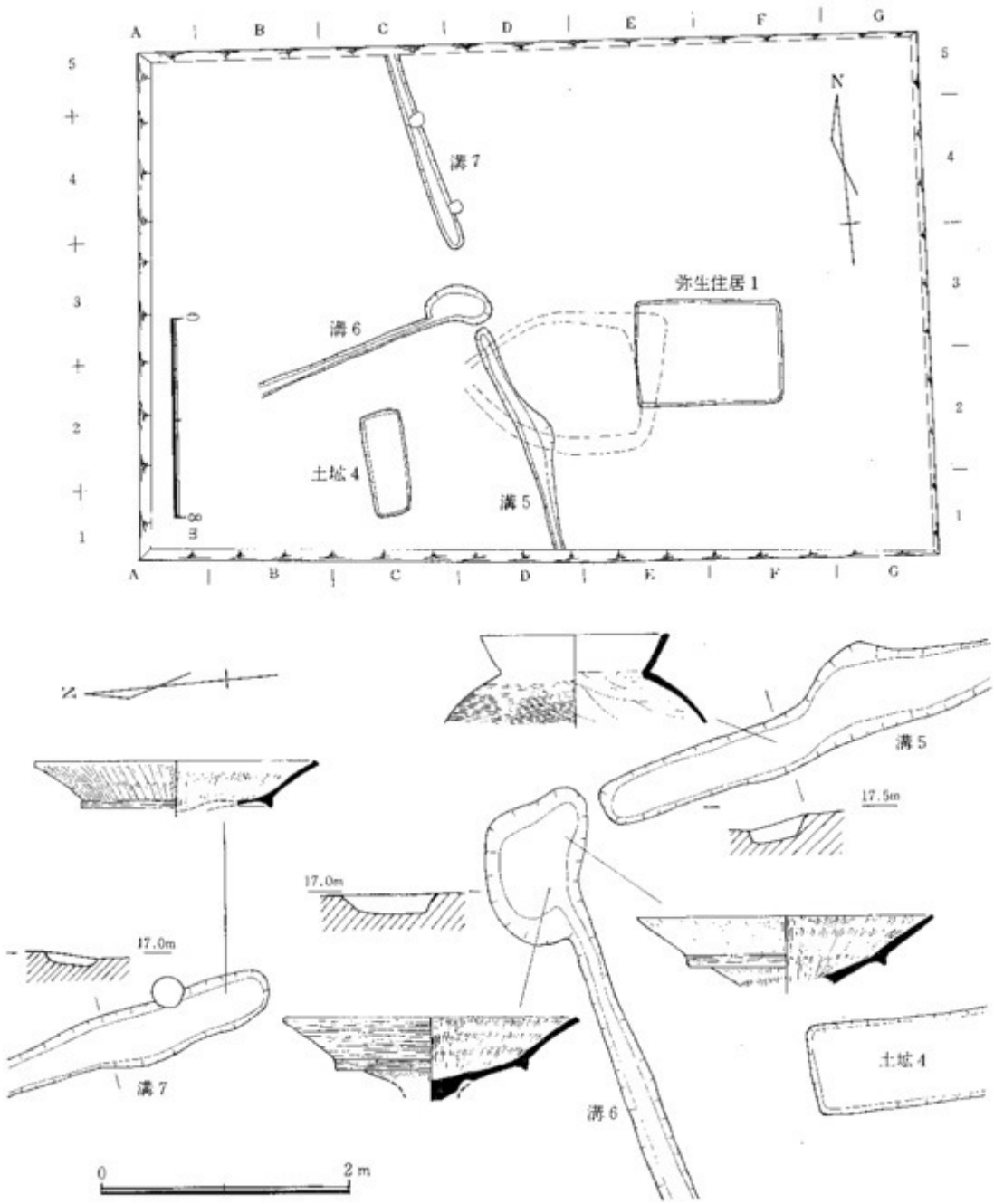
D－2～4区の下層遺構で、W－23°－Nの傾きを持ち南東から北西に向けてわずかに下りながら真直ぐ伸びる溝である。地形は、東から西へ傾く緩斜面地の傾斜変換点付近にあたる。東側は少し傾斜があり、西側が平坦に近くなっている。検出長さ10m、幅40～70cm、深さ10～20cmを測り、掘方断面は逆台形を呈する。埋土は、茶灰色粘質土である。出土遺物は、土師器、鉄滓がある。土師器は、布留式土器を主体とした時期のもので、縄席文叩きを施こした土器片も出土した。鉄滓と共伴した遺物（当遺跡）の中では最も古い。西接する土坑4は、その主軸が同一方向であり、出土遺物の時期も同じである事から土坑4が住居跡とすれば、溝5～7は、谷筋部から伸び用排水の為の溝と考えられる。各溝の接合付近は連続せず少しだけ途切れており、不思議さを感ずるが、溝の遺存状態の問題とすべき事かもしれない。

溝　6

D－3～B－2区まで溝5の北端から始まり西側へ直進する溝である。方向は、溝5の北端から垂直に真直ぐ伸びている。検出規模は、長さ10m以上、幅約30cm、深さ10～20cmを測る。東端部は袋状に大きくふくらんで深くなっている。西端は溝4の底部によって切られて自然消滅する。埋土は、茶灰色粘質土である。出土遺物は、弥生時代後期の土器と布留式土器がある。細片で遺物量もさほど多くない。

溝　7

C－4．5区から検出した下層遺構である。溝5と方向が同じく直線的に伸びている。検出規模は、長さ8m以上、幅30～40cm、深さ10cmである。部分的に上層遺構（井戸2や建物ピット）によって切られてる。南端は、溝5．6と少し離れてはじまり、北端は北側へ伸びている。溝の掘方断面は、逆台形を成す。出土遺物は、弥生時代後期の土器片が少量出土した。



図－6　溝5、6、7

建物 1

G－1～3区に検出した東西2間、南北4間の建物である。今回の調査において最も規模が大きい掘方径を持つ建物である。ピットは、隅丸方形の掘方に円形の柱穴を持つ。一辺50～80㎝の掘方と平均35㎝の柱穴径を持っている。柱穴間は、1.4～1.9mまであり、広狭2つのグループに分れる。最も深いピットは、50㎝を測る。建物方位は、磁北に対して10°東へ振る。出土

遺物は、掘方埋土中より七世紀前半期に属する須恵器、土師器が出土した。その他に、鉄滓、鞴羽口、サヌカイト、桃核がある。建物の存続時期は、7世紀中頃と考えられる。

建 物 2

G－1．2区に検出された東西2間、南北3間の規模の建物である。建物1と重複しており、建物1が廃絶後に建てられたものである。ピットは、隅丸方形の掘方に円形の柱穴を持つ。掘方一辺は、40～54cm幅のもので柱穴径は20cm未満である。方位は、磁北にほぼ合致して南北方向を向く。出土遺物は、須恵器、土師器の細片が多く2次的な混入と考えられ、時期は明確でない。遺構の切り合いや埋土の状況から八世紀以降と考えられる。

建 物 3

E．F－2．3区の調査く中央部、鍛冶炉3に東接した建物である。柱間規模は、東西2間、南北3間である。ピットの掘方は、方形と円形のものがあり、30～40cmを測る。各ピットの柱穴間は、1.8～2.3mまでみられ不整いのものが多い。方位は、磁北に合致している建物2、4と同一である。出土遺物は、須恵器、土師器が少量出土したが、時期を明確にするものは出土していない。建物2、4より下がるかもしれない。

建 物 4

F－4．5区から検出した東西3間、南北3間の建物である。ピットは、隅丸方形の掘方に円形の柱穴を持つ。規模は、東西4.4m、南北4.3mを測り、各柱穴間は、1.4～1.7mである。掘方径は、45～65cm、柱穴径は、20～25cmである。ピットの方向も建物の傾きに不整いのものが多く掘方も雑な仕上げのものが多い。方位は、建物2、3と同様ほぼ磁北を向いている。建物の立地は、西側へ下がる緩斜面地で、掘方底部は、東側になるに従い深く斜面に添うように掘られている。出土遺物は、掘方埋土中より須恵器、土師器、鉄滓、獣骨があるが、これらの遺物は2次的な混入と考えられ時期を明確にするものは出土しなかった。

建 物 5

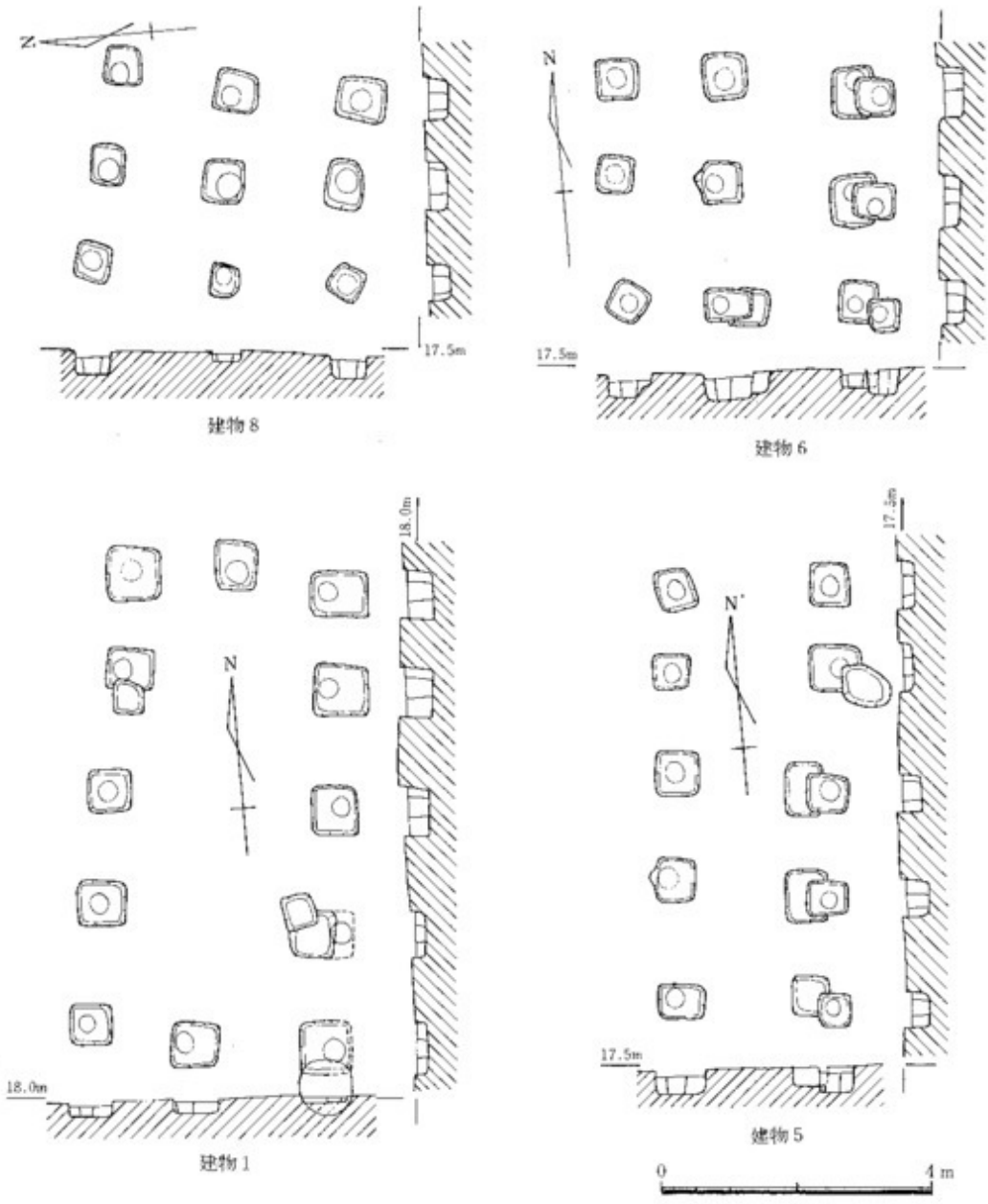
E－4．5区から検出した東西1間、南北4間以上の建物である。建物6と重複し、切り合いから当建物の方が新らしい。柱穴間は、1.3～2.4mを測る。ピットは、隅丸方形を呈し、一辺60～80cm、柱穴径は25～30cmを測る。方位は、N－5°－Eである。出土遺物は、須恵器、土師器等が若干出土したが、時期を明確にする遺物はなかった。

建 物 6

D．E－4区に検出した総柱建物である。規模は、2間×2間のもので、ピット一辺55～80cmの隅丸方形で形成され、柱穴間は、1.5～1.9mを測る。柱穴径は、平均約25cmである。時期は、建物5より古く、6世紀末から7世紀前半頃と考えられる。方位は、N－6°－E。

建 物 7

鍛冶炉3を被う建物と考えられ、次頃で説明を行う。



図－7　建物1、5、6、8

建 物 8

C－2．3区から検出した総柱建物で、規模は、2間×2間である。ピットは、一辺45～75㎝の隅丸方形を呈し、柱穴径は、30～35㎝を測る。柱穴内には柱痕が遺存しているものもある。時期は、6世紀後半頃と考えられる。方位は、N－10°－Eである。

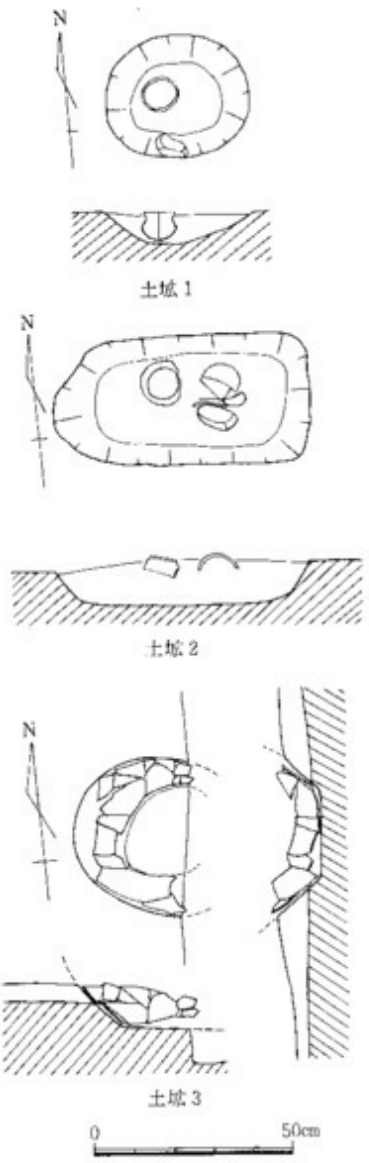
建 物 9

B．C－5区から検出した2間×1間以上の総柱建物である。ピットは、一辺40～60㎝を測り、柱穴間は、1.5～1.8mである。時期は、6世紀後半頃で、方位は、N－13°－Eに傾く。

F－4区に検出した東西35㎝、南北30㎝、深さ10㎝の規模を測る長楕円形を呈する土坑である。中央部に土師器小型丸底壷を正営位に納置した祭祀遺構である。掘方底部は、弧状を呈し、埋土は、茶灰色粘質土で小礫が多く含まれる。土師器は、土器棺として使用されたものであろう。器底部には少量の砂層が堆積しているところから、上部に木製蓋等をのせていた可能性がある。上部遺構は明確でないが、集落内で行われた祭祀の検出例として貴重なものである。

土坑 2

E～F－3区にかけて検出した東西方向に長い隅丸方形の土坑である。規模は、南北約50㎝、東西約90㎝、深さ35㎝を測る。埋土は、黒茶褐色粘質土である。底部は平底を成し掘方断面形状は南北、東西方向共に逆台形を呈す。出土遺物は、上層部分で大きな破片の土師器や須恵器が出土し、下層部分では小破片の土師器や須恵器が出土した。上層の遺物集積中に径15㎝位の自然石も数個混入していた。何らかの目的で同一排棄されたものであろう。時期は、8世紀前半頃と考えられる。この土坑と対応する時期の遺構は、土坑1、溝3、建物2等があり、相対的に遺存状態が悪い。これらの遺構は、上層遺物包含層の上面にあり、当初調査区の概略で述べたように東半部の上面がかなり撹乱と削平を受けている。



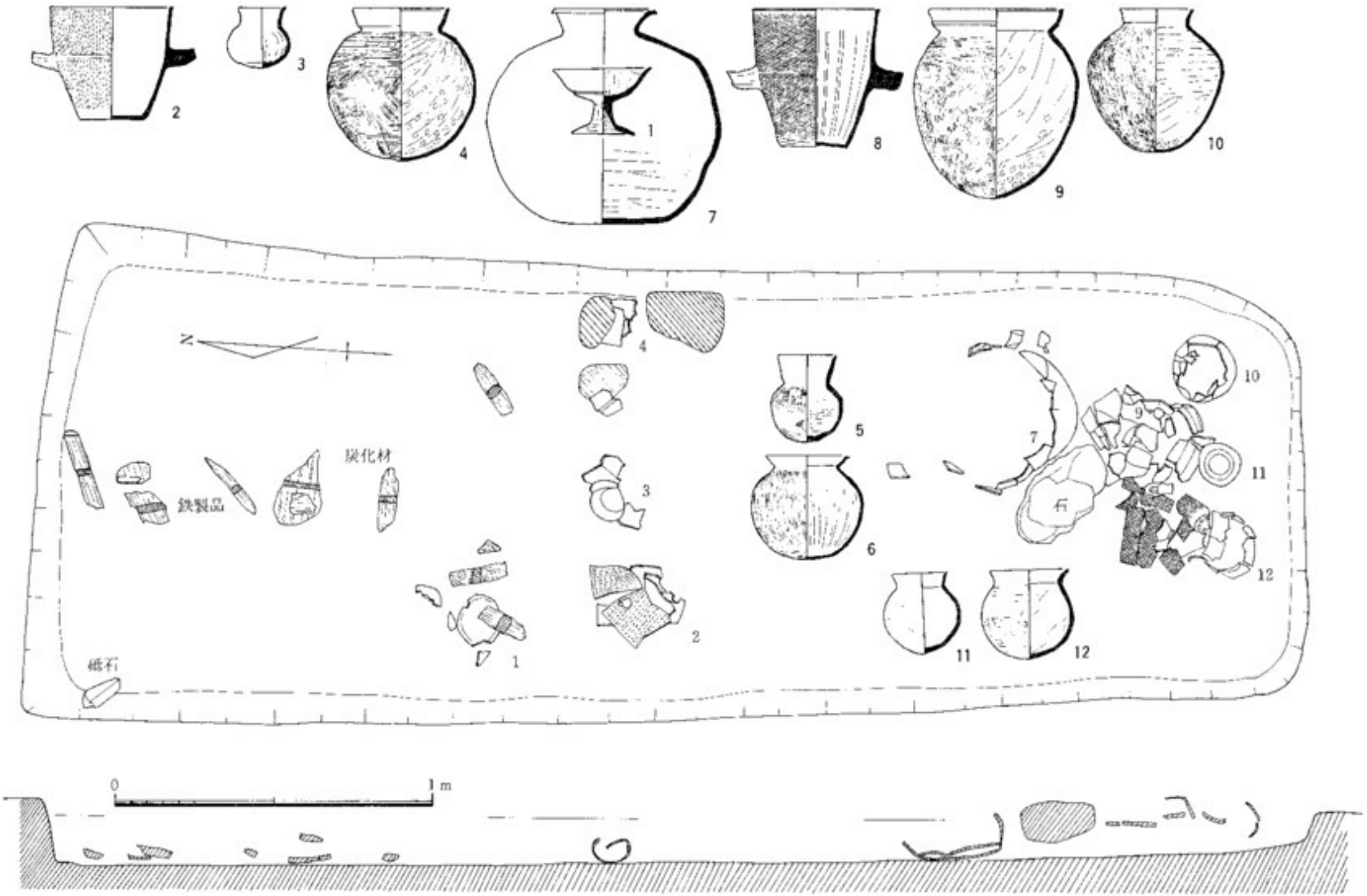
図－8　土坑1、2、3

土坑 3

G－1区に検出した土坑である。建物1の南東端のピットを切って掘削している事から建物1の廃絶後であり、また、黒褐色土の遺物包含層形成後と考えられる。検出規模は、直径約80㎝の円形、深さ15㎝である。内部には須恵器の甕が掘方一杯に埋め込まれており、その間隙はほとんど見られない。甕の底部は、円形に切り取られており、土坑底部が平底となっている。甕自体上部が削平されて体部下方しか遺存していないが、口縁部の一部が落ち込んでいた。時期は、8世紀代の遺構であろう。

土坑 4

C－1～2区の下層遺構で検出した竪穴住居である。層位は、茶灰色粘質土（5層）、黒灰色粘質土（6層）及び溝1の下層堆積土除去後に平面プランを検出した。規模は、東西方向が



図－9　土坑4

1.3～1.5m、南北方向約4.0m、深さ10～23cmを測る隅丸長方形である。底面は、ほぼ平坦を成し、地山（緑灰色粘質土）を掘削している。底面の高さは、東側が西側より２～５cm位高くわずかに西傾し、北側が南側より２～６cm低い。つまり、南東隅が一番高く、北西隅が最も低い。隣接している溝５～７は、何らかの関連があると考えられる。土坑の方向は、磁北に対して１°西へ傾き、溝５～７が東－23°－北を示し視感的に平行する。溝６も溝５と７に垂直でほぼ平行する。溝５と７は、傾斜変換点付近にあって、溝以東は少しの傾斜を持ち、以西は平坦化している。土坑端から溝５と６までの距離は、3.9m、2.3mを測る。

埋土中から多数の遺物が出土した。遺物は、土師質の壷、甕、甑、高杯、陶質の壺の他鉄器、砥石、炭化材、焼土等がある。土器類は、形態や大きさに差異が認められ、同一のものがなく、各器それぞれ用途があったと考えられる。

土器類は、土坑南半部に集中して出土した。南端部に３個の土器が東西方向に一列に置いていた。東側から甕(10)、壷（11、12）が等間隔に並び、10、11は正営位に、12は、北側に口縁部を向けて倒れている。12の壷の北側に甑(8)が同一方向に土圧によって拉げている。甑の東側で11の壷の北側に甕(9)が横倒する。８の甑と９の甕はセット関係を成すと考えられる。さらにその北側に石と陶質の甕がある。石は、横巾20.0cm、長さ37.0cm、厚さ13.0cmの偏平な石で底面より約４cm程高い。壷(7)は、石に接するように正営位に置かれ、口縁部が内側に落ち込んでいる。甕の底部は床面に接している。５の甕、６の壺は、口縁部を東側に向けて倒れていた。土坑中央部に、西側から甑(2)、壺(3)、甕(4)、が東西方向に一列に並んでそれぞれ床面に接している。２の甑は、口縁部を北側に向けて倒れている。３の壷は、口縁部が下方を向き、転倒した状態で出土した。４の甕は、３の壷の周辺と土坑東端部に散乱していた。この土器以外はほとんど完形のまま遺棄されている。

２の甑の北側から高杯が出土した。杯部が上方を向いたまま拉げている。この高杯は、出土した土器の中で最も北側に位置している。

４の壷の上下及び土坑東端に接して、よく焼成されて堅く凝固した黒茶褐色焼土が径50cm位に集中して出土した。恐らく造り付けの竈と考えられる。中には、竈の壁体となるサヌカイトを多く含む破片が壊れた状態で多く出土した。壁体の厚さは３cm位のものが多い。

この他、鉄器と砥石と炭化材がある。鉄器は、炭化材の下方から出土し、砥石は、土坑北西隅から落ち込んでいた。炭化材は、11点以上を数え、板状のものと棒状のものに分かれる。板状のものは４点あり、幅10～15cmを測り、２～４cmの厚さが遺存する。棒状のものは、角材か丸材か明確でない。その径は、３cmのものと５cmのものがあり、前者が１点だけ、後者が６点以上を数える。出土位置は、土坑北半に片寄り規則性のある方向を向いている。中央部にあるものは、南北方向、北側にあるものは東西方向に概ね倒れ、底面より３～13cm位浮いた状態である。

井戸－2

C．D－4区から検出した奈良時代の井戸である。層位は、茶灰色粘質土（第5層）の下層にあたる。板材を横位に組み合せた井戸で、掘方は、ほぼ方形に掘り窪め、規模は東西230～242㎝、南北173～213㎝を測る。枠内規模は、東西92～95㎝、南北84～87㎝、深さ110㎝を測る。掘方埋土は、上層が黒灰色砂礫土、下層が暗青灰色粘質土で、水の浸透が容易な様にすり鉢状の埋め方である。木枠は、掘方の中央部に各端部から40～70㎝の距離を隔てて組合せてある。掘方埋土中の遺物は、細片が多く時期を明確にするものは出土しなかった。

木枠内埋土は、上から灰茶色砂土、灰白色砂土、暗青灰色粘質土がある。暗青灰色粘質土は、約30㎝の厚さで堆積し、下層に10～25㎝の拳大から人頭大の自然石多数と径5㎝以下の小礫が2、3重に敷かれていた。

出土遺物は、暗青灰色粘質土及び礫中から少量ながら出土した。遺物は、須恵器、土師器、獣骨、木片等がある。その中で土師器鍋は、内部に馬の頭骨を納置した状態で出土し、器体も大半が遺存していた。馬は、水神に関わる祭祀の犠牲にされる動物として知られており、今回の出土状況はその典型的な好例と云える。また、井戸は、祭祀が行われた後排棄されている。

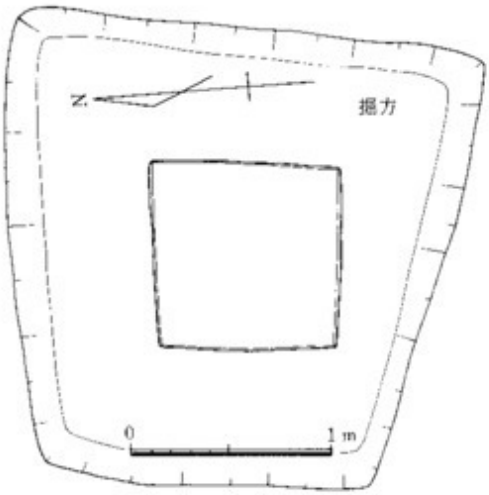
木枠は、南北と東西に木板をそれぞれ横位に積み上げ、各交差部は、枘穴を刳貫き直角になるように組み合わせている。各面5枚ずつ遺存する板材は、長さが115㎝と同一で、幅は上方から、16、21、21、21、27㎝、厚さは4、7、8、8、8㎝を測る。下方の板材ほど遺存状態が良好である。板材の柾目部は、手斧による削り痕が顕著に遺っている。

鍛冶炉1

E－3区から検出した鍛冶炉である。建物5と6と鍛冶炉3との間に存在し、調査区の中央部に位置する。層位は、茶灰色粘質土除去後に検出された。長軸を南北方向にとり、長楕円形平面を成す。南北35㎝、東西23㎝、深さ3㎝を測る。上部が削平を受け下部だけが遺存している。埋土は、茶灰色粘質土が占め、炭、炉壁、鉄滓等が多く含まれていた。炭は、薄い層を成している部分と木炭が混在している部分がある。炉壁は、高温に酸化された黒茶褐色焼土で長軸方向の端部に堆積していた。鉄滓は、炉中央部底から径10㎝以下のものが数個出土した。炉底部断面は、舟底状を成す。時期は明確に出来ないが、層位的に7世紀末頃から8世紀代にかけての鍛冶炉と考えられる。

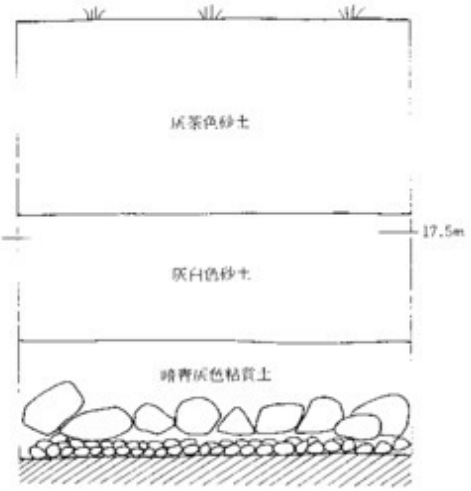
鍛冶炉2

茶灰色粘質土除去後に炉1から南側へ1m離れた場所で検出した。規模は、南北20.0㎝、東西32㎝、深さ3㎝と炉1と類似した大きさである。炉の構造は、炉1と同様である。埋土中から炭、炉壁、鉄滓等が出土した。炭は、層状を成さず斑点状に混入していた。炉の側壁と考えられる魂も少量みられた。炉の中央部底に鉄滓が溜まっており、大きさは、18×15×3㎝を測る長楕円形のいわゆる椀形の鉄滓である。上面は、凹状を呈し、炭の小片が多数半溶融鉄の中



下層遺物出土状況

上層遺物出土状況



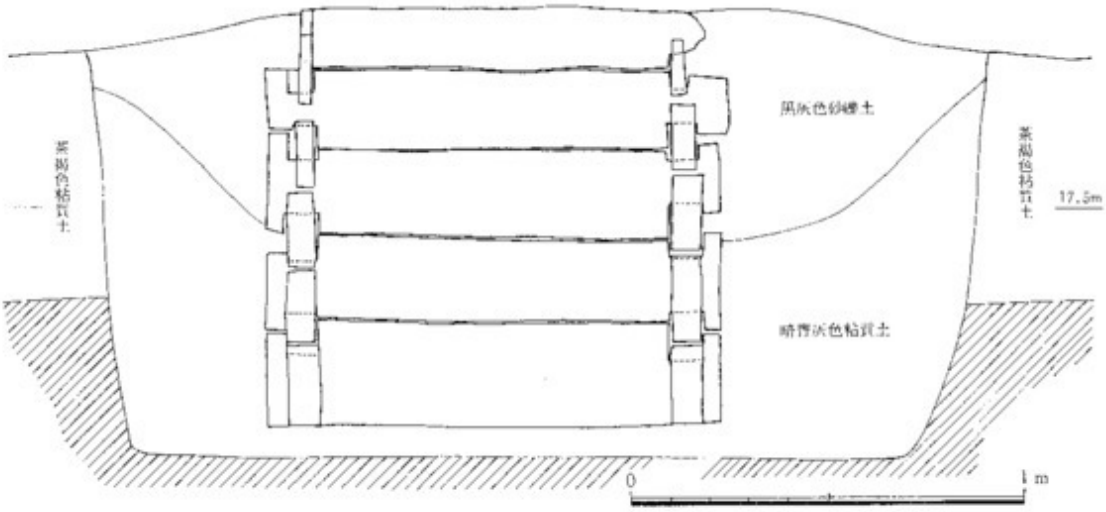


図 10 井戸2

に混入している。

炉底部は、炉１と同様熱影響を受け、黒茶褐色に酸化されている。

炉周辺の遺物包含層から羽口が出土しているが、炉のどの部分に装着するものか明確でない。

時期は、炉１と同時期と考えられ、７世紀末頃から８世紀代にかけてのものであろう。

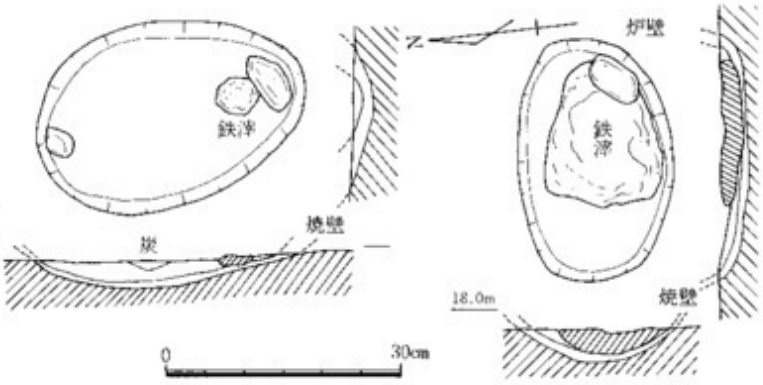


図 11　鍛冶炉１、２

鍛冶炉３

ＤＥ－２．３区から検出した周溝を持った鍛冶炉である。形状は、炉と金床台代わりに使用されたと考えられる台状遺構が並び、この二つの遺構を取り囲むように周溝が巡り、さらに、その東南北方向を柱穴が取囲んでいる。同炉が稼動していた時存在していた遺構は、東側に建物３、西側に建物８、北側に建物５と６、南側に溝１等がある。炉の稼動時期に溝１及び４が埋没したと考えられ、その埋土中から多くの鍛冶関係遺物が出土している。

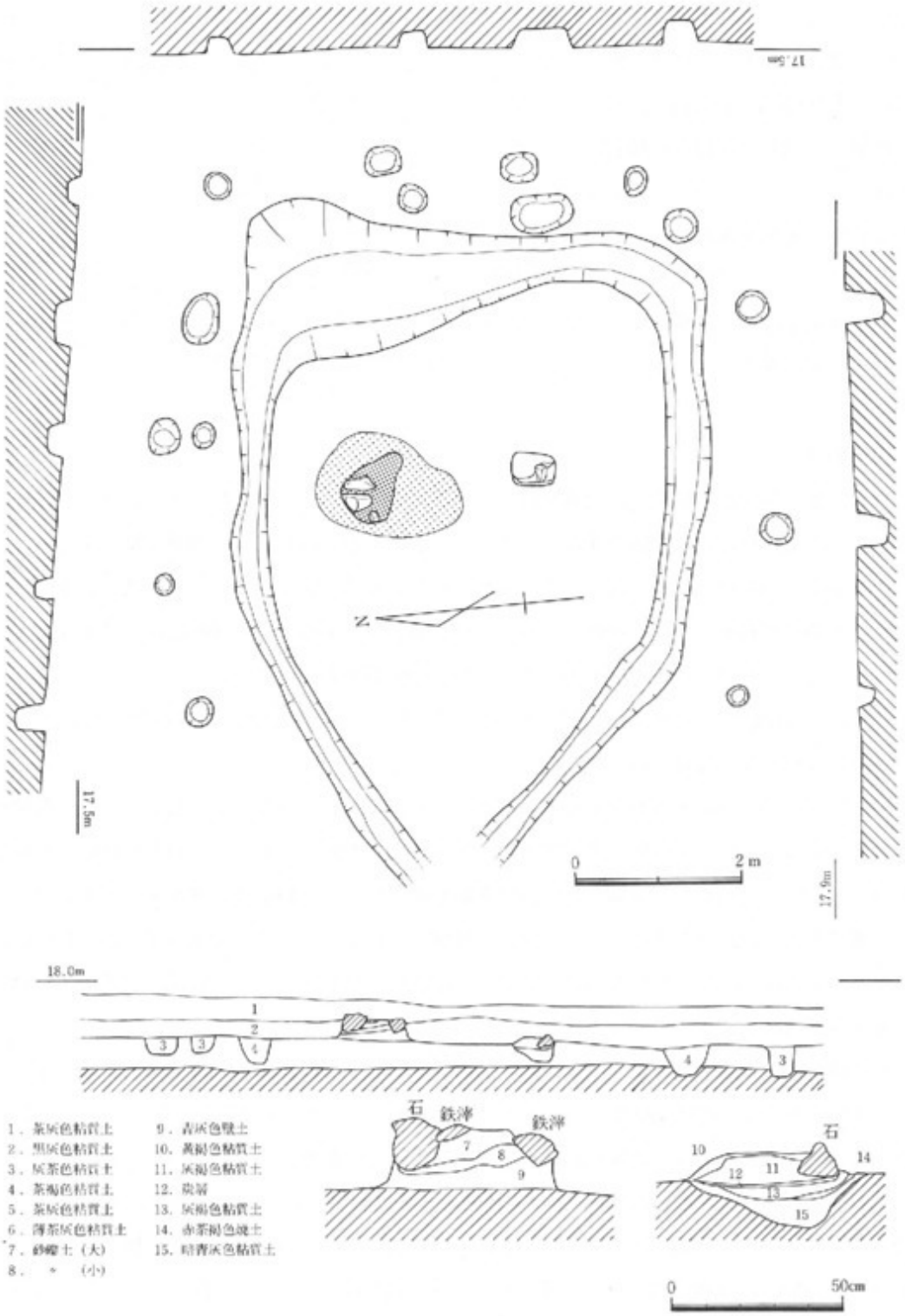
層位は、茶灰色粘質土及び黒灰色粘質土の下層である。立地は、西向き及び南向きに２～４°の傾斜角度を有する緩斜面地である。

炉は、40×55㎝の隅丸方形を呈し上部が削平され下部だけが遺存している。上層は、黄褐色粘質土が全面を被い、南西隅に20×20㎝の三角柱状の石が置かれている。11と13層は、灰褐色粘質土であり、12層はその間層として薄い炭層が噛んでいる。14層は、赤茶褐色で焼成を受けた土層である。炉底部とするにはあまりにも焼成程度が少ないので、湿気抜き等の炉製作前の工程として実施した焼成痕であろう。15層は、暗青灰色粘質土である。底部は、茶灰色粘質土を掘込み丸底状を呈す。

台状遺構は、東西85㎝、南北55㎝、高さ20㎝を測る。上層は、10～30㎝大の石が３個並べられ、鉄滓を多く含んだ堅く凝固した上層である。中層は、10㎝以下の砂礫を多く含む。下層は、青灰色砂質土で壁土のように練られた土層である。炉との距離は、1.4mを測る。

周溝は、幅25～155㎝、深さ20～35㎝を測り、総長20mに及ぶ。掘方断面は、逆台形を成し底部は平底である。茶褐色粘質土の埋土中から須恵器、土師器の日常雑器類と羽口、鉄滓、砥石等の鍛冶関係遺物が出土した。羽口は、全点数180点のうち、完存に近いものが35点以上を数える。鉄滓は、総重量約39kgを測る。羽口と鉄滓は、溝全体から均一的に出土した。

ピットは、周溝の外側に接して検出した。東西４間（5.9～6.2m）、南北４間（6.4m）で西側のピットは検出されなかった。方位は、Ｅ－10°－Ｓに傾き、建物１と８と９が類似してい

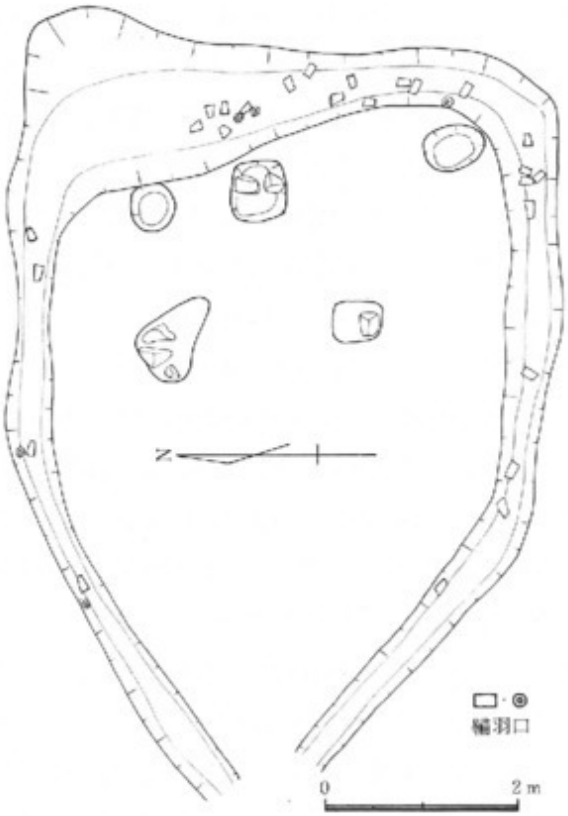

17.5m
N
17.5m
0
2 m
17.9m
18.0m
1
2
3
3
4
4
3
1．茶灰色粘質土
2．黒灰色粘質土
3．灰茶色粘質土
4．茶褐色粘質土
5．茶灰色粘質土
6．薄茶灰色粘質土
7．砂礫土（大）
8．〃（小）
9．青灰色砂土
10．黄褐色粘質土
11．灰褐色粘質土
12．炭層
13．灰褐色粘質土
14．赤茶褐色砂土
15．暗青灰色粘質土
石
鉄滓
鉄滓
7
8
9
石
10
11
12
13
14
15
0
50cm

図－12　鍛冶炉3

る。時期は、六世紀末頃から７世紀初頭と考えられる。

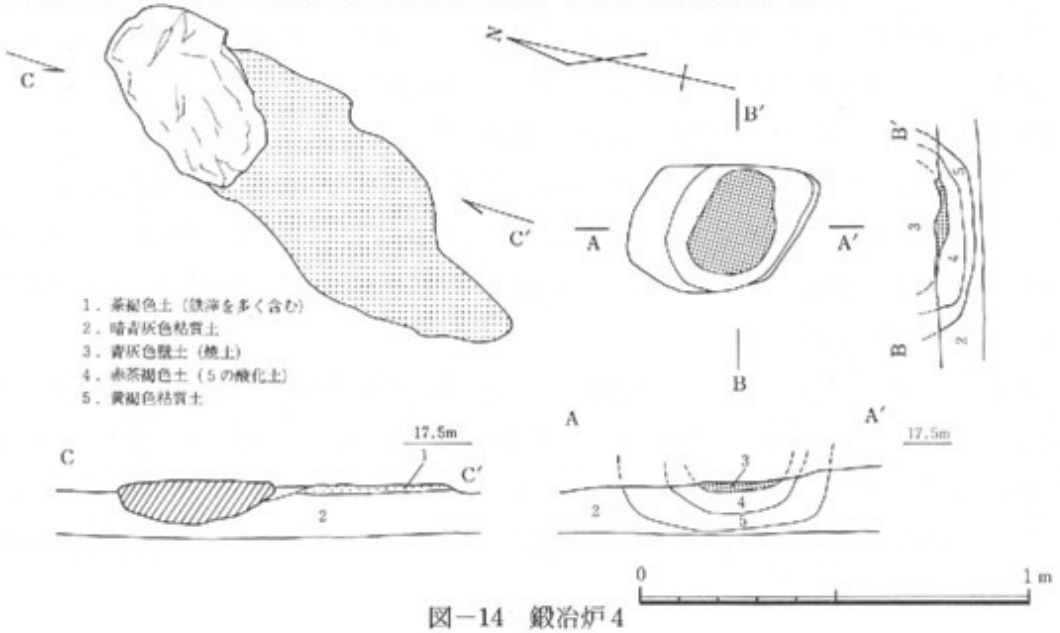
鍛冶炉４

Ｂ－３．４区から検出した炉で鍛冶炉３と類似した構造を持つ。層位は黒灰色粘質土下層から検出した。構成は、炉と金床台に利用されたと考えられる台状遺構を有し、周溝やピット等は検出されなかった。地形は、炉３と同様の西向きの緩斜面地に位置する。溝４の東側肩部が西側１ｍのところにあり、同溝の埋没時期と炉の操業時期が同じ頃と考えられる。



図－13　輔羽口と出土状況

炉は、東西32㎝、南北44㎝の隅丸方形を呈する。上層は、炉底と考えられる還元された青灰色焼土が22×27㎝の範囲で平面的に検出した。その下層は、黄褐色粘質土が10～20㎝の厚さで敷かれている。上層の炉底部に近い部分は黄褐色粘質土が約15㎝の厚さで、黒褐色又は赤茶褐色に熱影響で酸化している。30×50㎝の偏平な石を中心にして、その周辺に鉄滓を非常に多く含んだ土層が拡がる。



図－14　鍛冶炉４

弥生住居１

ＥＦ－２．３区から検出した隅丸方形の竪穴住居である。検出規模は、東西方向6.6m、南北方向4.4m、深さ12～22㎝を測る東西方向に長い住居である。層位は、古墳時代の遺物包含層である薄茶灰色粘質土及び弥生時代の遺物包含層の黒茶灰色粘質土の下層にあたる。立地は、生駒山地から派生した丘陵尾根の裾部付近から拡がる扇状地状低地上の西向き緩斜面地（傾斜角度４°）である。他の遺構との関わりでは、南側へ３m離れて溝１の谷状落ち込みの縁辺部と10m西側へ行くと溝４の肩部があり、やや安定した丘陵端部と云える場所にあたる。住居の標高は、Ｔ．Ｐ．18～19mに位置する。

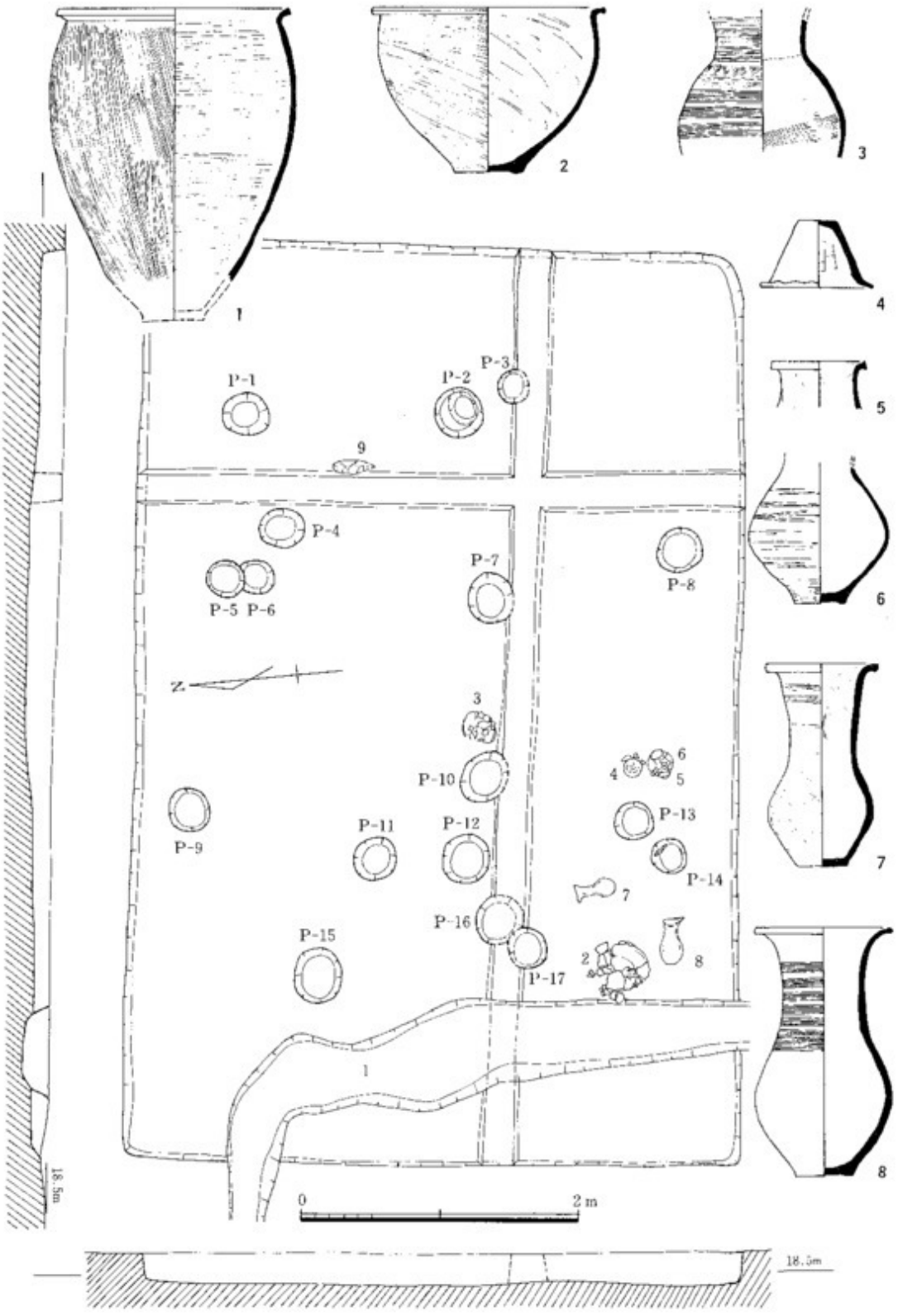
薄茶褐色砂質土の埋土中から弥生土器とサヌカイト片が少量出土した。竪穴住居の床面は、西向きの傾斜角度２°と南北方向はほぼ平坦を成す。床面上から完形に近い土器が数個出土した。土器類は、壺４個体、甕２固体、蓋１固体が住居南西部に偏して出土した。甕(1)は、住居西側位置する鍛冶炉３の周溝の隅付近から出土した。周溝底部と床面がほぼ接している事から鍛冶炉３の遺物として取上げたが当住居の遺物と考えられる。甕(2)は、ピット17の直ぐ南側から土圧によって拉げた状態で出土した。

甕は、器形も大きく破片化したものが多いが、壺は完形に近いものの方が多い。２の甕の東側と南側に接して壺(7.8)が出土した。７の壺は、口縁を北側に向け、８は、東側に倒れている。ピット13の東側に壺(5.6)と蓋形土器(4) が並んで出土した。両者とも正営位の状態である。壺(3)は、住居中央部のピット10に東接して出土した。

サヌカイトは、住居埋土及びピット中から17点出土した。９の石槍は、床面より６㎝程高い層位から出土し、サヌカイト片の出土したピットは、ピット11と14である。

床面から合計17ケの柱穴ピットを検出した。ピットの規模と形状は、径23～40㎝の円形ピットである。配列は、住居中央部に２ケの柱穴が位置し、そのまわりに６柱又は７柱になるように柱穴が巡る。中央部の柱穴は、ピット７と10が1.3mを隔てて住居南北辺と平行して若干南側寄りに位置している。ピット７は、他のピット深さよりやや深く23.3㎝を測る。ピット７と10を中心としてまわりを巡る柱穴は、竪穴の向きと平行し、ピット５と９が住居北辺と平行しピット８と14が南辺と平行する。ピット間は、1.75、2.23mを測り、南北辺から27～50㎝内側に位置している。東側のピット２と対応する西側ピットは、鍛冶炉３の周溝によって削平を受けておりその存在は確認されなかった。

重複しているピットは、５と６，16と17があり、外側に位置するピット５と17は、内側に位置するピット６と16より新しいものであり、建替え時に住居の拡大が実施された事を示すものと考えられる。建替えは、２回以上みられる。各ピット間の距離は、1.6～2.3mの間隔がある。当住居の入口を示す痕跡あるいは貯蔵穴は検出されなかった。時期は、弥生時代中期前半である。


1
2
3
4
5
6
7
8
P-1
P-2
P-3
P-4
P-5
P-6
P-7
P-8
P-9
P-10
P-11
P-12
P-13
P-14
P-15
P-16
P-17
9
N
0
2m
18.5m

図－15　弥生住居 1

第2節　遺　物

調査区から出土した遺物は、遺構及び遺物包含層からコンテナ95箱分である。土器類は、須恵器、土師器、弥生土器が67箱と鉄滓、鞴羽口、砥石等鍛冶関係遺物12箱、瓦3箱、獣骨2箱木器10箱、石器1箱出土した。遺物の説明は、各遺構から出土した遺物を中心に、遺物包含層出土遺物、製塩土器、鞴羽口、鉄滓、砥石、石器等項目別に述べていきたい。

溝1出土遺物（図－16～19．　1～49．　196～247）

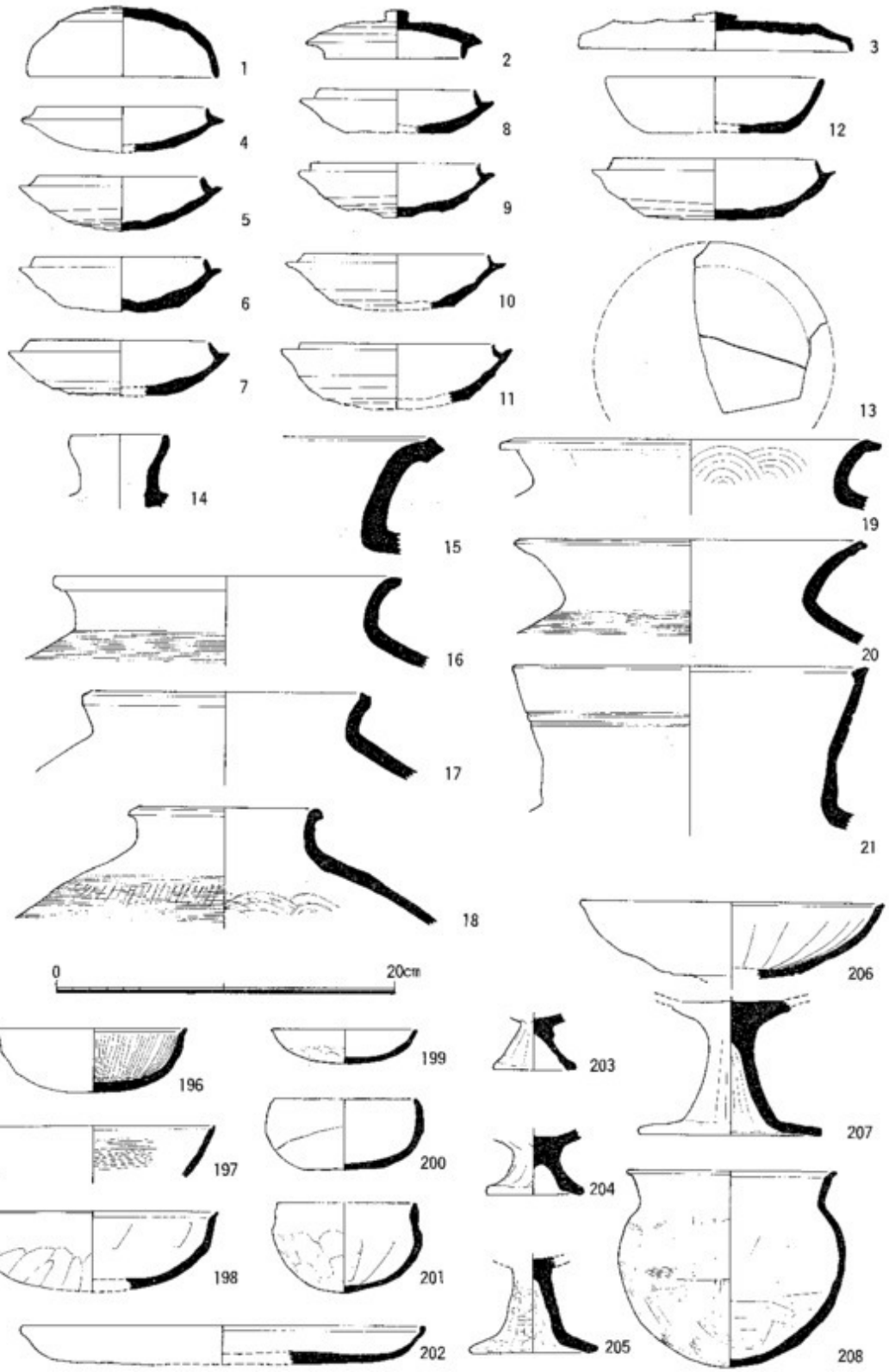
溝1は、調査区南端から検出した遺構で、埋土中から多くの遺物が出土した。層位的に分別して遺物を取り上げた。須恵器、土師器、鉄滓、鞴羽口、砥石、瓦、獣骨、木器、桃核がある。

上層から出土した遺物の須恵器には、杯蓋身、壷、甕がある。杯蓋(1～3)は、3形態のものがある。1は、口径11.3㎝、天井部は丸く、口縁部と天井部との境に稜がみあたらない。2は、台付長頸壷の蓋であろう。つまみを伴い、内面にかえりを有した小型のものである。3は、天井部が、平らに近くなって偏平な擬宝珠様つまみを付す。杯身に比較して数量的に少ない。1の形態のものが大半を占める。

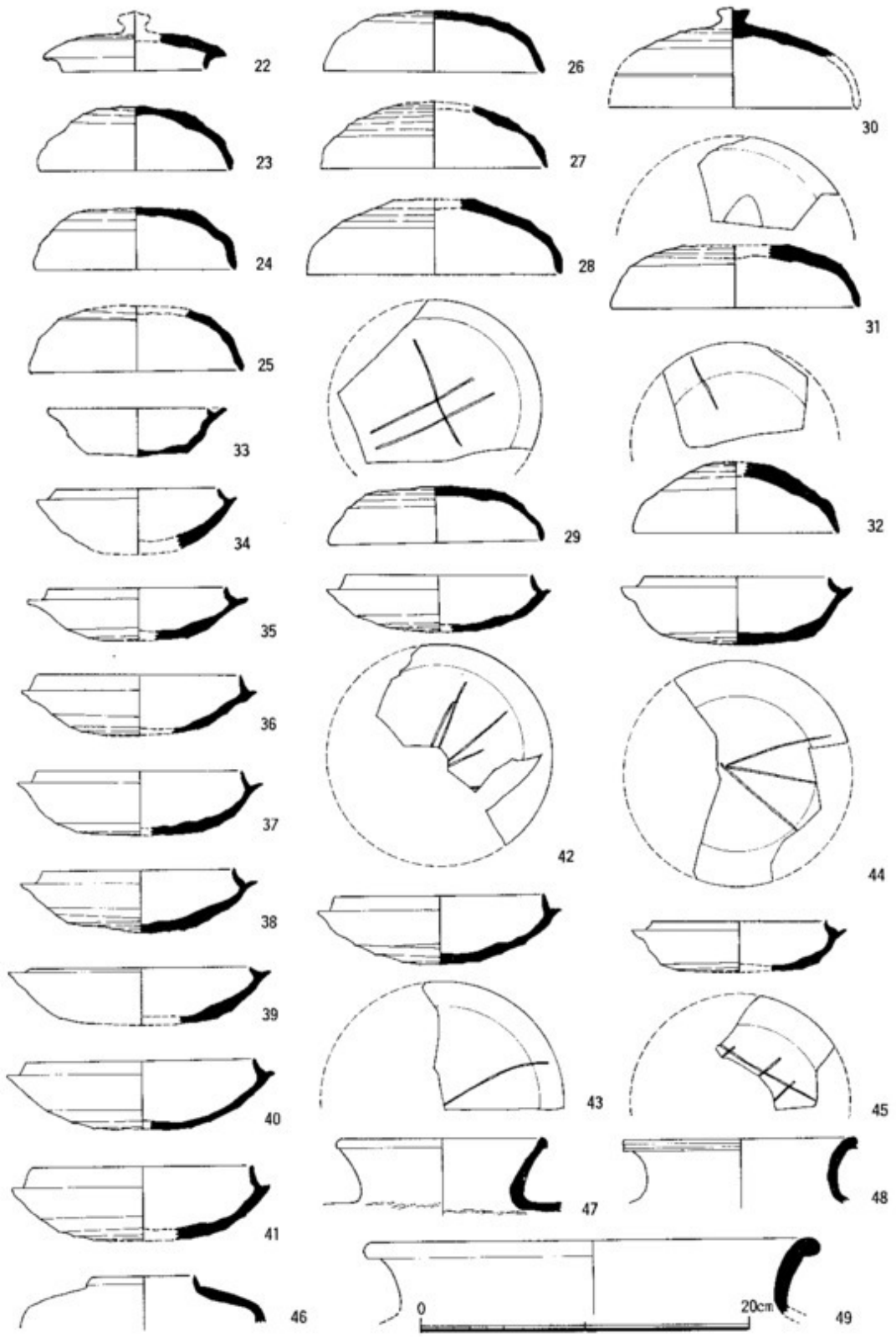
杯身(4～13)は、口径9～12㎝とやや小さく、底部が偏平化し、たちあがりも短くなっている。底部は回転ヘラ削り調整によるが、8の底部は、ヘラ切り未調整である。たちあがりが消滅し、底部が平らなもの(12)も若干出土している。13の底部には、「一」のヘラ記号がみられる。14は、平瓶又は提瓶の口縁部である。端部が内湾気味に上方に伸びる。15～21は、壷又は甕の口縁部である。口縁端部に断面三角形の小さく突出するものと小さく外側に外反するものが多い。内面に同心円文叩きと外面に平行叩き又はカキ目調整がみられる。

土師器は、杯、皿、高杯、壷、甕等がある。杯類は、内面に暗文のみられるものと板ナデ調整だけのものがある。197は、黒色土器である。高杯は、ミニチュア型のものと中型のものがある。脚端部は、両者共に水平方向に折り曲げたもので、小型になるもの程水平に伸びた端部の長さが短い。

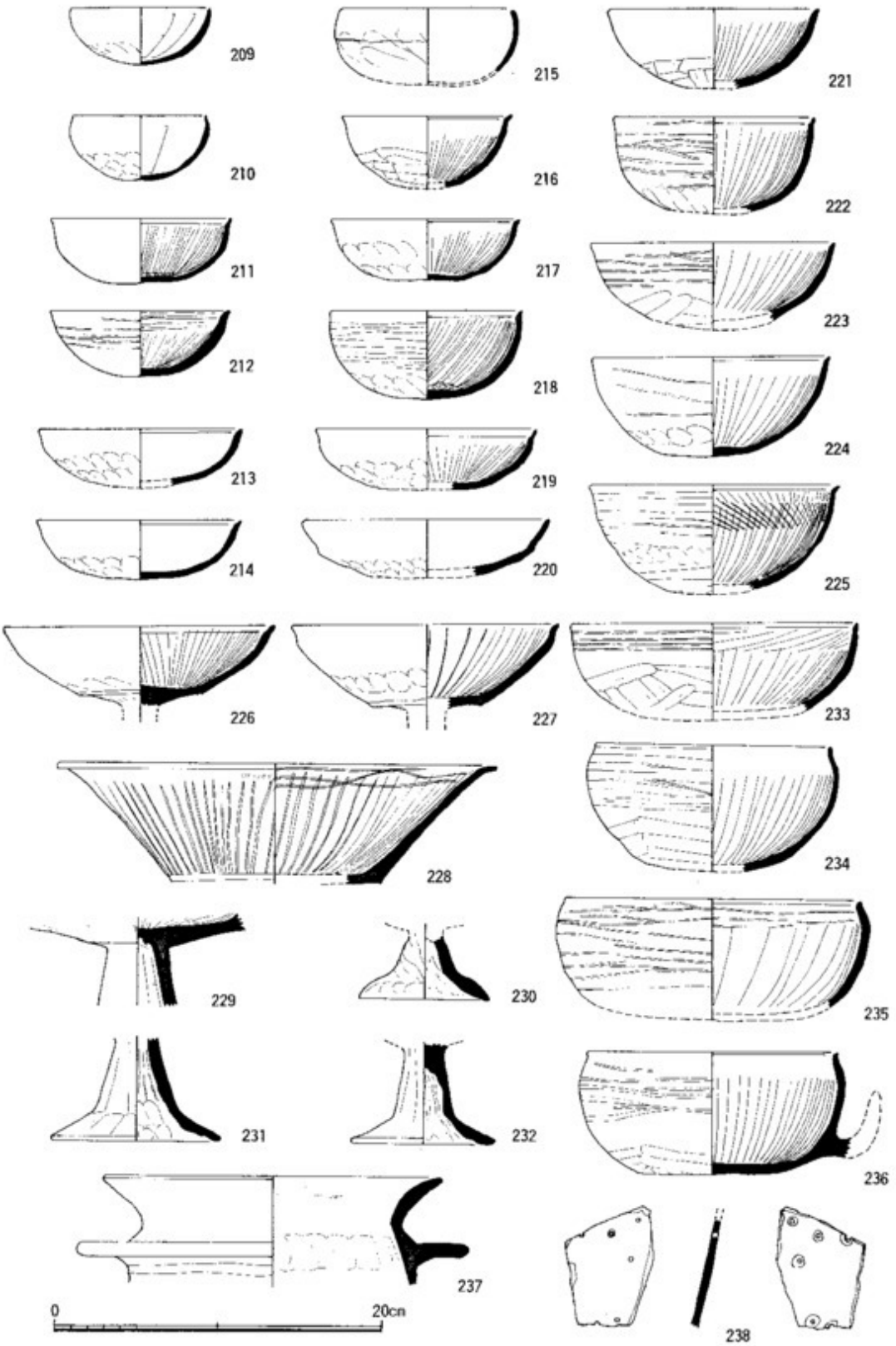
下層から出土した遺物は、須恵器、土師器、鉄滓、鞴羽口、製塩土器、獣骨、木器、桃核等がある。須恵器は、ほとんど杯類が占め、その他の器種として壷と甕が少量ある。杯蓋は、天井部と口縁部との間の稜はほとんどみられず、端部も丸く仕上げられている。口径11.7～15.3㎝を測り、上層出土のそれよりやや大きい傾向を持つ。台付長頸壷及び高杯の蓋が出土している。杯身は、口径10㎝以下のものが数点ある以外10～13.8㎝のものが大半を占める。たちあがりは、短くなったものが多くすべて受部の上面より上方にみられる。口縁端部は、蓋より薄く尖がり気味のものが多い。ヘラ記号を杯の天井部や底部外面に施す例が多く、ヘラ記号の痕跡が2種類の道具を使用しているものもみられる。



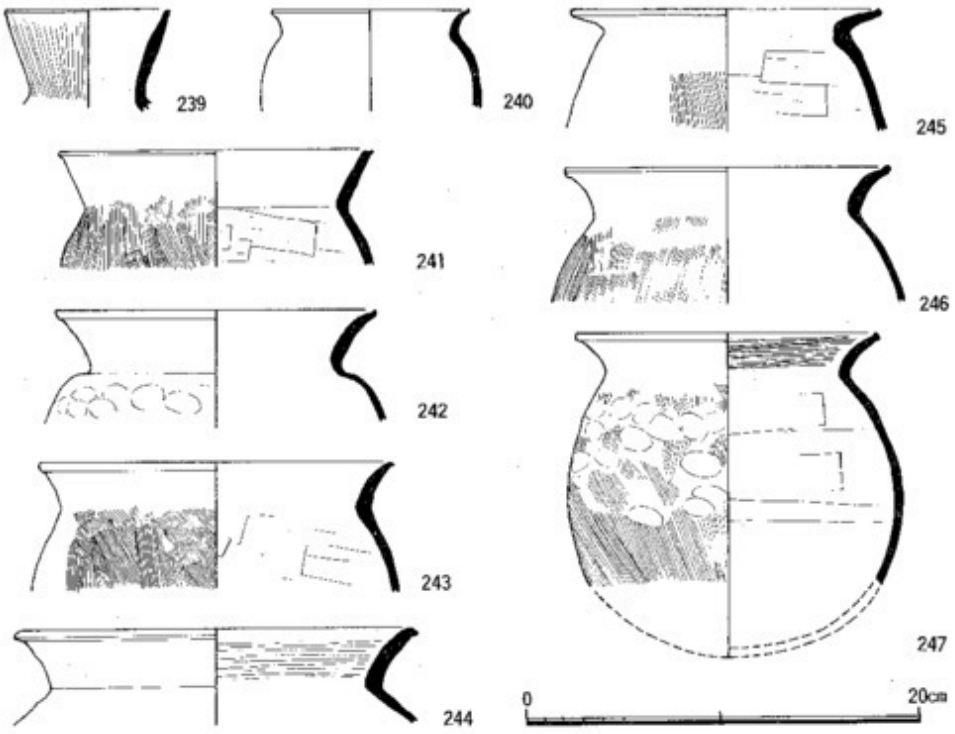
図－16　溝１上層出土遺物



図－17　溝１下層出土遺物　その１



図－18　溝１下層出土遺物　その２



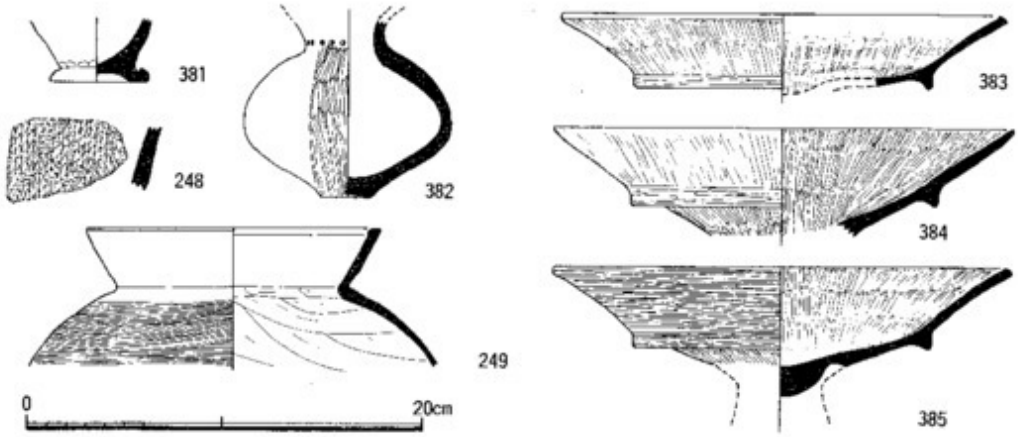
図－19　溝１下層出土遺物　その３

また、31の蓋の天井部に朱が塗られている例もある。このような例は、大県84－１次調査区から多数出土している。朱の器として使用したものと点、十、一に記号を付したものがある。器種は杯に限られている。ヘラ記号は、焼成前に工人によって施されたものであるが、施朱については、消費地における何らかの使用区別を表わすものである。出土例は、鍛冶関係の遺構及び遺物と強い関連性を持つと考えられる。

土師器は、杯、鉢、高杯、羽釜、壺、甕、甑、移動式竈等がある。杯類は、内面に暗文が施されているものといないものとがある。前者の口縁端部は、外反して内傾する段を持つものあるいは沈線状の段を持つものが多い。後者は、口径が小さいものと端部が内傾する段を持ち器高がやや低いものがある。鉢は、口縁部が内弯するものとしないものがある。外面にヘラ磨き調整を施すものが目立つ。236は、把手付鉢である。色調は、薄茶褐色を呈し、胎土は、石英、長石、金雲母等を含む。大型の高杯(228)は、荒い縦ハケ後ヘラ磨きを施す。

237は、南河内西麓産の胎土の羽釜である。甑は器形が大きいためか実測出来うるものは少ない。238は、古式の体部の破片である。数コの円形の穴がみられる。焼成後に錐によってあけたものである。

鉄滓は、上下層から出土し、上層から22ｇ、下層から1636ｇ重量を測る。鞴羽口は、下層から20点出土。獣骨は、上層から16点、下層から125点出土している。主に馬の骨が占める。



図－20　溝２、５、６、７出土遺物

溝２．５．６．７（図－20.248.249.381～385）

溝２から出土した遺物は、須恵器、土師器、弥生土器がある。須恵器と土師器は、それぞれ細片で実測しうるものはない。溝の時期は、奈良時代前後と考えられる。382は、弥生土器の壷で溝埋没時に混入したものであろう。口縁部は欠損しているが、体部はほとんど遺存している。体部の中央部は、横方向に大きく張って楕円形を呈す。頸部に全周21個の小さな竹管文を施し、底部は、平底を成す。体部は、縦方向のヘラ磨きがみられる。胎土は、やや荒いもので金雲母や角閃石を含む当地域産のものである。

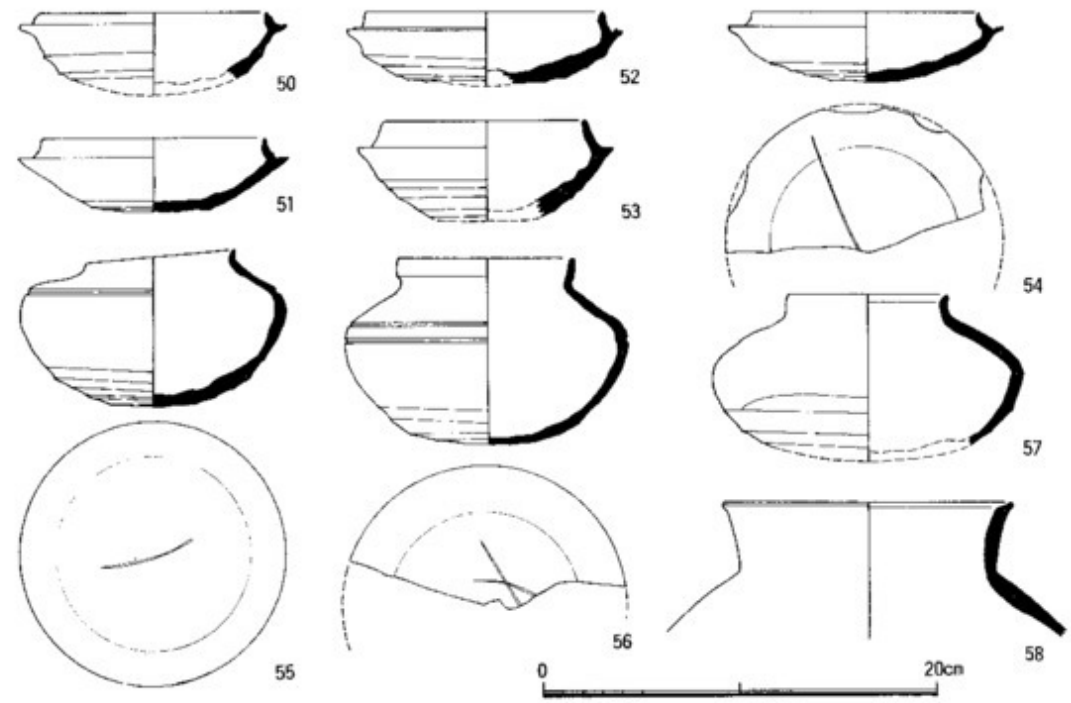
溝５から出土した遺物は、248の甕の体部と249の甕がある。248は、外面に縄席文叩きを施す。色調は、茶褐色を呈し、胎土は、金雲母、くさり礫、角閃石を含み当地域産と考えられる。249は、口縁端部が内側へ肥厚する布留式土器である。器壁が薄く外面はハケ目調整、内面はヘラ削り調整を施す。この他に弱干の弥生土器も含まれていた。

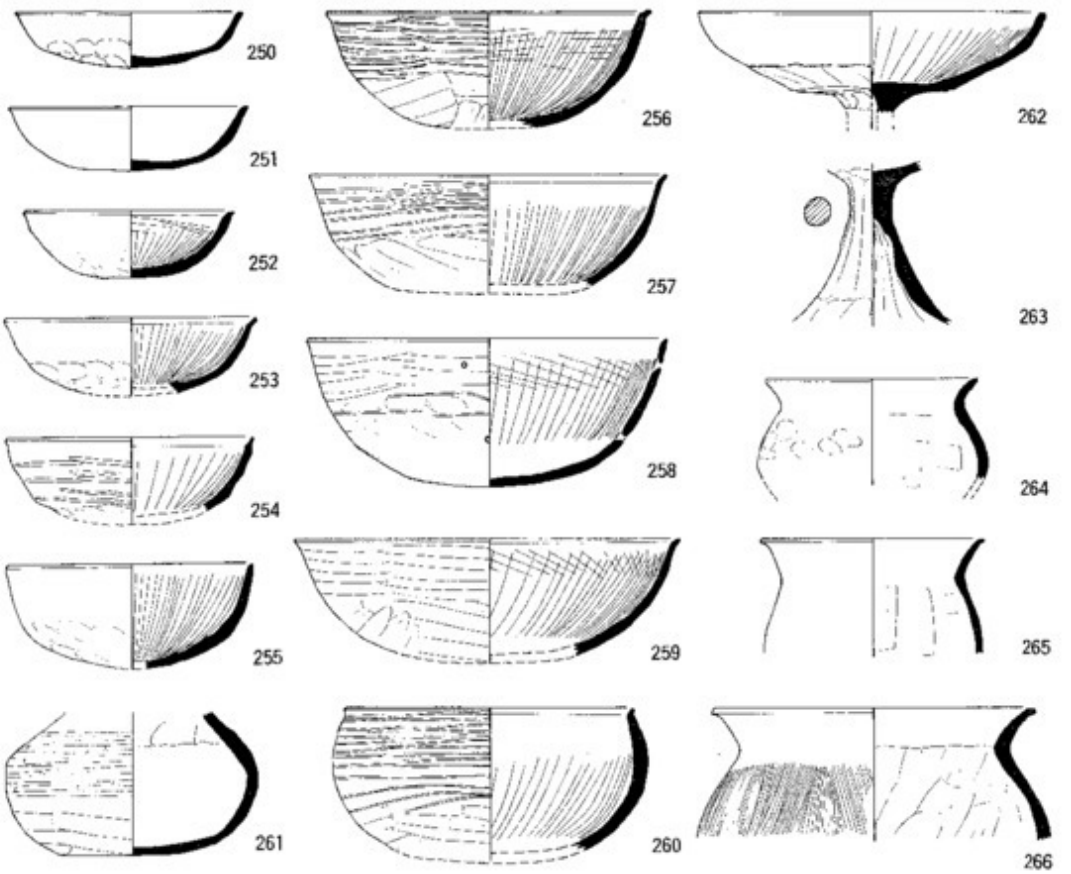
溝６から出土した遺物は、弥生第５様式のものがほとんどを占める。図示したのは、高杯２点である。口縁部は外上方に伸び、端部はわずかに内側に肥厚する。外面に断面三角形の凸帯を巡らす。内外面の調整は、密なヘラ磨きである。384は、内外面朱塗りである。胎土は、石英、長石、金雲母、角閃石を含み、色調は、淡茶褐色である。

溝７からミニチュア土器(381)と高杯(383)が出土した。381は、小型の鉢か。383は、溝６出土の高杯と同形態で、これも外面朱塗りである。

溝４（図－21.50～58.250～266）

溝４から出土した遺物は、須恵器、土師器、鉄滓、鞴羽口、木器、獣骨等がある。須恵器は、杯、短頸壷、甕等が出土した。杯身は、口径10.1～12.0㎝のものがあり、たちあがりが短く受部上面より高くなっている。50と52は、溝上層出土である。下層出土の杯は、前者のそれと比較してたちあがりが少し長いものが多い。


50
52
51
53
54
57
55
56
58
0
20cm


250
256
262
251
257
263
252
253
258
264
254
259
265
255
261
260
266

図－21　溝4出土遺物

55～57は、短頸壷である。55は、口縁部が短く端部が尖がり気味に終り、肩部に一条の沈線が巡る。56は、口縁部が外反気味に上方へ伸び、端部が尖がり気味に終る。それぞれ底部付近は回転ヘラ削りを行う。55. 56の底部にヘラ記号がある。58は、甕で、口縁端部が内傾する段を持つ。内外面は、回転ナデ調整である。

土師器は、杯、高杯、鉢、壷、甕等がある。杯は、内面に暗文を施したものと施さないものがある。前者が大半を占め、後者は少量である。後者は、前者より口径が小さく、器高も低く偏平なものである。口縁端部は、わずかに外反して内傾する平坦面を持つ。杯では、255のみ上層出土である。鉢は、杯と同様の形態のものと口縁部が内弯するものがある。内面には放射状暗文があり、外面には、上方がヘラ磨きで下方がヘラ削りである。色調は、橙色系統のものが多く、胎土は、石英、長石、金雲母、くさり礫を含む。258は、体部に２ヶ所の円孔がある。高杯は、杯と脚部の接合部にわずかの段が遺存している。その上方には指ナデ調整によって出来た爪跡が顕著にのこる。壷(261)は外面よヘラ磨きとヘラ削りを施す。

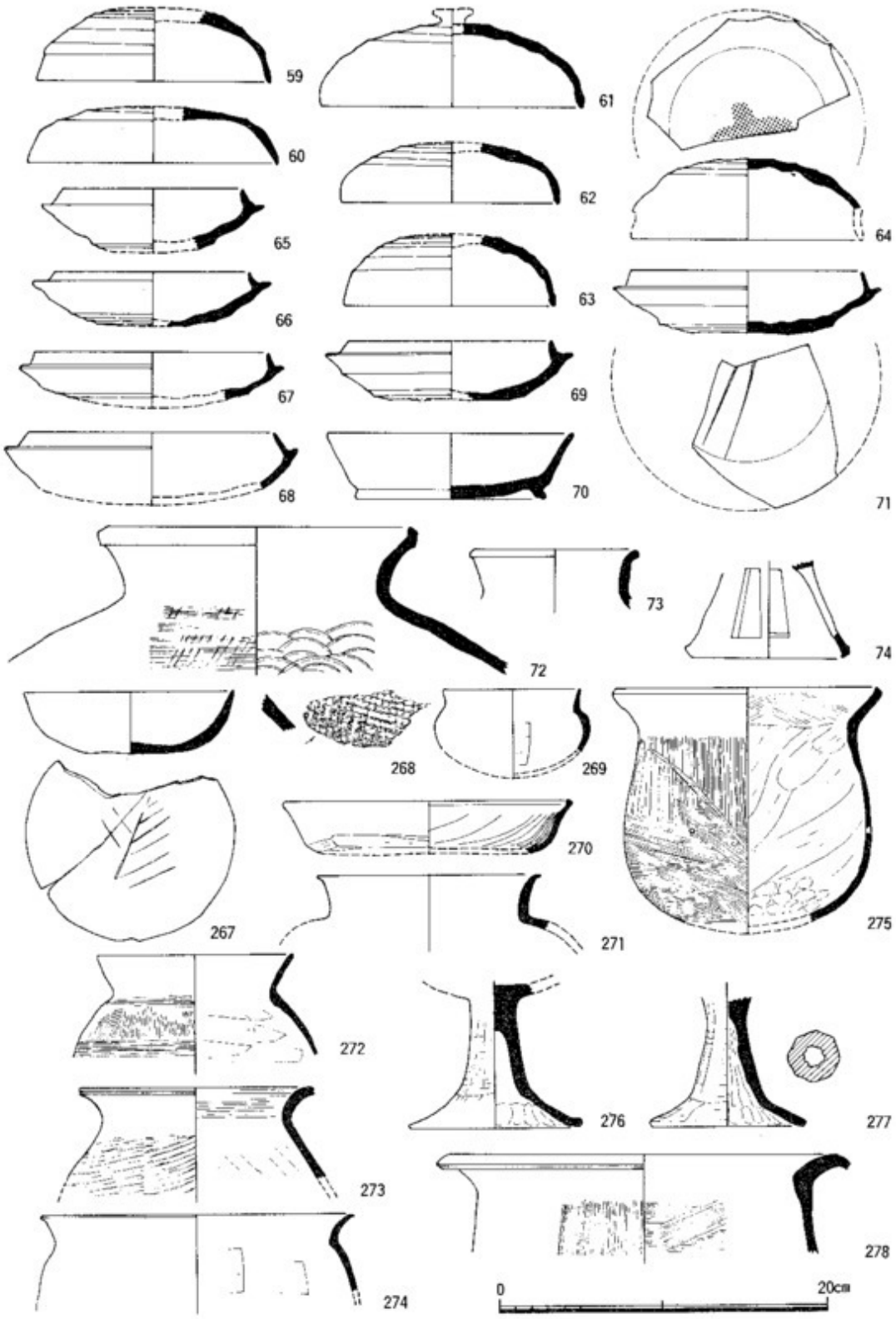
264～266の壷及び甕は、外面をハケ目調整するものが多く、内面を板ナデ調整するものが多い。鉄滓は、318ｇ、鞴羽口は、９点。獣骨は、22点出土している。土器類及び鍛冶関係の遺物は、鍛冶炉４の直ぐ西側付近から多く出土している。

ピット出土遺物（図－22.59～74.267～278）

ピット及び土壙から出土した遺物は、コンテナ３箱分出土した。これは、ピットの数も多くピット規模も大きい事からこれだけ大量に出土したのであろう。出土層は、柱穴掘方の埋土中からほとんどが占め、柱穴内からは、278の甕がある。この事から、ピットの埋没時期を明確に示す遺物は、土壙以外になく、ピット掘削時以前の時期のものが混入したと考えられる。出土遺物は、須恵器、土師器、鉄滓、鞴羽口、獣骨、柱痕等がある。

建物１を構成するピットから出土した須恵器は、杯(59～62.66.67.69)と甕(72.73)がある。杯蓋は、口縁部と天井部との間に形骸化した稜を持つものもあるが、大部分のものは12～14.3㎝を測り、稜がなく口縁端部を丸く納める。杯身は、たちあがりは短く受部上面より上方にあるものである。甕は、口縁端部が内側へ折り込むもの(72)と外側に小さく外反するもの(73)がある。建物５と６出土の杯は、たちあがりが長く(68)、稜を持つもの(64)である。64の天井部には、朱書きの記号がみられる。70は、ピット44（土壙）から出土した杯である。71は、ピット７出土。

土師器は、杯、高杯、壷、甕等がある。建物１から格子目叩きを持つ壷(267)と口縁部が外反した甕(270.272)及び高杯脚部(275.276)が出土した。建物４から杯(269)と甕(277)が出土した。277は、同建物柱穴出土である。273は建物５出土。266は、底部に木葉痕を持つ杯で建物６から出土している。271の甕は、建物８。268の広口壷は、ピット43。275の甕は、70の須恵器杯身と合わさって出土した。体部に円孔が１穴みられる。


59
61
60
62
64
65
63
66
67
69
68
70
71
73
72
74
268
269
267
270
275
271
272
276
277
273
278
274
0
20cm

図－22　ピット出土遺物

土坑４出土遺物（図－23.24.75.279～289）

出土遺物は、陶質の甕１、土師質の甑２、壷４、甕４、高杯１、砥石１、鉄器１、炭化材等がある。ここでは、土器類を中心に説明を加え、砥石、鉄器等は別項で述べたい。

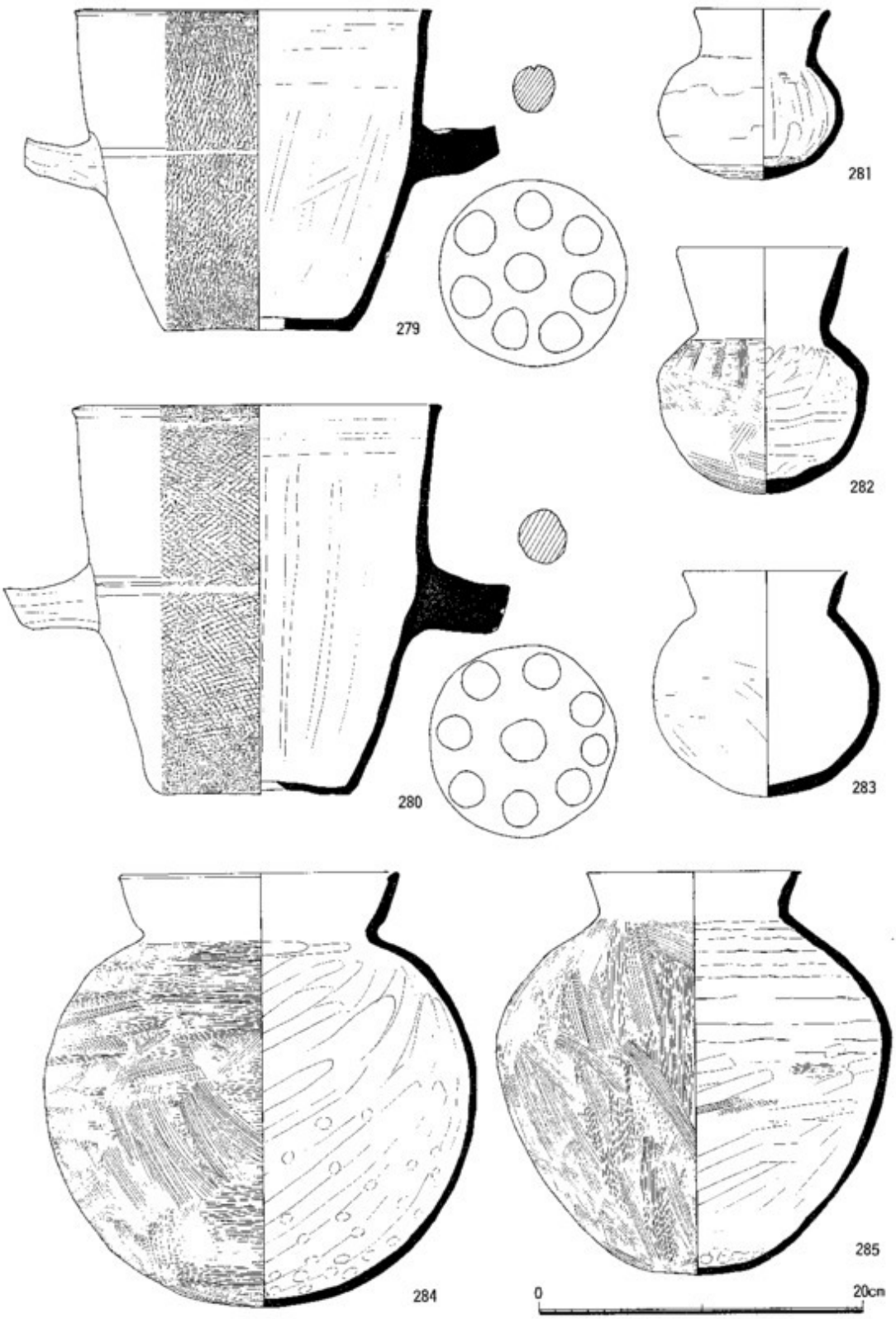
陶質の甕(75)は、口径18.0㎝、器高37.9㎝を測る中型の甕である。口縁部は、比較的に短く外反し、端部は水平方向に屈曲して肥厚する。体部は、胴張りで扁球形を成し、底部は安定性がよいようにやや平坦を成す。製作は、ロクロ回転を用いてないように見られる。内外面に叩き痕がなく、平滑にナデられて部分的に板ナデを行う。胎土は、精良で、色調は、青灰色を呈し、肩部に灰被り部分がみられる。断面は、茶褐色を呈す。焼成は、良好堅緻である。

土師質の甑の２点の内、279は、口径20.8㎝、底形11.3㎝、器高19.9㎝を測る逆八の字状に拡がる形態のものである。外面中央部に１対の把手を水平方向に付け、底部の真中に１穴とそのまわりに７穴の円形穿孔がある。把手の上面にごくわずかの切り込みがある。口縁端部は、ほぼ真直ぐ伸び、外側へわずかに肥厚して終わる。外面は、斜格子叩きをほぼ前面に施し、底部近くをヘラ削りする。内面は、口縁部付近のみヨコナデで、以下縦ナデを行う。色調は、灰茶色を呈し、内外面に２次焼成痕が顕著にみられる。280は、口径21.4㎝、底径11.8㎝、器高24.1㎝と279と同形態でわずかに大きい。把手は、一方の先端の中央部とその下方に簡単な刺突穴がある。底部は、１＋８穴の穿孔がある。色調は、茶灰色を呈し、胎土は、石英、長石、雲母、くさり礫等を含む。外面は、斜格子叩きを施し、底部近くはヘラ削りを行う。内面はヘラ状の工具によるナデがみられ、口縁部付近はヨコ方向とその下方は縦方向にナデあげている。

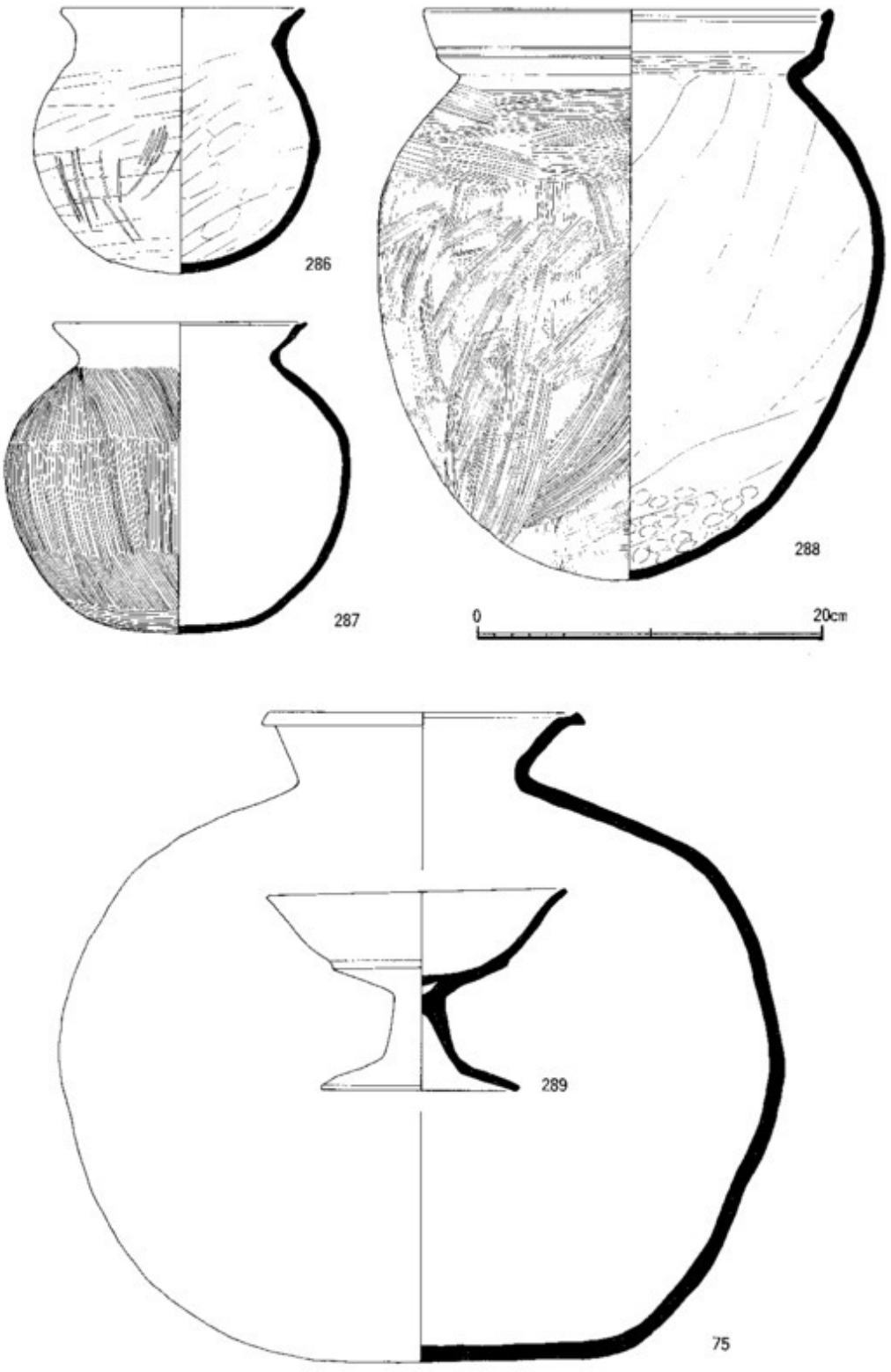
281～283は、小型丸底壺である。281は頸部外面に粘土継目痕が遺る。外面は、ナデ又は板ナデ調整で、内面は、ハケ目後ヘラ削りを行う。282は、外面は、ハケ目、内面は、ヘラ削り調整を施す。色調は、茶灰色を呈し、胎土は、281と同様当地域産のものである。283は、外面をナデ仕上げ後軽い板ナデ、内面をヘラ削りとナデ調整を行う。２次焼成によって体部上半部が表面剥離し、内面上半部に煤が付着している。色調は、灰褐色を呈し、胎土はやや砂粒を多く含み、石英、長石、くさり礫、角閃石を含む。甕とすべきであろう。

284は、口縁部が内側に肥厚する甕で、内面の体部下半に指頭圧痕がみられる。色調は、灰茶色、胎土は、石英、長石、雲母、くさり礫を含む。285は、内面に粘土紐の継目痕が顕著に遺る。色調は、茶灰色を呈し、胎土は、石英、長石、金雲母、くさり礫を含む。

286は、内面ヘラ削り、外面はヘラ削り後ヘラ磨きを行う。色調は、灰褐色を呈し、胎土は、石英、長石、角閃石を含む。全体に煤が付着している。287は、内面はナデ調整、外面は４段のハケ目調整を行う。色調は、灰白色を呈し、胎土は、微砂粒を多く含み、内底面に炭化物が付着している。288は、内面は指押え後ヘラ削りを行い、外面はハケ目調整である。色調は、乳茶褐色を呈し、胎土は、石英、長石、金雲母、くさり礫を含む。289は、高杯である。杯部は、外面に段を有し、外反する口縁部を持つ。色調は、灰茶色を呈し、胎土は、石英、長石、



図－23　土坑４出土遺物　その１



図－24　土坑４出土遺物　その２

くさり礫を含む。内外面の調整は、板ナデとヘラ削りを施す。

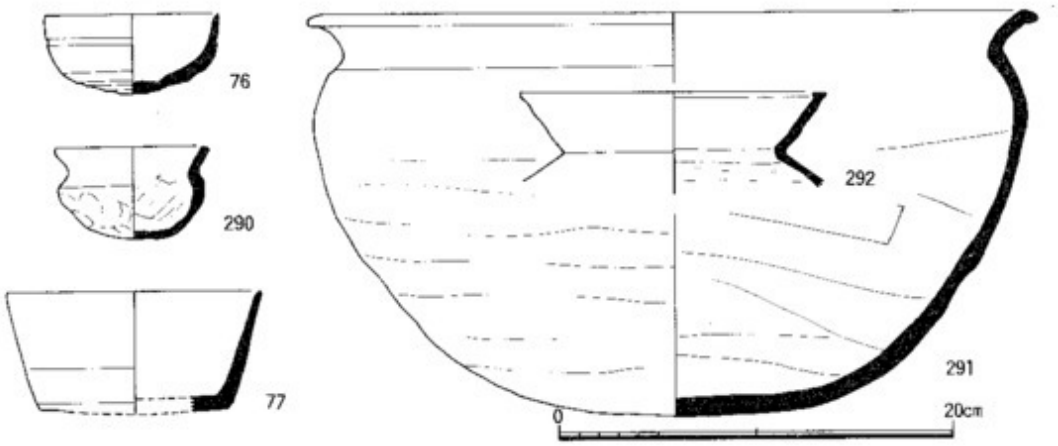
井戸２出土遺物（図－25.76.77.290～292）

井戸２より出土した遺物は、須恵器、土師器、獣骨、木片等がある。遺物量は少しである。井戸埋土中から出土した遺物は、土師器の広口壺(290)と鉢(291)がある。290は、内面に肥厚する口縁端部を持ち、外面に粘土継目痕を遺す。291は、口縁端部が短く外反するもので把手が付かない。両者とも当地域産の胎土である。77は、掘方埋土中から出土した須恵器の杯身である。76は、井戸３埋土中から出土した須恵器杯である。

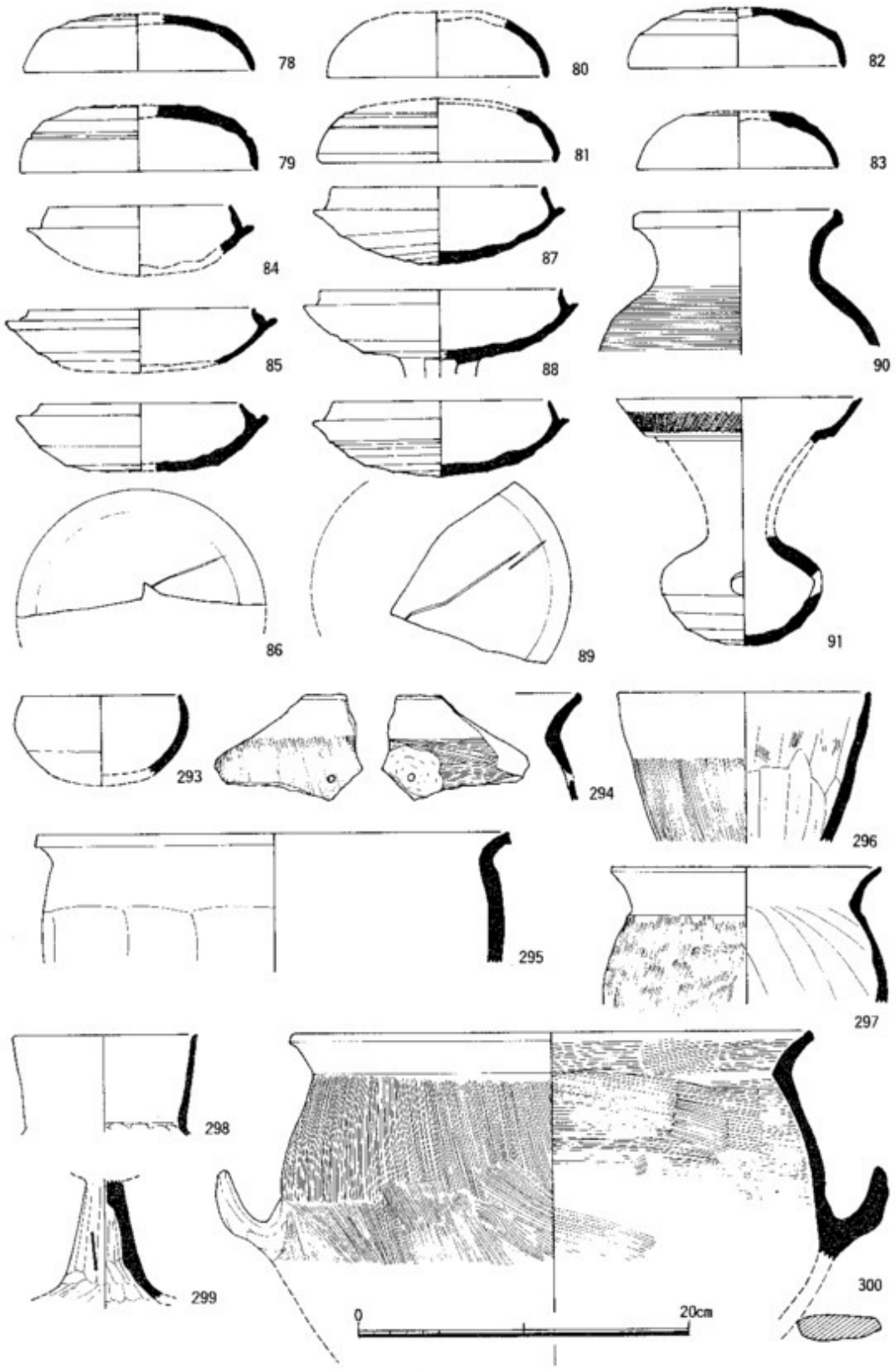
鍛冶炉３出土遺物（図－26.78～91.293～300）

同遺構出土遺物は、大部分が炉を取囲む周溝内からで、須恵器、土師器、鉄滓、鞴羽口、砥石、獣骨等がある。須恵器は、杯、高杯、壺、甕等がある。杯蓋は、口径12.1～14.2㎝を測り、天井部と口縁部の間にある稜はほとんどなくなり、口縁端部内面の段も消滅する前後の時期のものが多い。杯身は、口径10.9～13.6㎝を測り、たちあがりも短く内傾し、底部はやや丸く安定性が悪いものが多い。86. 89は、底部にヘラ記号を施した例である。88は、高杯の杯部である。長脚２段の高杯のたちあがりを持つ最終段階のものであろう。90は、体部外面にカキ目調整がみられる。91は、ラッパ状に外反する比較的長い頸部を持つ甕である。

土師器は、杯、甕、壺、坩、高杯、鍋等がある。杯(293)は、半球形を呈し、口縁端部が尖がりわずかに内弯する。内外面ともヨコナデ調整である。色調は、暗橙色を呈し、胎土は、やや粗い。294は、錐状の工具による穿孔を持つ甕の口縁部である。口縁端部は、内側へわずかに肥厚している。294は、広口壺で、口縁部は外反し、端部が内外に肥厚する。外面は、ヘラ削り調整を行い、内面は、ケズリ後丁寧なヨコナデを施す。高杯(299)の脚部にヘラ記号がみられる。壺、甕又は鍋の口縁端部は、先細りで短く外反するものか内側に肥厚するものがある。鍛冶関係遺物については後述したい。時期は、６世紀末頃に比定されよう。



図－25　井戸２出土遺物



図－26　鍛冶炉３出土遺物

弥生住居１出土遺物（図－27.386～393）

弥生住居１からの出土遺物は、蓋形土器、壺、甕、サヌカイト石器があり、ほとんどのものが床面上からである。

386は、口径13.6㎝、器高8.4㎝を測る蓋形土器である。台形状を呈し、口縁端部は水平方向に折れ曲がり雑な仕上げである。内面に粘土継目痕がみられる。内外面共板ナデ調整である。387は、壺の口縁部である。内外面密なヘラ磨きがみられ、388と同一個体になる可能性が高い。388の頸部に２帯以上の扇形文を巡らす。胴中央部が外側へよく張っている。

389は、壺の頸部から体部にかけて遺存し、口縁部と底部が欠損する。頸部と体部には６帯び以上の直線文が巡り、その境に１帯の扇形文がみられる。直線文の前にヘラ磨きを施している。内面は、板ナデとヘラ磨きで調整している。

390と391は、長頸の壺である。器高は、前者が25.1㎝、後者が30.7㎝である。口縁部は、外側に屈曲して端部が肥厚する。体部は、球形に近い。両者とも頸部に７帯の直線文を施す。前者は、ヘラ磨きと板ナデ調整を施し、後者は、ナデ調整である。

392は、口径28.4㎝、器高20.5㎝と鉢形を呈する。口縁部は短く外反し、端部下半にヘラによる刻目文を付ける。外面は、斜方向のヘラ磨きを施す。内面も粗いヘラ磨きがある。393は、口径27.9㎝、器高33.5㎝以上を測る甕である。口縁部は、短く外反し肥厚してやや丸く終わる。外面は、密な縦方向のヘラ磨きを施し、２次焼成を受けている。内面は、板ナデ後横方向のヘラ磨きを施す。以上の土器類は、色調が茶褐色を呈し、胎土は、石英、長石、金雲母、角閃石を含む当地域産のものである。時期は、第Ⅱ様式に属する。

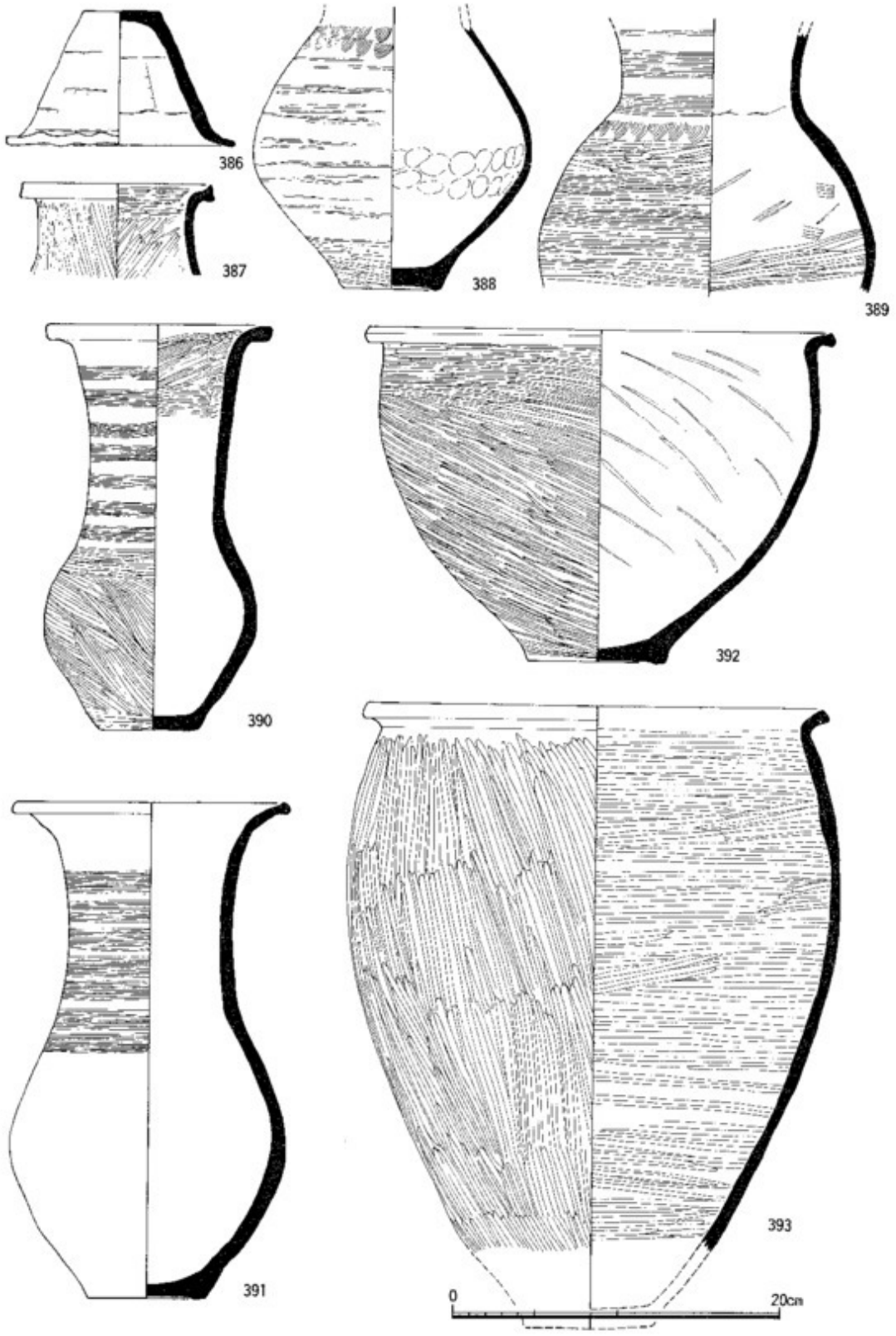
包含層出土遺物（図－28～34.92～195.301～380.394～402.451）

遺物包含層出土遺物は、須恵器、土師器、弥生土器、鉄滓、鞴羽口，砥石、瓦、獣骨、木器、石器等がある。遺物包含層は、第３章第１節で述べた通り各時代に形成された土層が重複しており、大別して時期毎に分層可能である。

４．５層にあたる茶灰色粘質土から奈良時代前後の時期の遺物（図－28）が主に出土した。

須恵器は、杯と高杯がある。杯蓋(92～94）は、いずれも下層包含層の遺物が混入したもので、天井部に付く擬宝珠様つまみを有し、口縁端部が内側へ屈曲する扁平な器形のものが主流を成すものと思われる。しかし、実測にたえうるものが少なく、数量的にもわずかである。杯身は、前述の蓋と対応するたちあがりを有するもの(95.96.98.101)と高台を有するもの(99.100)がある。高杯(102.103)は、いずれも下層包含層に属する時期の遺物である。

土師器については、須恵器に比較して奈良時代前後の時期の遺物が多い。５世紀代の遺物で315の甑の把手がある。先端に刻目がみられ、土坑４出土甑と対応するものと考えられる。杯及び皿類は、長径で扁平なものが多く、口縁端部が内側へ肥厚して、内面に暗文を施している。この他に、羽釜(312)、広口壺(314)、鉢(316)等がある。これらは、７世紀後半から８世紀に



図－27　弥生住居１出土遺物

かけての遺物である。

第6層にあたる黒灰色粘質土から多量の遺物（図－29～32)が出土した。6．8世紀代の遺物を若干含むが、大概7世紀代の遺物が大半を占める。

須恵器（図－29.30.104～177)は、杯、高杯、壺、甕がある。

杯蓋は、つまみを持たないもの(104～113.118.119.126～128)と持つもの(114～117.120～125)がある。前者は、口径10.0～14.0cmまでのものがあり、扁平な形態のものが多い。天井部は、回転ヘラ削り調整のものが多いが、回転ヘラ切り未調整のもの(104.107.110.113)もみられる。126～128は、天井部にヘラ記号を持つものである。つまみの有るもののなかに内面にかえりを有するもの(114～117.120.121)と無いもの(122～125)がある。前者は、口径が小さくつまみもやや高い、後者は、口径が大きくなりつまみも扁平である。

杯身は、内面にかえりが有るものと無いものがあり、後者はさらに高台の有無によっても分かれる。かえりの有するもの(129～139.144～146)は、つまみを持たない蓋とセット関係を持つもので口径も近似するものが多い。高台の無いもの(140～143)の口径は小さく、有るものは(147～153)は大きくなっている。154～157は、ヘラ記号を持つ杯である。

高杯(163～165)は、数量的に少ない。161と162は、台付壺の脚部である。168は、糸切り痕のみられる壺で平安時代以降のものであろう。壺及び甕の口縁端部は、外側に肥厚して、断面四角形を呈す。

土師器（図- 31.32.317～369)は、杯、皿、高杯、鉢、壺、甕、移動式の竈等がある。

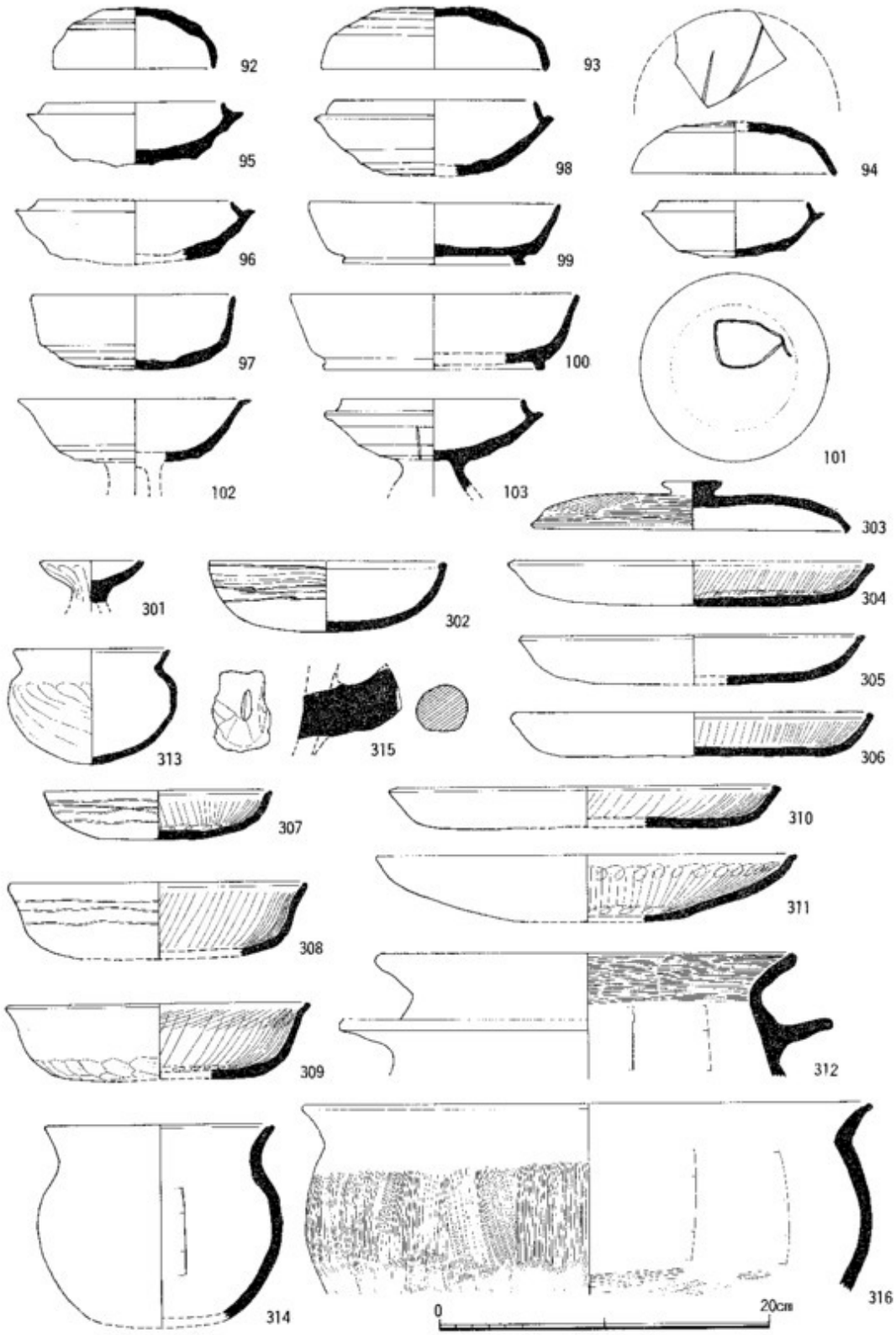
杯は、内面に暗文を施すものがほとんどを占め、無いもの(319.326)は稀小である。口縁端部は、短く外反するものと内面に肥厚するものがある。外面の調整は、ナデ調整だけのものと指押えが痕るものヘラ磨きがみられるものがある。底部は、ヘラ削り調整のもの(323.331.332.334.338)も少量みられる。口縁部が外反した後再び内湾し端部が内側に肥厚するものの内底面には、放射状暗文と螺線状暗文が施されている。

346の鉢は、内黒の黒色土器で、内面は、密なヘラ磨き後平行、螺線及び変形暗文を施し、外面は、横方向のヘラ磨きである。

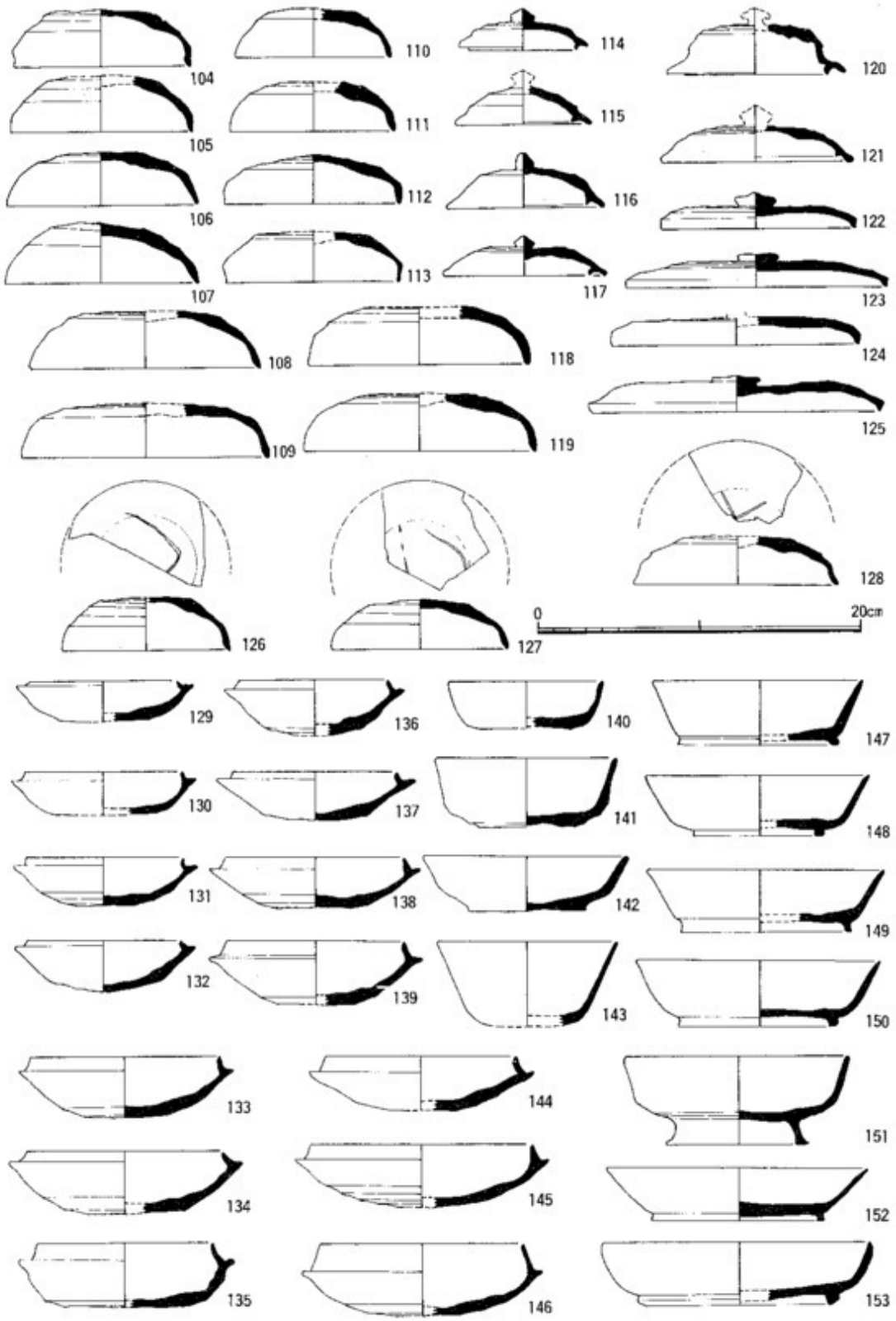
高杯は、小型のもの(350.352)と中型のもの(353～355)と大型のもの(356)がある。小中型のものは奈良時代前後のものであるが、大型のものは、脚断面が面取りした奈良時代以後のものである。

357～361は、小型の丸底壺である。いずれも形態が異なるが、内面は板ナデ調整によって平滑に仕上げられている。

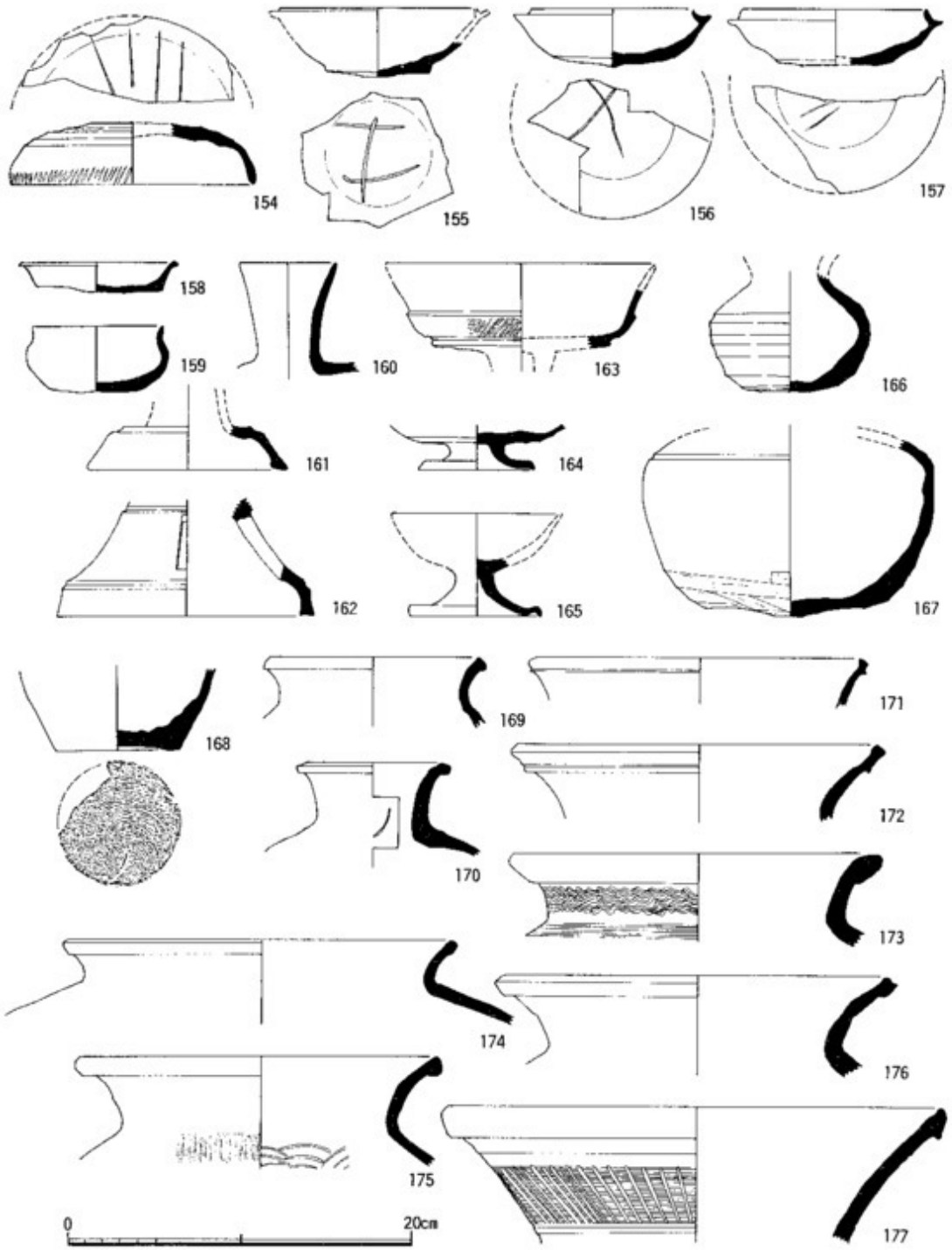
361～367は、、小型の甕である。口縁端部は、丸く終わるもの、内面に肥厚するもの、外反して尖り気味に終わるもの等がある。いずれも内面を板ナデ調整するものが多い。



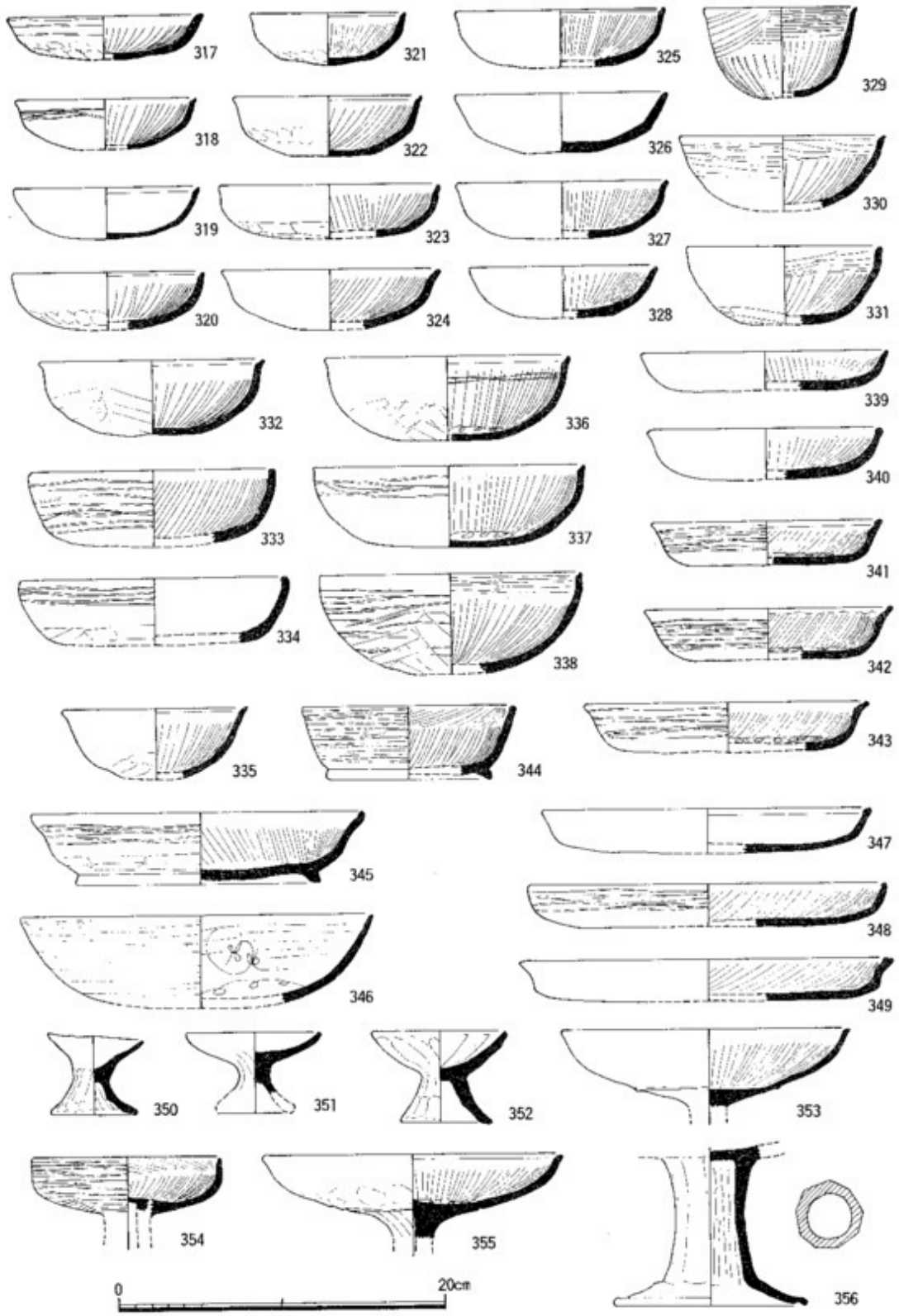
図－28　上層包含層出土遺物



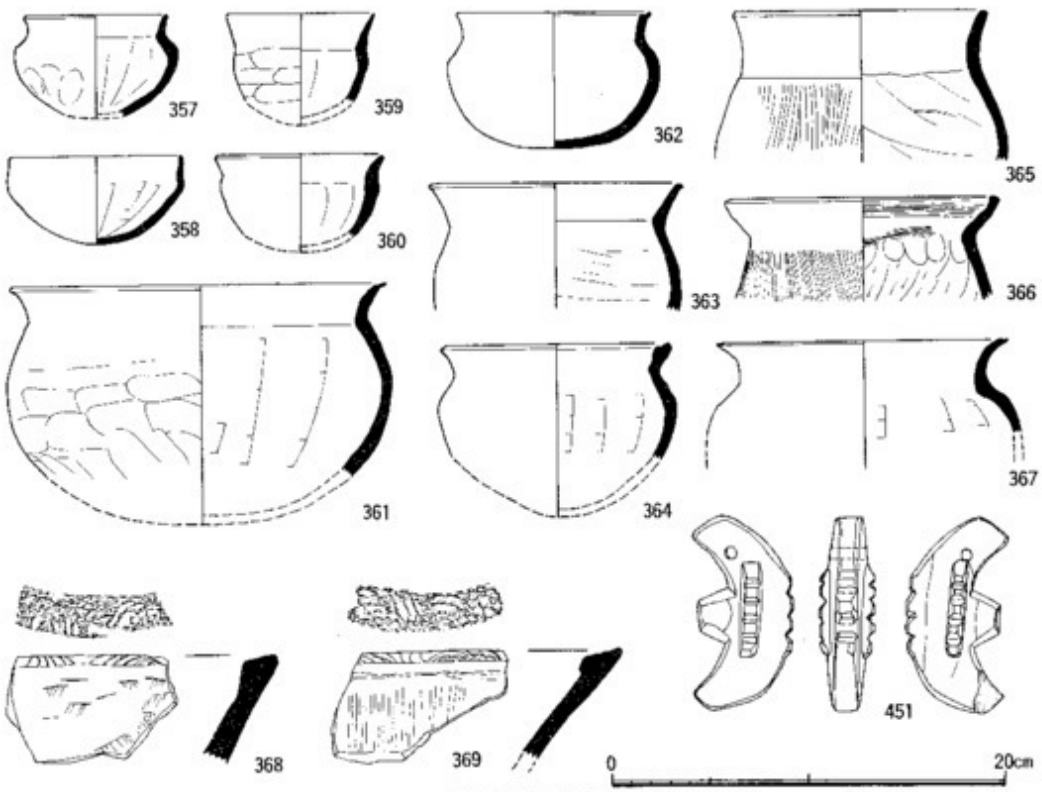
図－29　黒灰色粘質土出土遺物



図－30　黒灰色粘質土出土遺物



図－31　黒灰色粘質土出土遺物



図－32　黒灰色粘質土出土遺物

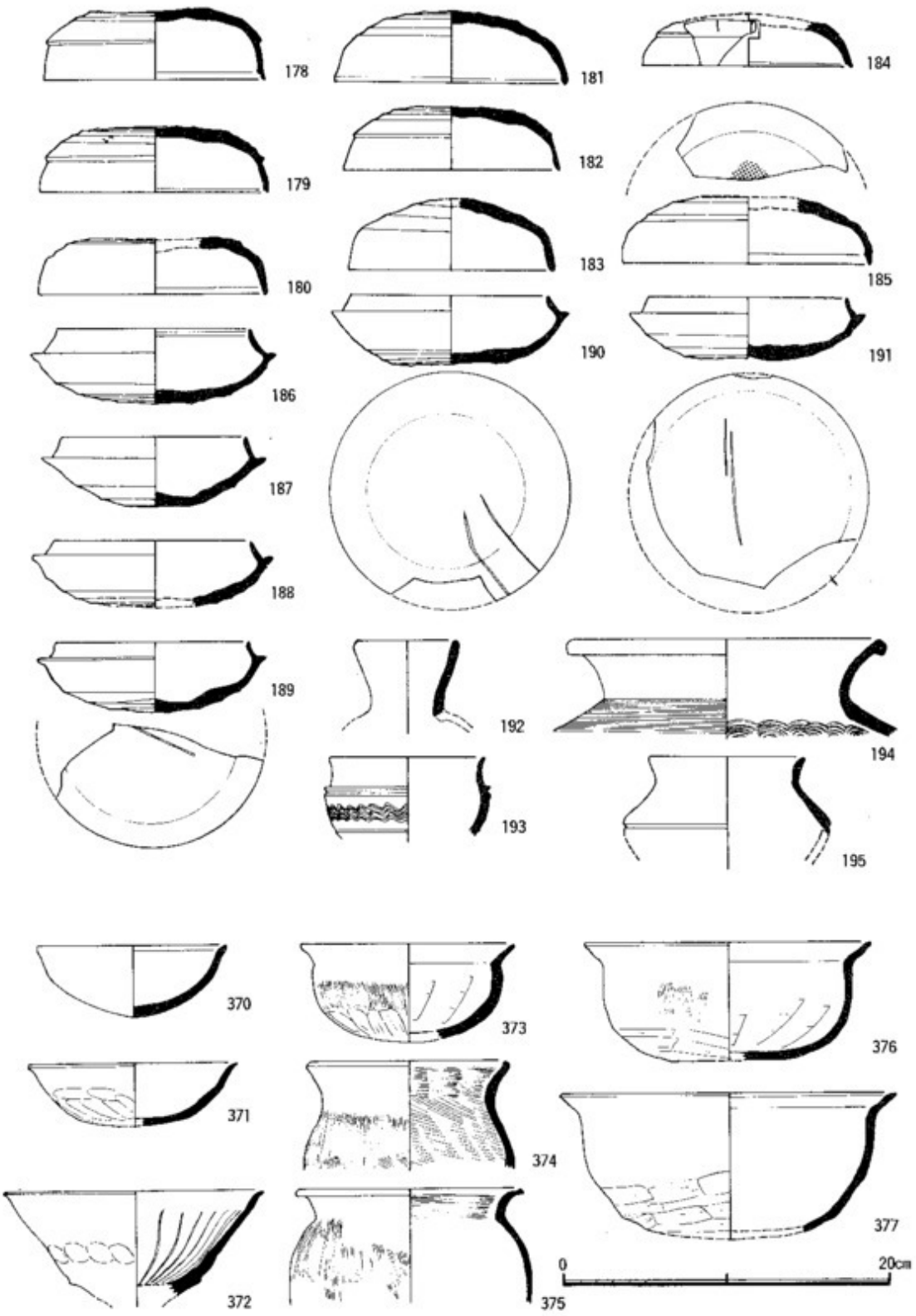
368.369は、竈の眉庇部で口縁外面端部に同心円文叩きを施している。胎土は、金雲母、石英等を含む当地域産のものてある。451は、子持勾玉である。6世紀末頃から7世紀初頭の時期の遺物と共伴して出土している。

第7層から出土した遺物（図－33.178～195.370～377)は、大概6世紀代にあたる時期の遺物である。

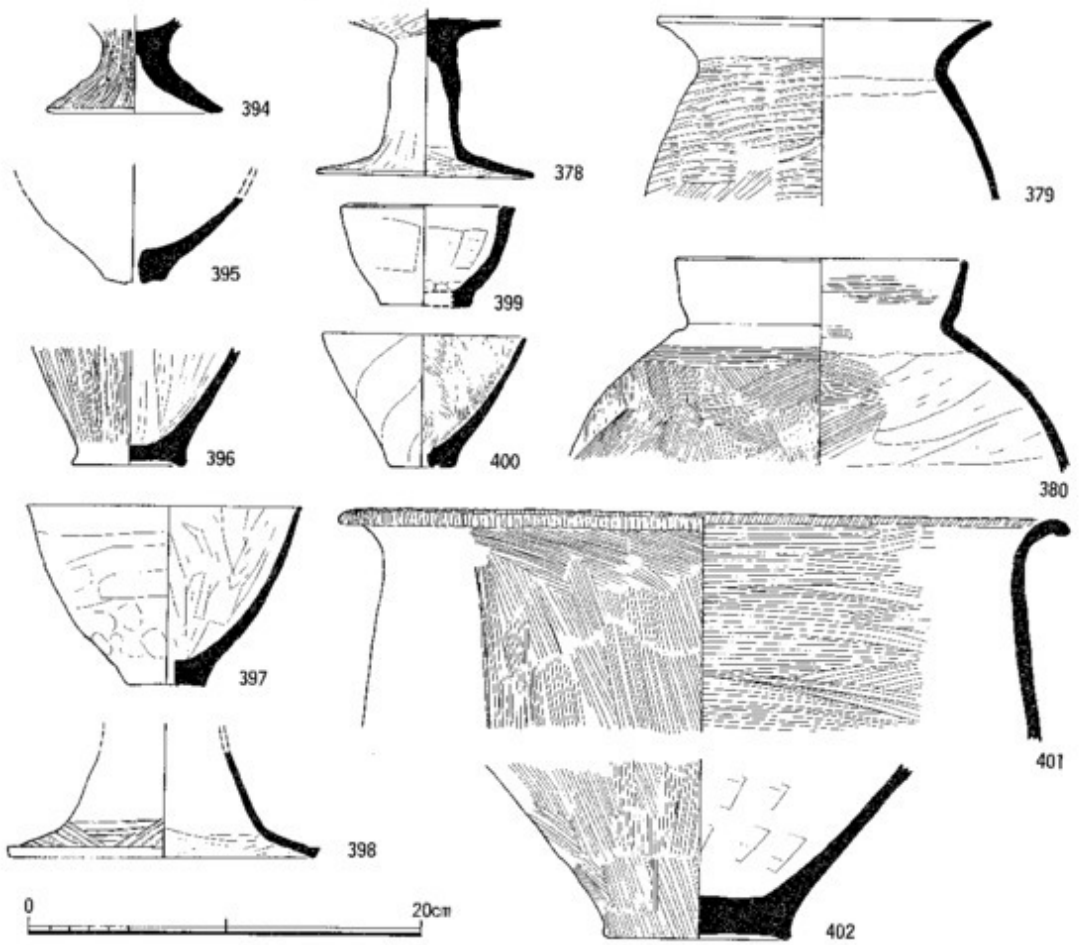
須恵器は、杯類が大半を占め、壺(192.195)、甕(194)等は少量であった。ヘラ記号を持つ杯(184.189～191)と朱が塗られた杯(180.185)がある。180は、杯蓋の内面全体に朱が付着している。185は、杯蓋の天井中央部に朱が記号状に描かれている。

土師器は、杯(370.371.373)、高杯(372)、甕(374.375)、鉢(376.377)等がある。杯は、口縁端部が短く外反するもの(370.371) とやや長く外反するもの(373)がある。前者は、内面を板ナデ調整をし、外面をナデ及び指押え調整しており、後者は、同様の調整にタテハケ目調整もみられる。

高杯(372)の内面には太い暗文がみられ、口縁端部は短く外反している。甕(374.375)は、内側へ肥厚する口縁端部を持ち、内外面ハケ目調整が顕著である。鉢(376.377)は、373の杯の大型化した形態のもので、外底部をヘラ削り調整する。



図－33　下層包含層出土遺物

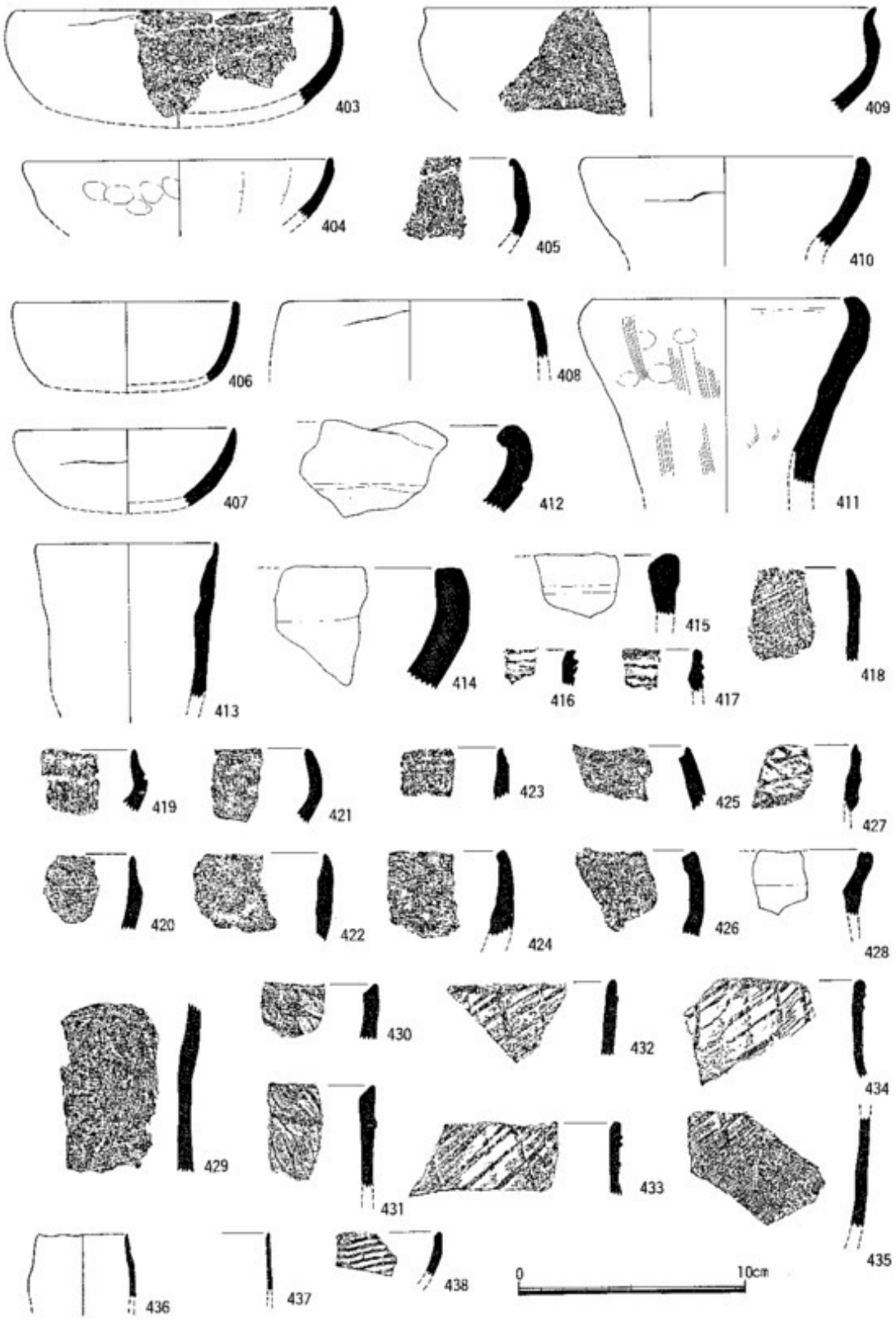


図－34　弥生～布留式土器

第７．12層にあたる茶灰色粘質土、薄茶灰色粘質土から弥生時代から古墳時代中期までの時期の遺物（図－34.378～380.394～402)が出土した。

弥生時代の遺物は、高杯(394.398)、鉢(397.399.400)、甕(401.402)がある。時期は２期分かれ、第２様式と第５様式とがある。第２様式に属する遺物は、394の脚部と399の小型鉢、401と402(同一個体の可能性がある）の甕がある。401の甕の口縁端部の内外面に各１列の刻目がある。第５様式の遺物は、底部穿孔した壷の底部(395)、甕の底部(396)と内外面を密なヘラ磨きした脚部(398)、底部尖穿の鉢(397.400)がある。いずれも胎土は当地域産の粘土を使用し、色調は茶褐色を呈す。

古墳時代の遺物は、高杯脚部(378)、甕(379)、壷(380)がある。378の脚端部は、直角に近く折れ曲がり、内外面をハケ目状又はヘラ削り調整で仕上げる。379の口縁部は外反し端部は丸く終わる。外面は平行叩きである。380の口縁端部は内側にわずかに肥厚するものでごくわずかに二重口縁を呈する。各器とも明黄褐色を呈し、胎土中に金雲母、石英等を含む。


403
409
404
405
410
406
408
407
412
411
413
414
415
416
417
418
419
421
423
425
427
420
422
424
426
428
430
432
434
429
431
433
435
436
437
438
0
10cm

図－35　製塩土器

製塩土器（図－35.403～438）

調査区全域から総数221点の製塩土器が出土した。この内、遺構から出土したものは、119点（53.8%）を数える。各ピット等から77点(34.8%)、溝１から18点(8.1%)、溝３から10点(4.5%)、溝４から２点(1.0%)、鍛冶炉３周溝から12点(5.4%)が出土した。

実測及び拓本しえた遺物について若干の説明を加えたい。

403は、浅鉢形のもので、口縁部は内湾し、端部は内側に折れ曲がる。内面は平滑に板ナデし、外面はナデ調整で粗面。粘土継目がみられる。色調は、灰白色、胎土は、１㎜位の砂粒を多く含む。405.419～421は、403と同類である。時期は、７世紀代である。404は、杯型を呈し、径13.3㎝を測る。内面は、板ナデ、外面は指押え又は指ナデ調整を施す。色調は、茶灰色、胎土は、石英、長石、くさり礫を含み１㎜位の砂粒を少し含む。406.407が同類である。408は、口縁部が内湾し、端部は尖り気味である。内外面ナデ調整で粗面である。口縁がもう少し大きいかもしない。色調は、杯褐色、胎土は、１㎜位の砂粒が少し含まれる。424は同類である。409は、口縁部が内湾後小さく外反して尖り気味に終わる。破片の為外反するのは部分的なものかもしれない。408と類似した色調、胎土である。

410.411は、砲弾形を成し器壁がやや厚く７～11㎜をはかる。内外面板ナデ調整を施し、部分的に指押えがみられる。色調は、灰茶色を呈し、胎土は、１～５㎜位の不揃いの砂粒を多く含む。時期は、奈良時代前後と考えられる。412は、口縁部が内湾して端部が折れ込んだ砲弾形のものであう。色調は、明茶灰色、胎土は、１㎜位の砂粒を多く含む。414.415は、口縁部形態が異なるが、同時期のものであろう。

413は、砲弾形を成し、内外面ナデ調整である。色調は茶灰色、胎土は、２㎜位の砂粒を多く含む。416.417は外面に平行叩きがみられる。胎土はいずれも精良である。417の口縁部に白色付着物がみられる。６世紀代の遺物と共伴して出土した。418は、内面に布目痕がある。色調は、黒茶褐色、胎土は、１㎜位の砂粒を多く含む。425は、内湾する口縁部を持ち、端部は内傾する段を持つ。色調は、明茶灰色、胎土は、１㎜以下の砂粒を若干含む。内面に白色付着物がみられる。429は砲弾形の体部の破片であろう。色調は、灰褐色を呈し、胎土は１㎜位の砂粒を多く含む。430.431は、口縁端部に内湾する段を持ち、外面に叩き痕がみられる。色調は茶灰色、胎土は、前者が0.5～3㎜位の砂粒を多く含み、後者は、１㎜位の砂粒を少し含むものである。432～435は、口縁部外面に格子目叩きがみられるもので、岡山県周辺から出土するものに近似している。色調は、灰茶色～茶褐色を呈し、胎土は精良で細砂を少量含む程度である。６世紀後半頃の遺物と考えられる。436.437は薄手の小型丸底式のもので、外面に叩き目がみられない。色調は、灰黄色、灰茶色を呈し、胎土は、精良である。

438は、内湾する口縁部を持ち、内面に、２板貝のナデ調整がみられる。色調は、灰茶色、胎土は、１㎜位の砂粒を少し包み精良である。

鞴 羽 口（図－36.439～450）

金属の精鍛や加工に使用する火をおこす為の送風器である。出土総点数430個を数え、溝1から20点(4.7%)、溝2から1点、溝3から1点、溝4から12点(2.8%)、各ピット及び土坑の埋土から63点(14.7%)、鍛冶炉3から180点(41.9%)、遺物包含層等から150点(34.9%)がある。

番号	遺構	現存長	体部外径	体部内径	先端長	炉壁の厚さ	備考
439	鍛冶炉3	11.5	5.1～6.5	2.0～2.3	3.5	1.6	
440	〃	10.3	5.4～6.4	2.6～2.9	4.9	2.0	ヘラ記号あり
441	〃	7.2	4.6～5.6	3.0	5.6	—	
442	〃	8.8	5.6～6.3	2.1	4.3	1.7	
443	〃	11.1	5.4～6.7	2.1～2.9	3.5	1.8	
444	〃	11.0	6.2～7.5	2.6～3.4	1.8以上	—	両端欠損
445	〃	11.5	5.3～6.6	2.3～2.9	3.2以上	1.7	
446	〃	11.2	4.8～6.3	2.3～2.5	3.7	1.7	朱塗部分遺存
447	〃	10.2	6.7～7.7	2.6～2.8	欠損	—	ヘラ記号あり
448	〃	14.8	5.4～6.8	2.8～3.0	2.5以上	2.5	
449	〃	6.6	6.4～7.7	2.8～3.3	1.7以上	1.4	
450	〃	12.9	4.9～6.7	2.5～3.1	4.1	1.7	

表－1　鞴羽口比較表

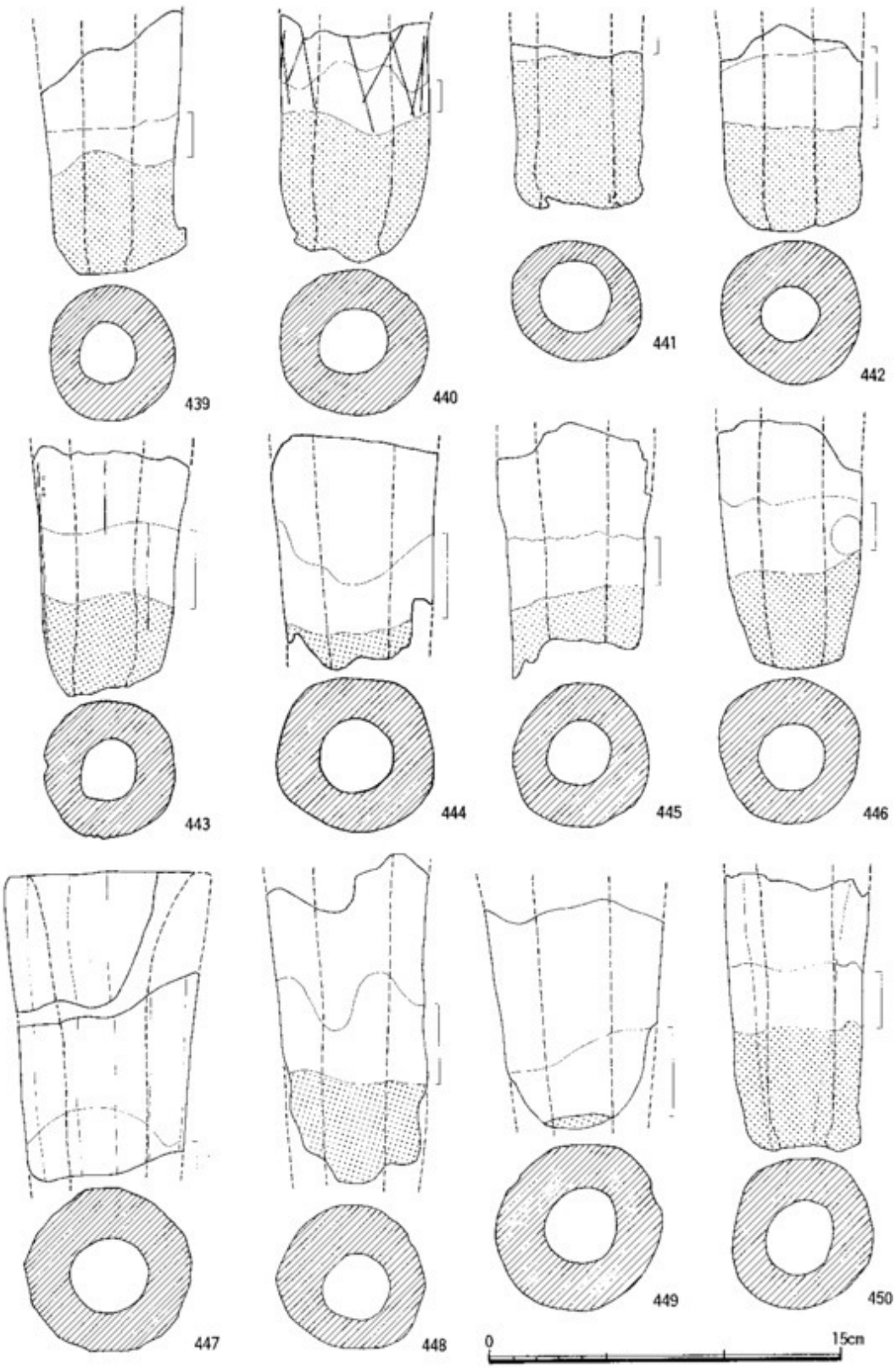
形態は、先端から後端にやや拡がる円筒形を成す。先端が遺存するものが多く、後端はほとんど欠損している。体部外径は、4.6～7.7cm、体部内径は、2.0～3.4cmを測り、全長は、15～18cm位と考えられる。表－1の先端長は、炉内に突出している溶融金属が付着した部分を示す。炉壁の厚さは、熱影響によって茶褐色から青灰色に還元され変色した部分を示す。作り方は、丸棒（体部内径と同じ）に粘土を巻き、成形後棒を抜き取っている。外面は、縦方向の叩き後ナデ又は指押えで調整している。外面中央部に連続X印のヘラ記号を持つものも数点ある。446は、外面中央部に朱塗りの痕跡がみられる。胎土は、生駒西麓産の粘土で、色調は、茶褐色を呈する。

砥　　石（図－37.452.458）

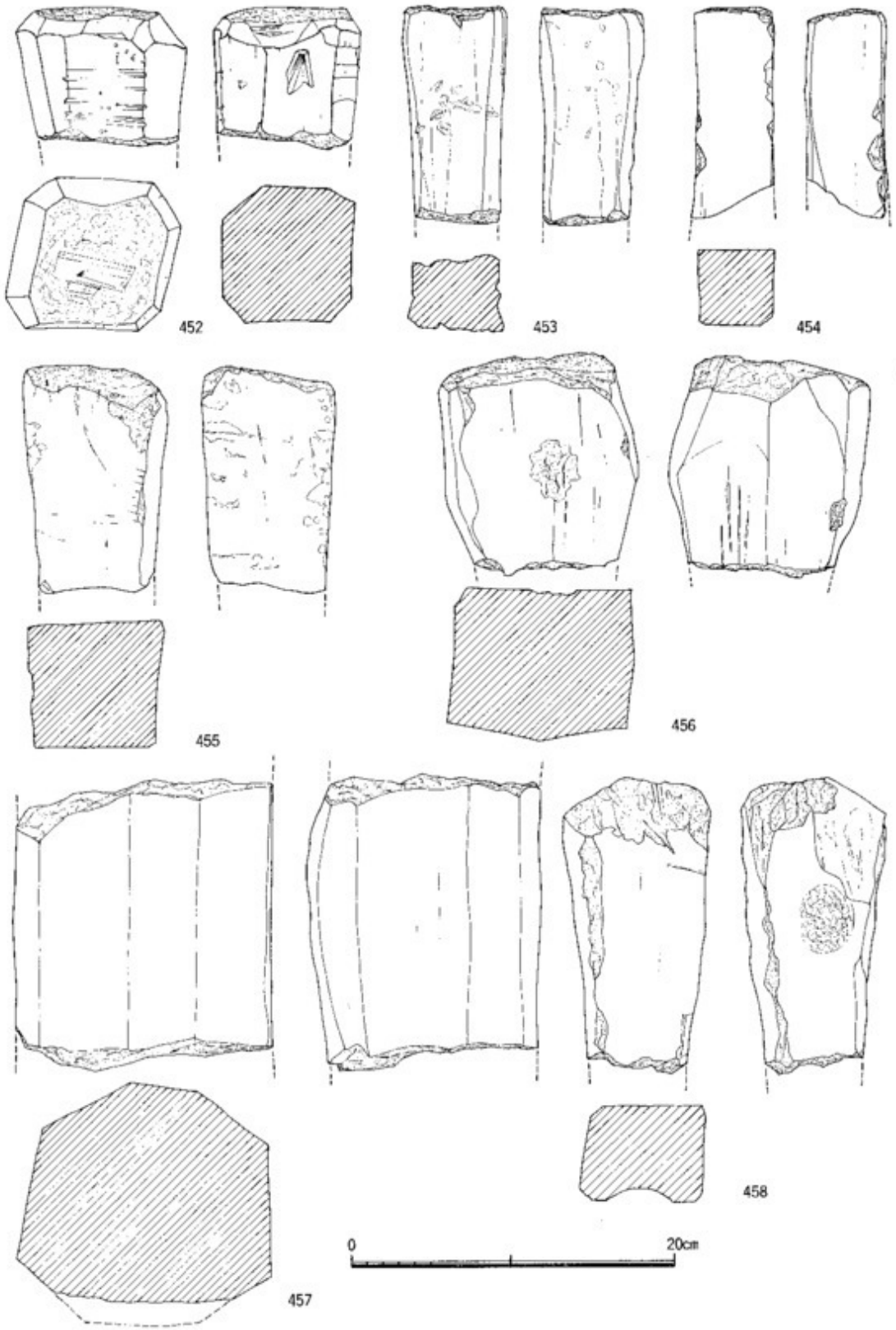
総点数8点が出土した。流紋岩6点、花崗岩1点、砂岩1点である。出土地点は、鍛冶炉3及びその周辺から多く出土している。

流紋岩製は、石材が軟質で重量も軽く肌も木目が細かく仕上用に供されたものであろう。すべて折損している。452は、断面8角形を成し、端部も斜めに。刃物痕や尖端でつついた様な傷も多くみられる。163g。453は4角形で、各面にやや浅いがU字形の細い溝がある。95g。454は、4角形、75g、455.456.458は、4又は5角形で、刃物痕や尖端を調整したような傷が顕著みられる。重量は、200g、348g、185gを測る。

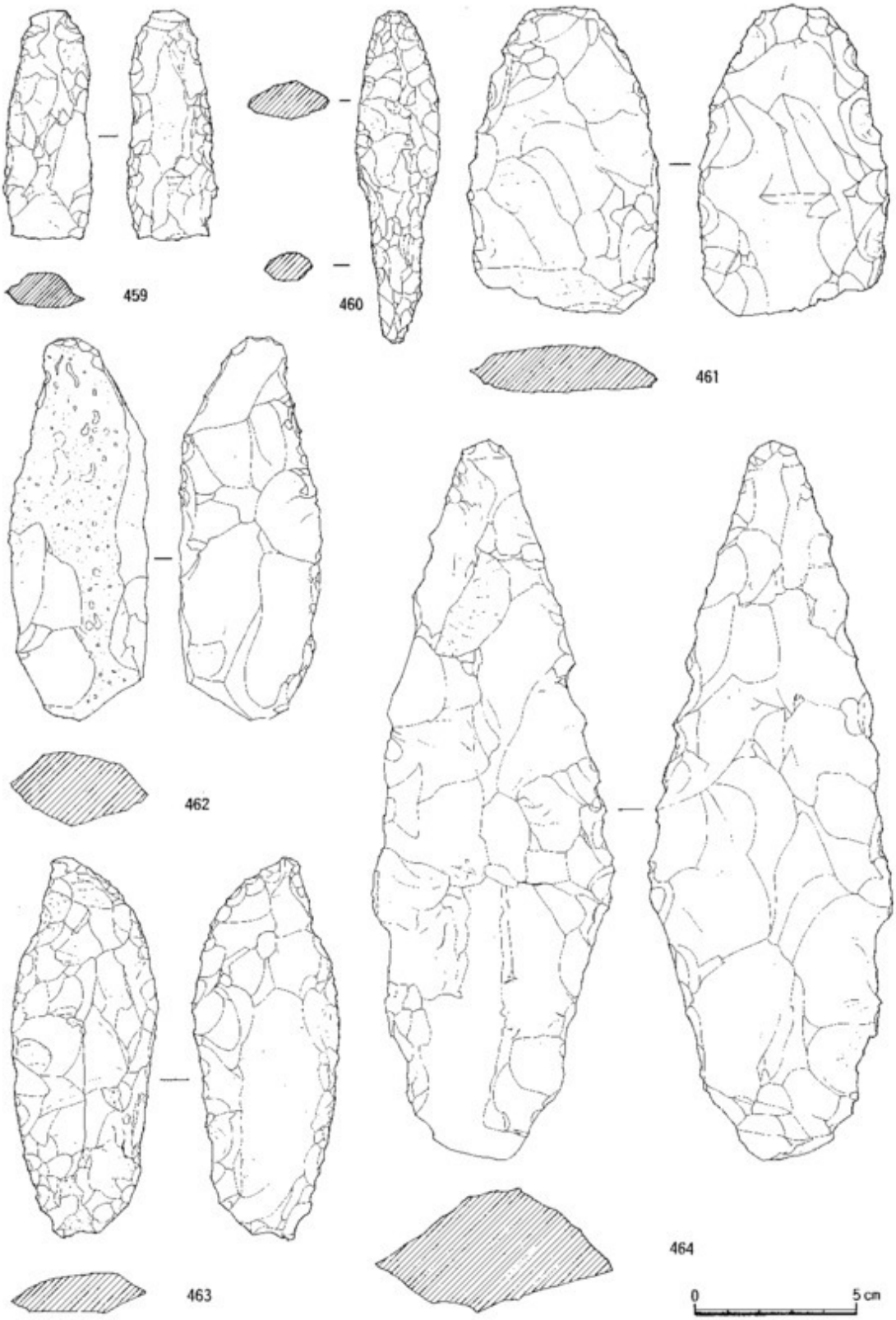
457は花崗岩製で両端及び側縁が欠損している。流紋岩より硬質でやや粒子が荒い。復元8角形であろう。943g。



図－36　鵜羽山



図－37　砥石



図－38　石器

鉄　滓

総出土重量は、約66.5kgを測る。各遺構からの出土比率は、各溝からの合計2200g（3.3%）各ピットから2157g（3.2%）鍛冶炉3から39043g（58.7%）である。

成分	TotalFe	FeO	Fe_2O_3	$S:O_2$	Al_2O_3	CaO	MgO	MnO	$T:O_2$	Cr_2O_3	S	C
%	59.42	65.24	12.46	14.68	4.82	0.22	1.89	0.01	0.01未満	0.01未満	0.01	0.09

表－2　鍛冶炉3出土鉄滓分析値

鉄滓の分析を光洋精工株式会社に依頼し、上記の表の結果を得た。同社研究所の森原部長、永井氏に色々とお世話になった。

石　器

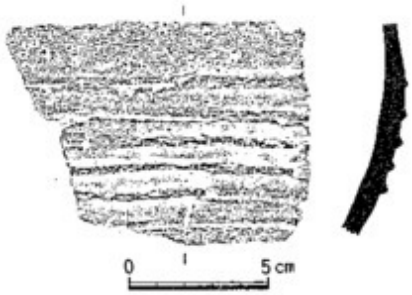
弥生時代の石器類が多く出土した。主にサヌカイトの剥片と石核類である。図化したものについて若干の説明を加えたい。遺物包含層からの出土が大部分であるが、460と464は弥生住居1から出土している。457は、石槍又は石鏃の未製品である。細かい調整がない事からみて成形時に折損し遺棄されたものであろう。460は、凸基有茎式大型石鏃。逆刺がなだらかで茎の抉りが浅い。重量は、33gを測る。461は、石槍の未製品で欠損している。先端が打撃による使用痕があり握斧として使用されたかもしれない。462は、素材自体が湾曲しており製作途上でそれを修正出来ない事が明確になった為遺棄されたものだろう。463は、石包丁か。やや薄く両刃である。464は、一部白灰色の自然面をのこした荒削りよ整形した石槍である。時期は、弥生時代第II～III様式にかかるものである。この他に縁泥片岩の石包丁が2丁みられた。

木　器

用途不明の廃材や柱痕、曲物、井戸枠等がある。主に7～8世紀代の遺構から出土したものである。曲物材は、66.0×67.5cmのほぼ円形で厚さ2.0cmを測る。井戸枠は、20枚の板材があり、下部程良好に遺存していた。最も良好のもので、115.5(長さ）×27.0（幅）×8.0(厚)cmを測る。表面には手斧による削跡が顕著に遺る。

縄文土器

時期が明確でないが、張付凸帯文様を持つ破片が1点出土した。凸帯は、断面山形を成し、6本以上平行しており、間隔は1cm前後である。平滑な面に何本かの沈線を描き、その上に凸帯が2本又は4本を単位とした粘土を張り付けている。色調は、赤褐色。胎土は石英、長石、くさり礫を含み、1～2mm前後の砂粒を割合多く含む。当地点が大県遺跡の縄文土器出土地の南限と考えられる。



図－39　縄文土器

第4章　ま　と　め

今回の調査は、大県遺跡の中心部にあたる場所での調査である。調査によって検出した遺構は、主に次の4時期である。Ⅰ期は、弥生時代中期、Ⅱ期、古墳時代中期、Ⅲ期、古墳時代後期、Ⅳ期、奈良時代である。遺物は、縄文土器、弥生土器、弥生時代中～後期の土器、古墳時代～奈良時代にかけての須恵器及び土師器、製塩土器、鞴羽口、鉄滓，砥石等が各遺構及び遺物包含層から多量に出土した。出土量は、コンテナバット95箱である。各遺構の変遷を中心にして時期毎に検討を加えたい。

Ⅰ　期（弥生時代中期）

当期以前の遺物として縄文土器が数片出土した。大県遺跡の縄文土器出土地点の最南端にあたる。遺構はなく、それぞれ後世の時期の遺物包含層の中から混入遺物として出土している。

この時期の遺構は、調査区の中央部から竪穴住居1棟を検出した。立地は、安定した丘陵上の西向きの緩斜面地である。直ぐ南側に東西方向の小さな谷筋（小河川？）が見られ、その北側肩部付近に位置している。形態は、隅丸長方形を呈し、谷筋に平行して東西に長辺を持つ。構造は、東西中央に2支柱を置き、そのまわりに6～7小支柱を配列している。床面積は、29.0㎡を測りごく一般的な中規模の住居と考えられる。住居床面から多数の遺物が出土した。土器類は、壷、甕、蓋等が住居南西部から集中して出土した。これに対して石器類は、主に住居東部から出土した。今回の報告に掲載している資料の中に製作途中の石器がある事やまた、土器類がほとんど完形品ばかりである事から推察して住居の廃絶が、何か突然に発生した災害による可能性があり、住居が焼失した事も考えられよう。

今回の調査区の事前の試掘調査（大県83－5次調査）によってサヌカイト剥片が2万点以上も一括して廃棄された土坑を検出し、剥片の中の多くは自然面を残したもので接合資料も数多く確認されている。今回の調査において、住居埋土中から出土した未調整の石器片と接合する事が出来る自然面を残した剥片も若干みられる。これらの資料は、当地域で自然石から石器製作が行われたことを示すものでその製作技法や過程を探る資料として注目される。自然石は、二上山から産出するものである。

弥生時代後期の遺物も若干出土した。遺構は、溝5～7がある。これらの溝は、埋土上層から古墳時代中期の遺物が出土し、弥生後期から古墳時代中期まで継続していた可能性がある。溝5と7は、直線的に伸び溝6はその接点から垂直に西流している。その性格は、南接する谷筋から水を引くための溝か住居の区画あるいは排水の為の溝か明確でないが、自然斜面を利用したものでなく、一定の計画のもとに付設された溝と考えられる。

II　期（古墳時代中期）

溝５～７にほぼ平行するように土坑４を検出した。この土坑は、隅丸長方形の小規模な竪穴住居である。上部を後世の遺構等によって削平されておりやや変形である。住居床面から多数の完形の遺物が出土した。遺物は、陶質の甕１、土師質の壷４、甕４、高杯１、甑２、砥石１、鉄製品１、炭火材等があり、焼失住居内の一括性が高い出土状況である。当時の土器使用の器種構成を示すものとして貴重な資料である。陶質の甕は、内面の叩き痕を平滑にナデ消す点やロクロ成形を行わない点、口縁端部の形態等当地域における初期須恵器の特徴的な要素がみられる。甑２点は、布留式の甕とセット関係を成し、住居に付設された竈によって煮沸用に使用されたものである。器表面には、格子又は斜格子の叩き目文があり、韓式系土器に属するものである。出土状況や共伴遺物そして土器の遺存状況も良く考古学的な価値の高い資料であろう。韓式系土器の出土は、大県遺跡の古墳時代中期から後期にかけての時期の集落関連遺構から密度の高い出土傾向を示しており、朝鮮半島との交流が顕著で渡来人との関わりが強く反映したものと考えられる。また、朝鮮半島から伝播したと考えられる鍛冶関係の遺構や遺物が次期に盛況となるのであるが、溝５埋土中から鉄滓が出土しており、その初源期を示す可能性のある検出例として重要である。

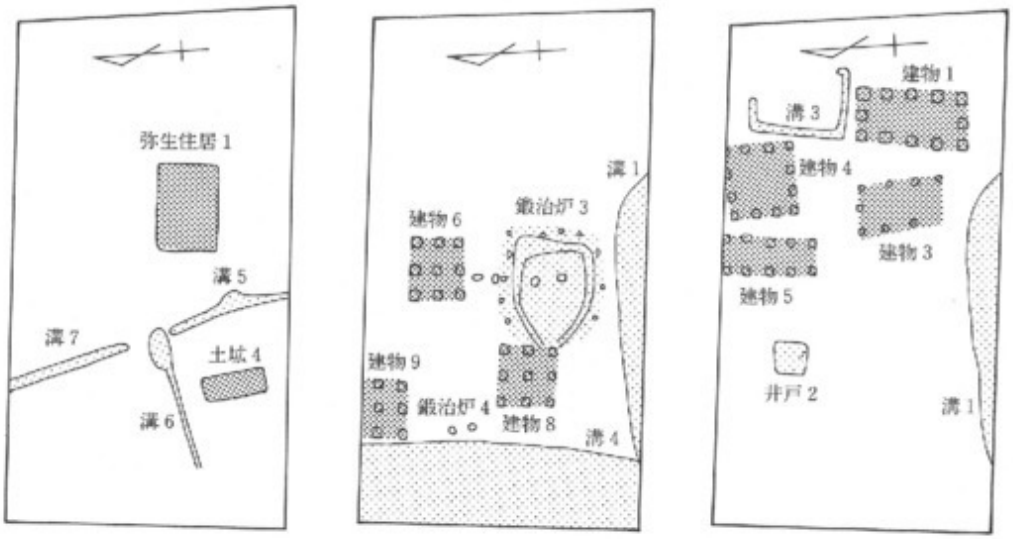
III　期（古墳時代後期）

この時期は、大県遺跡の最も盛期を迎える時期の１つである。当調査区においてもそれを示す多くの遺構と遺物が出土した。遺構は、溝、掘立柱建物、鍛冶炉等がある。溝１、４は、谷状の大溝で、その上下層から多量の遺物が出土している。時期は、６世紀中頃から７世紀前半までがその中心を占める。

その中で、製塩土器は、時期や胎土及び形態等との生産と流通を見る興味深い資料が多く出土している。大きな格子目叩きを持つものは、岡山県下の製塩生産遺跡から出土する同形態のもので、胎土について奥田　尚氏からその周辺部の胎土である可能性が高い事をご教示を得ている。生産地と消費地の関係は、遺跡間の交流を示すだけでなく、内陸部における塩の消費方法や製塩土器の用途等について多くの示唆を与えてくれるものである。

建物６．８．９は、東西２間と南北２間の規模の掘立柱建物である。時期は、六世紀後半から７世紀前半までが想定出来る。鍛冶生産が行われている時期と合致し、鍛冶生産集団と関わる倉庫建物と考えられる。

鍛冶関係の遺構は、特に河内地方では柏原市内に集中し、大県遺跡を中心として、大県南遺跡、太平寺遺跡、高井田遺跡、田辺遺跡から多数検出されており、次第にその時期や形態が明らかになりつつある。鍛冶炉３は、これまでの鍛冶炉の知見に加えて３つの新しい形態要素がある。１つ目は、炉と金床台がセット関係にある事、２つ目は、炉と金床台を中心として周溝



図－40　遺構変遷図

が巡る事、３つ目は、周溝外側に全体を被う建物が想定出来ることである。炉が稼動していた時期については、上下層の遺物包含層や周溝内出土遺物、また溝１出土遺物から６世紀後半から７世紀初頭と考えて大過ない。鉄滓や鞴羽口の出土量が多量であり、共に出土する須恵器、土師器の日常雑器類も多いことから鉄器生産に携わる人々も少なくなかった事を示している。

鍛冶炉４は、炉と金床台（石製）が鍛冶炉３と同様セット関係をもって検出されたが、周溝や建物の痕跡は見当らなかった。時期は、鍛冶炉３と同時期かやや後続するかもしれない。鍛冶炉１．２は、時期を明確に出来ないが、検出層位や他の遺構との関連から７世紀後半頃に比定される。鍛冶関連の遺物は、鉄滓、鞴羽口、砥石が出土している。これらは、鍛冶炉周辺部に集中している。鉄滓の分析を光洋精工株式会社に依頼した。素材は、TiO_2の含有量が少なく鉄鉱石系との結果を得ている。この知見は、従来大県、大県南遺跡等から出土する鉄滓の分析値と同様である。これらの事から、大県遺跡全体から見れば、多量の鉄鉱石系鉄素材を長期間にわたり継続して獲得した集団が存在し、統制を受けた政治的背景が想定される。

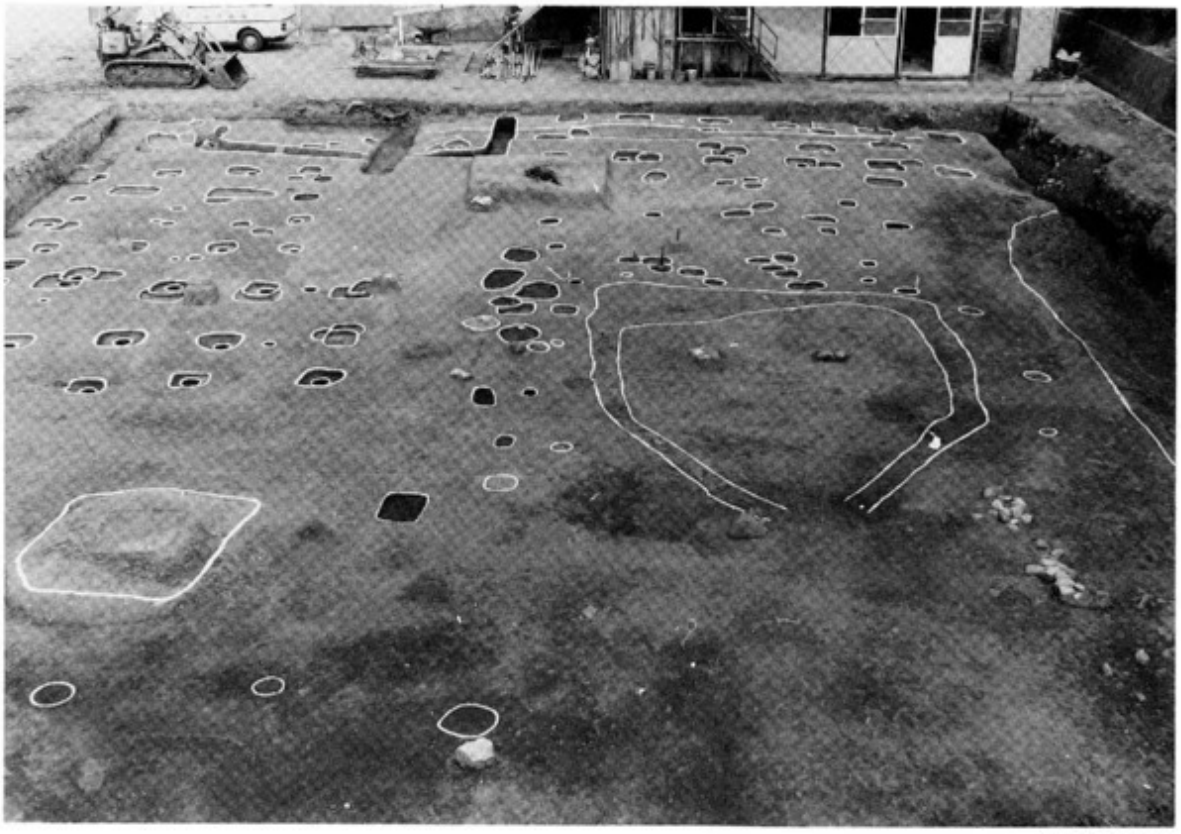
Ⅳ　期（奈良時代以降）

この時期の遺構は、建物１．３．４．５と溝１上層、３、井戸２がある。出土遺物は、土師器、須恵器、瓦等がある。瓦は、溝１から出土し、南接する大県廃寺（大里寺）より流れ出たものと考えられ少量である。これらの遺構は、寺院建立を擁した氏族の建物群であろう。

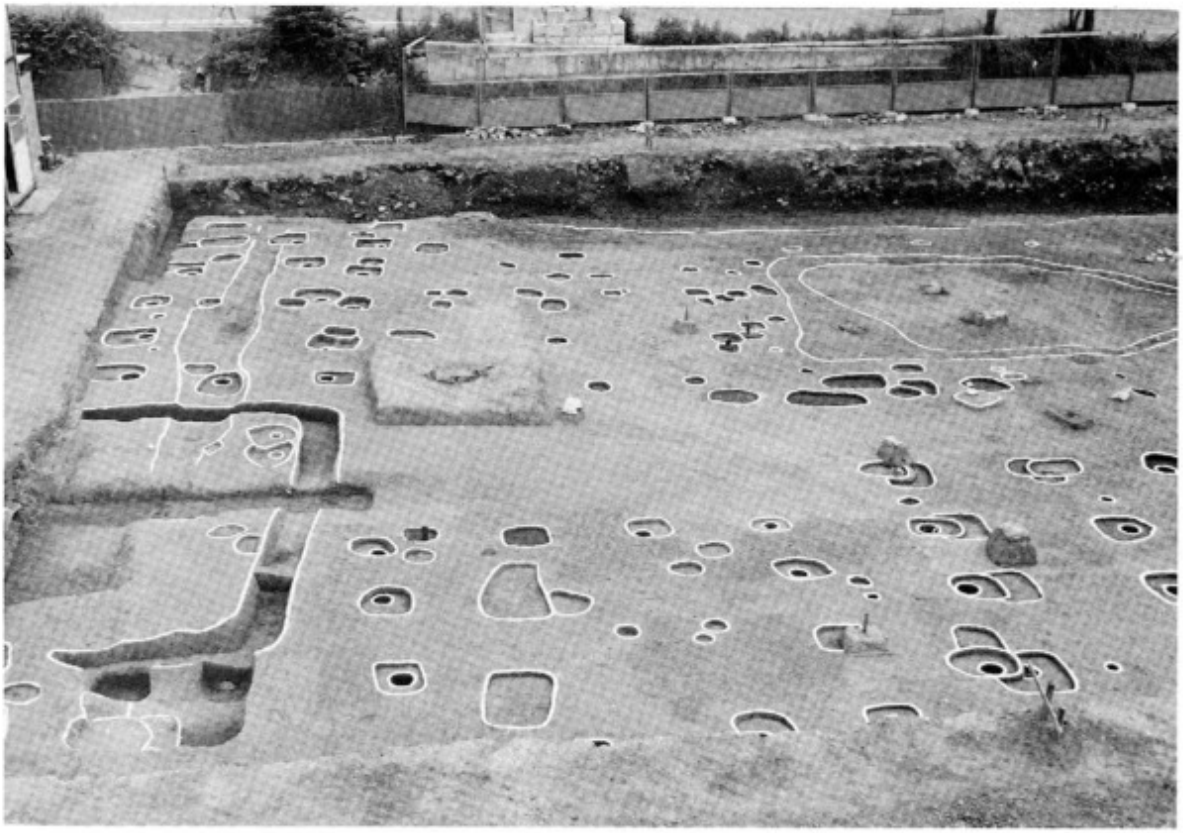
図　　版

図版一　調査区全景

調査区から高尾山を望む



上層遺構全景

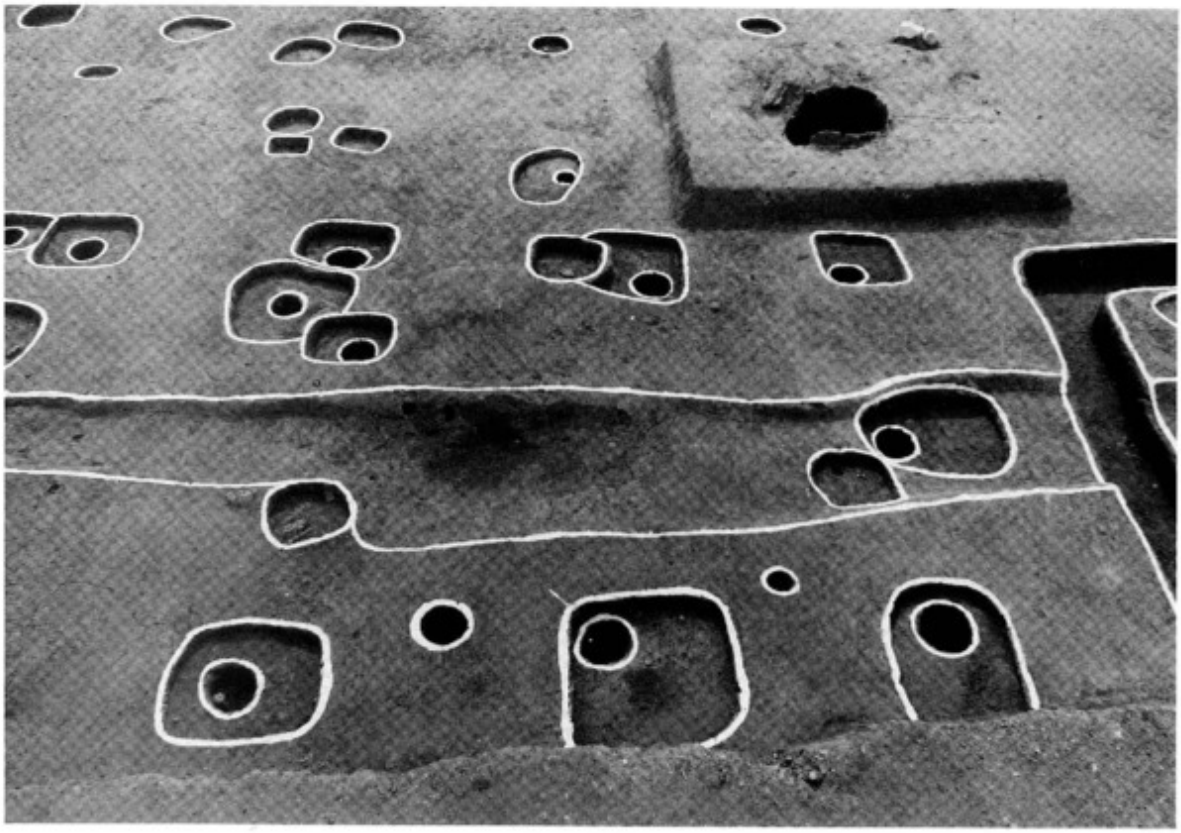


上層遺構

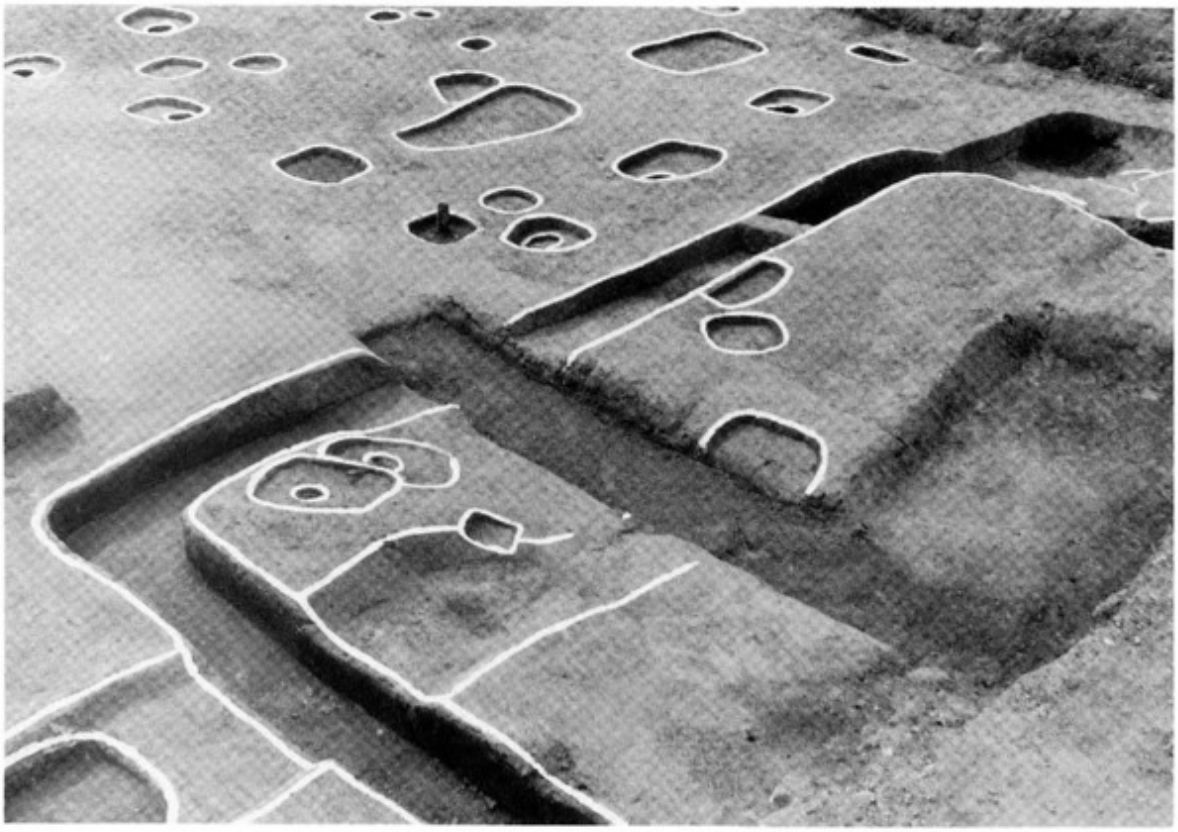
上層遺構

溝1全景

溝1上層



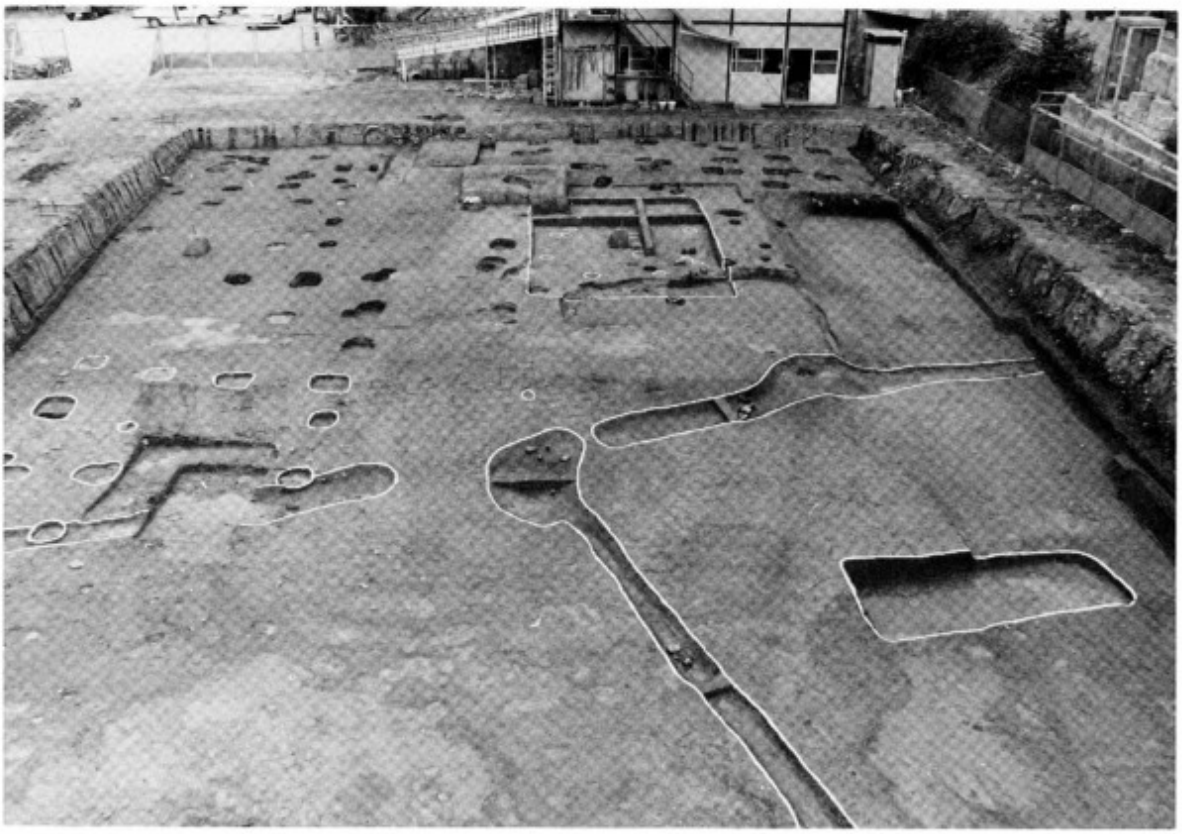
溝2



溝3

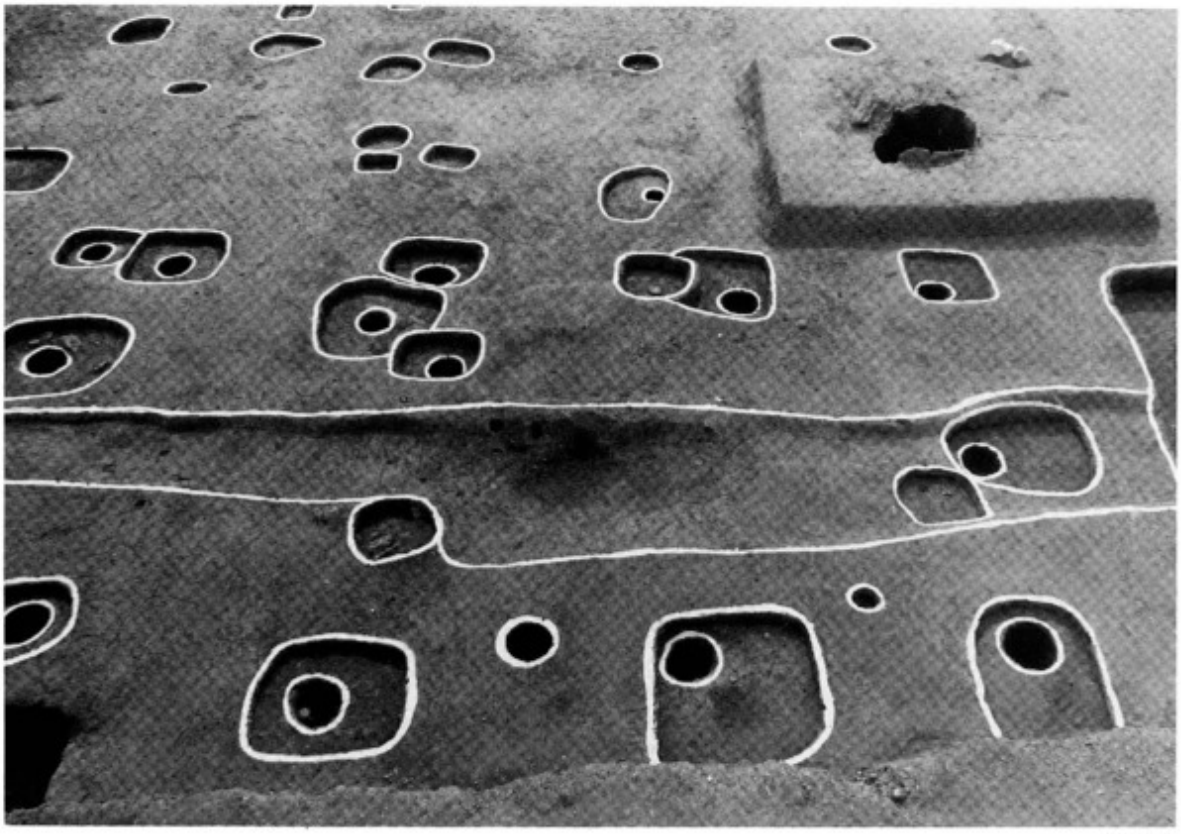
溝4

溝4

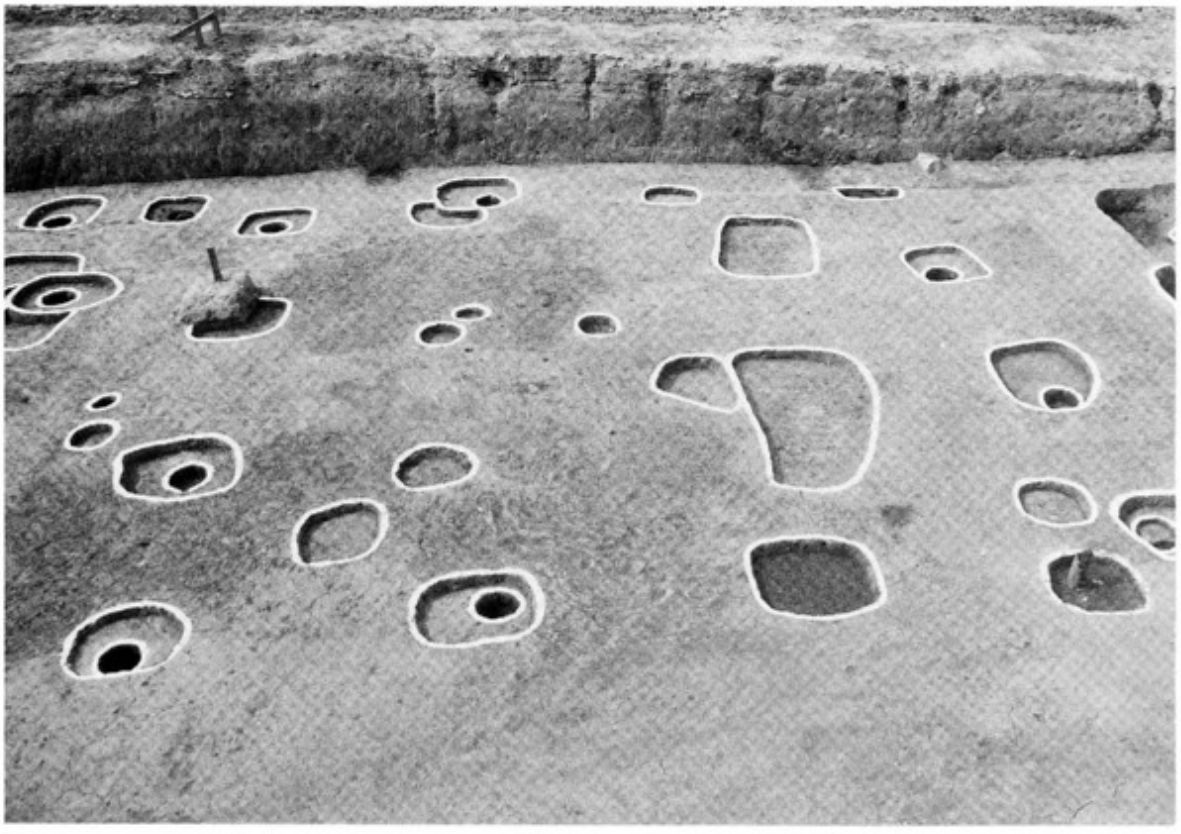


溝5、6、7

溝5遺物出土状況



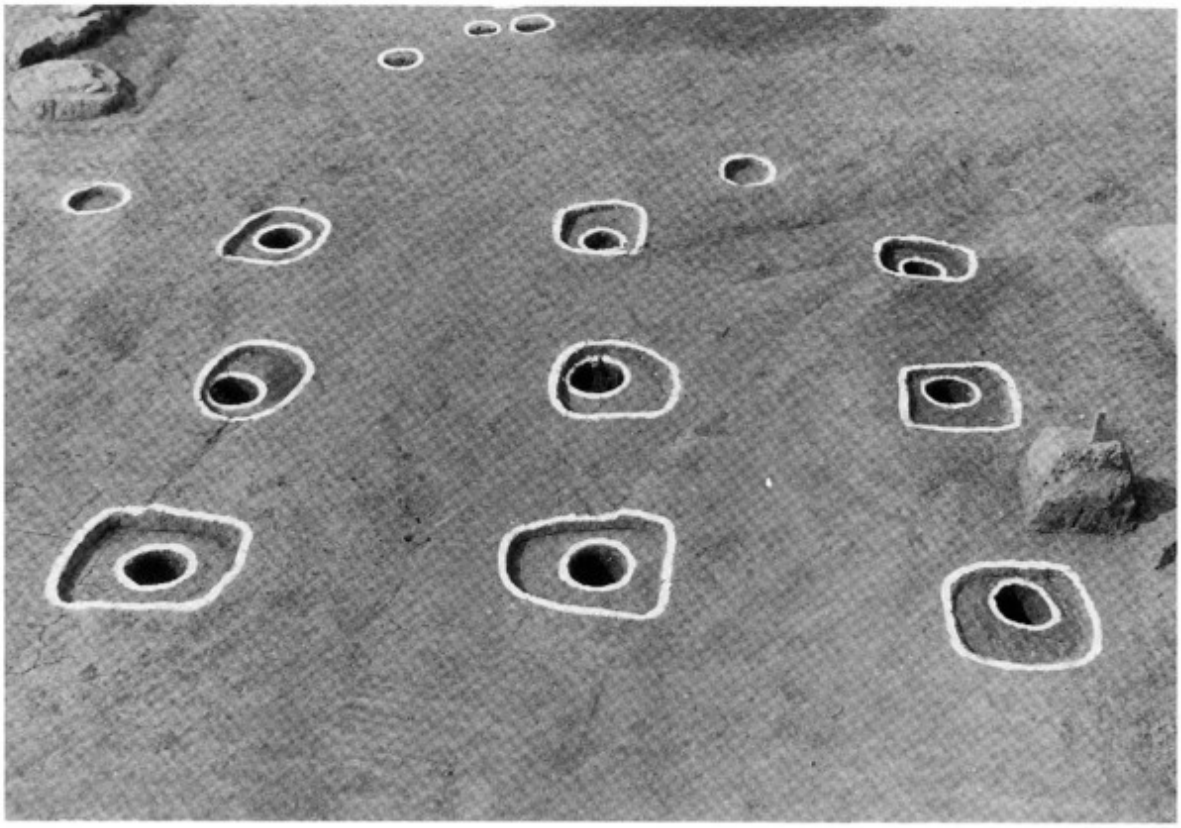
建物1



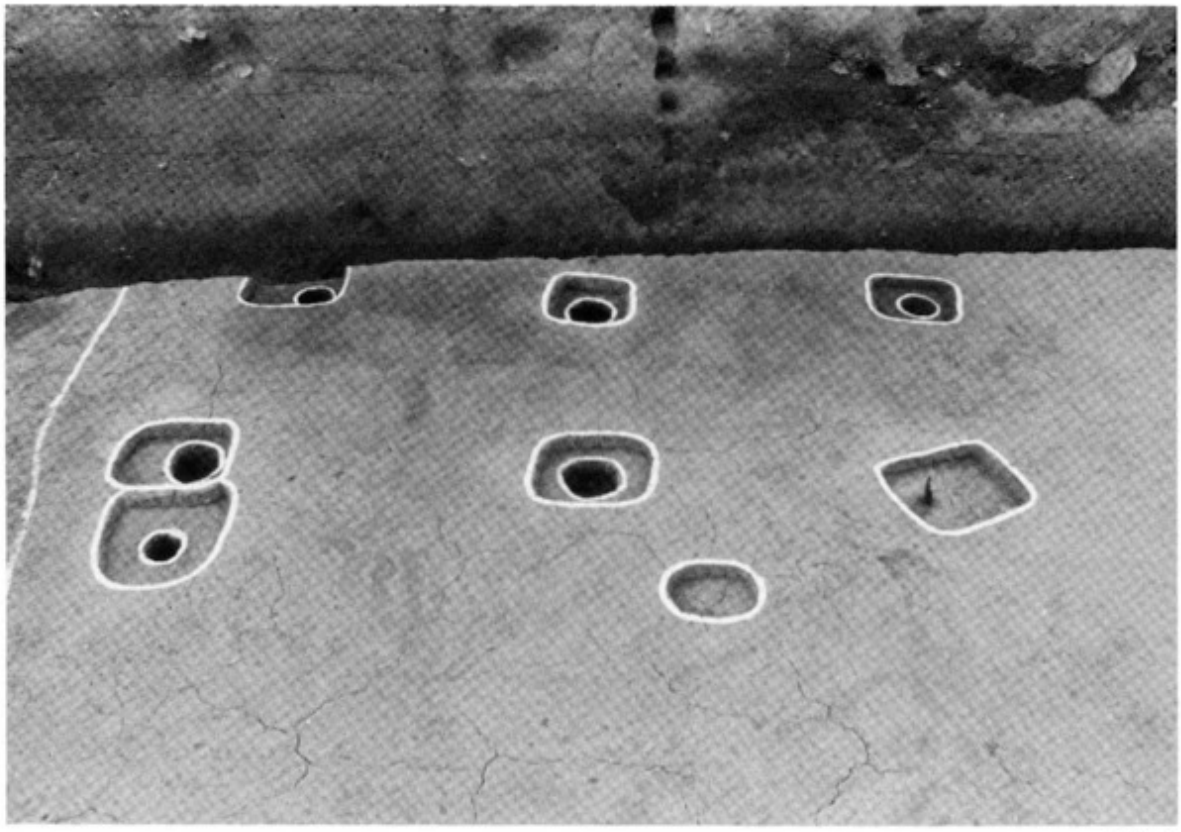
建物3

建物5

建物6

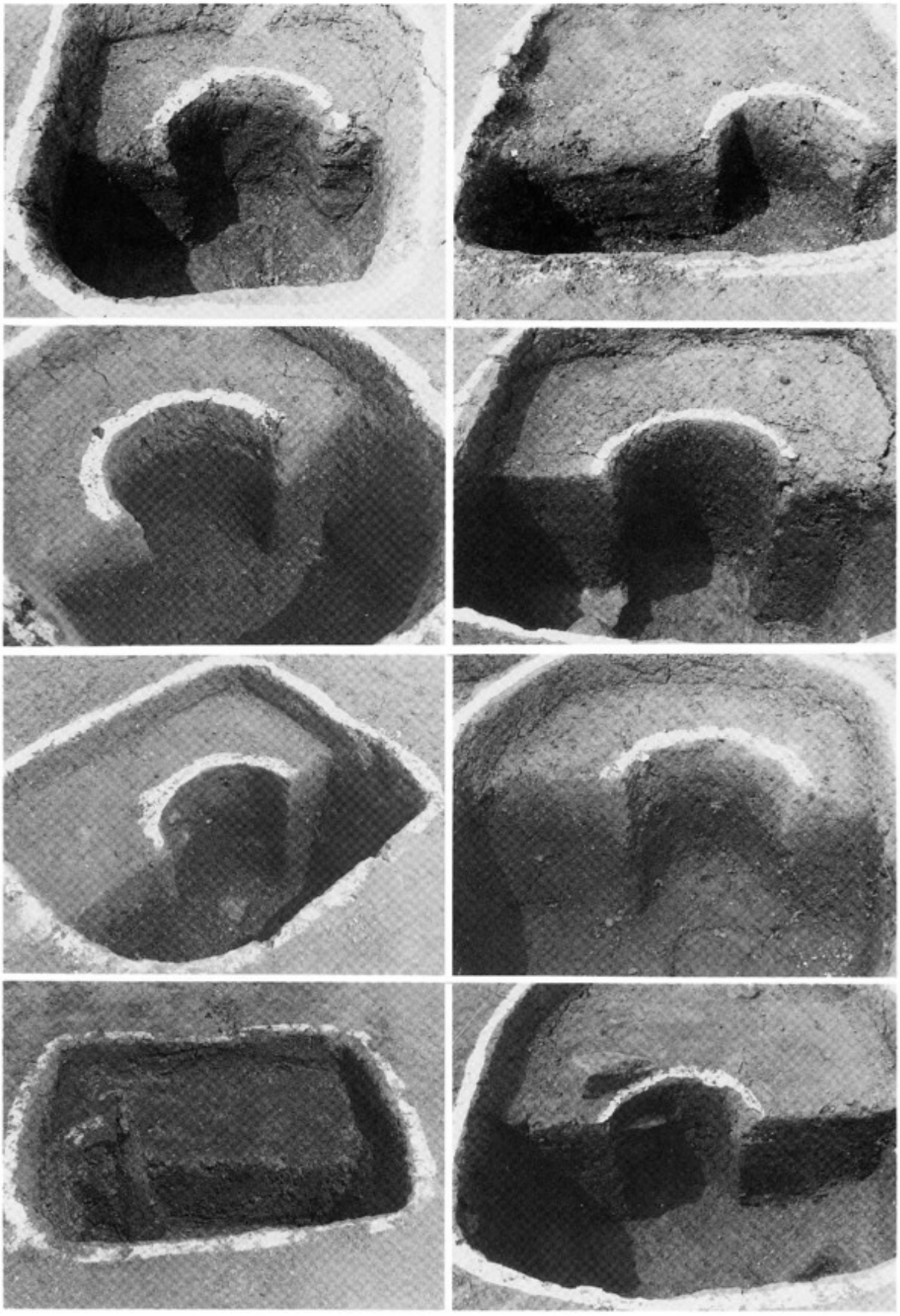


建物8



建物9

図版一〇　ピット断面



ピット断面

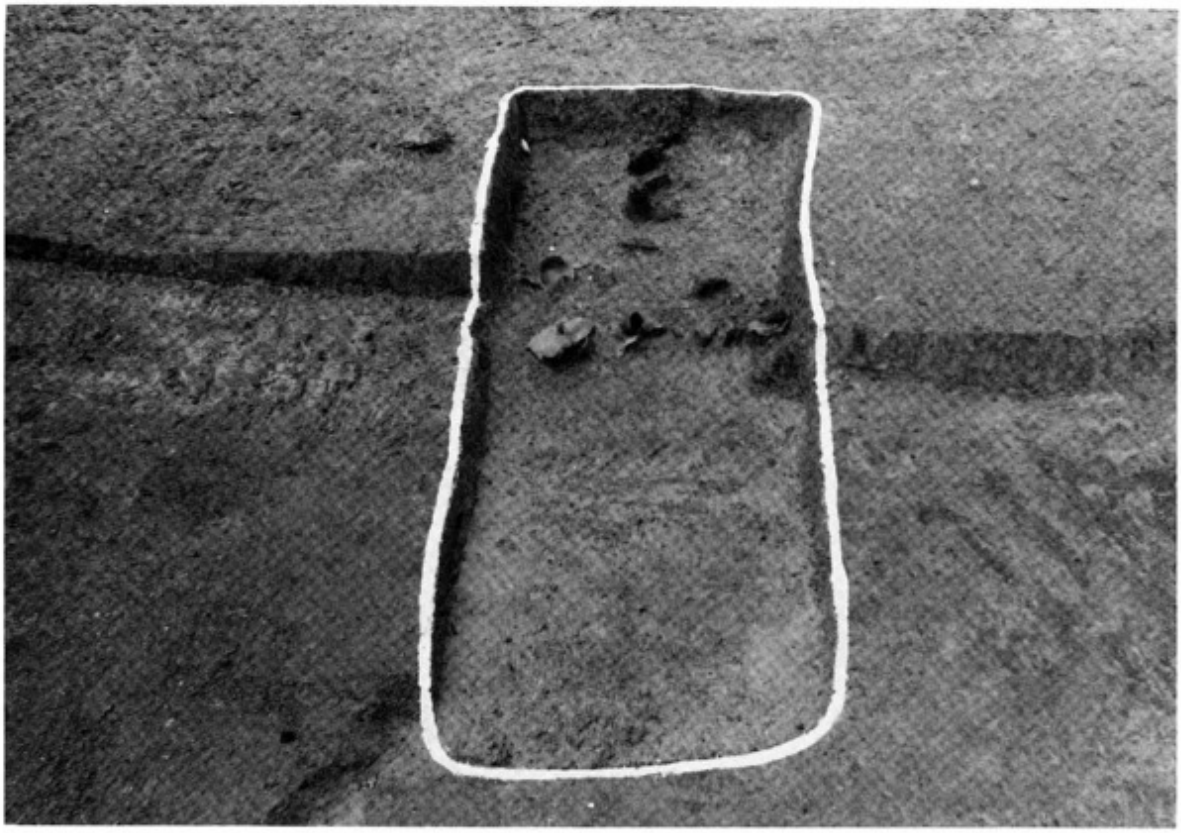
遺物出土状況

土坑 1

土坑 2

土坑 3

図版一三　土坑四



土坑4

遺物出土状況

井戸2

井戸2

井戸2

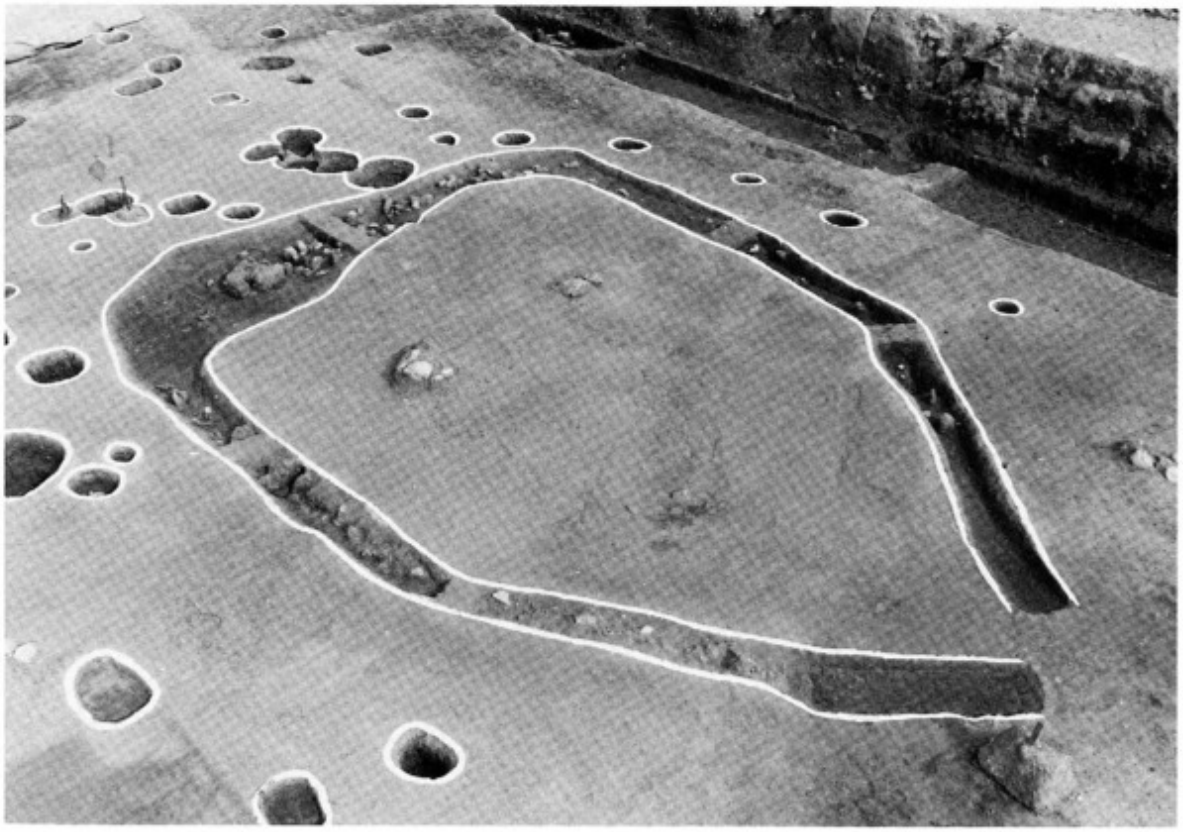
井戸2

図版一六　鍛冶炉一、二

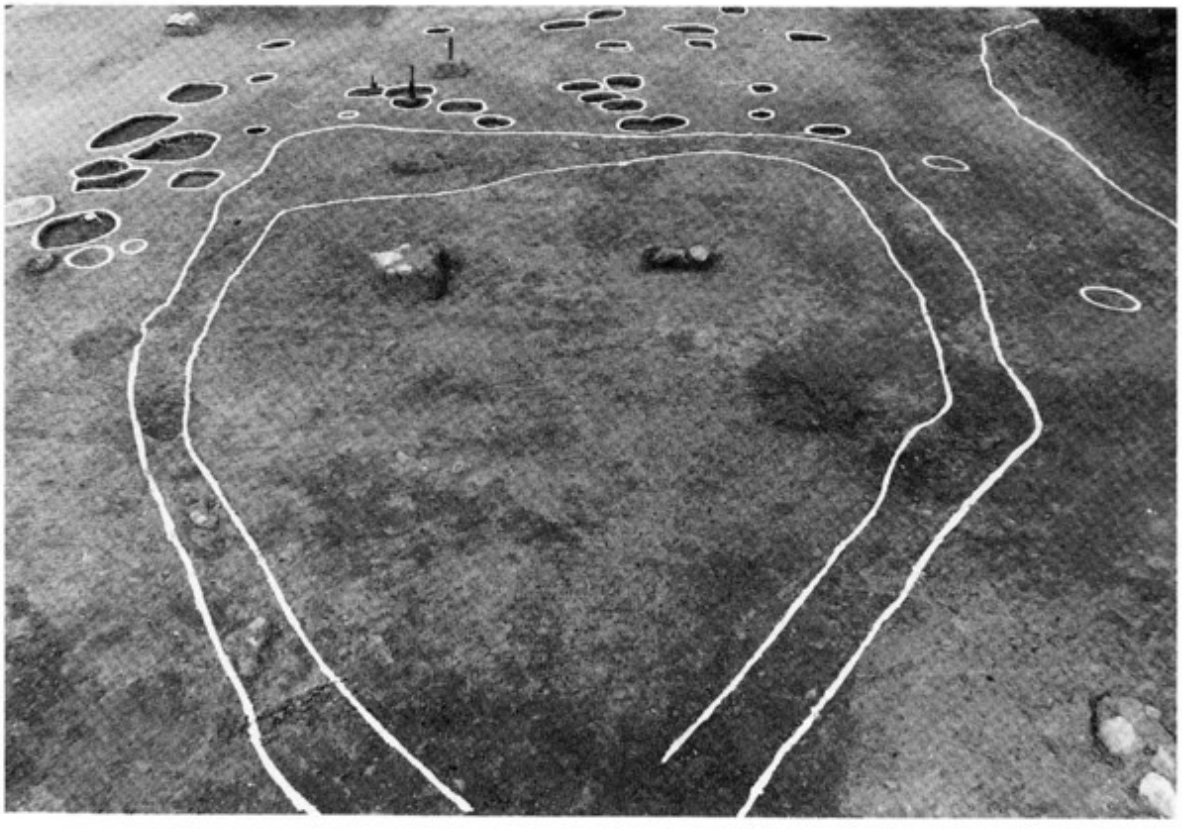
鍛冶炉1

鍛冶炉2

図版一七　鍛冶炉三　その一



鍛冶炉3



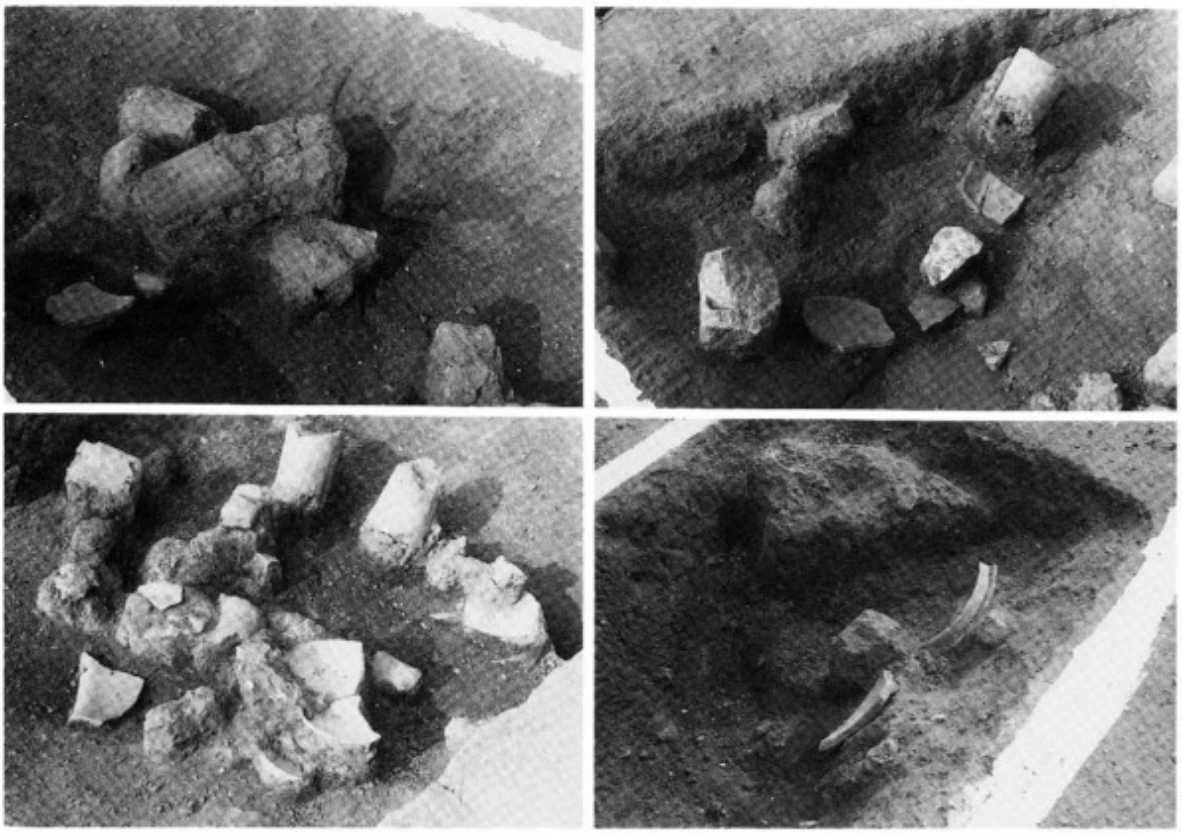
鍛冶炉3

図版一八　鍛冶炉三　その二

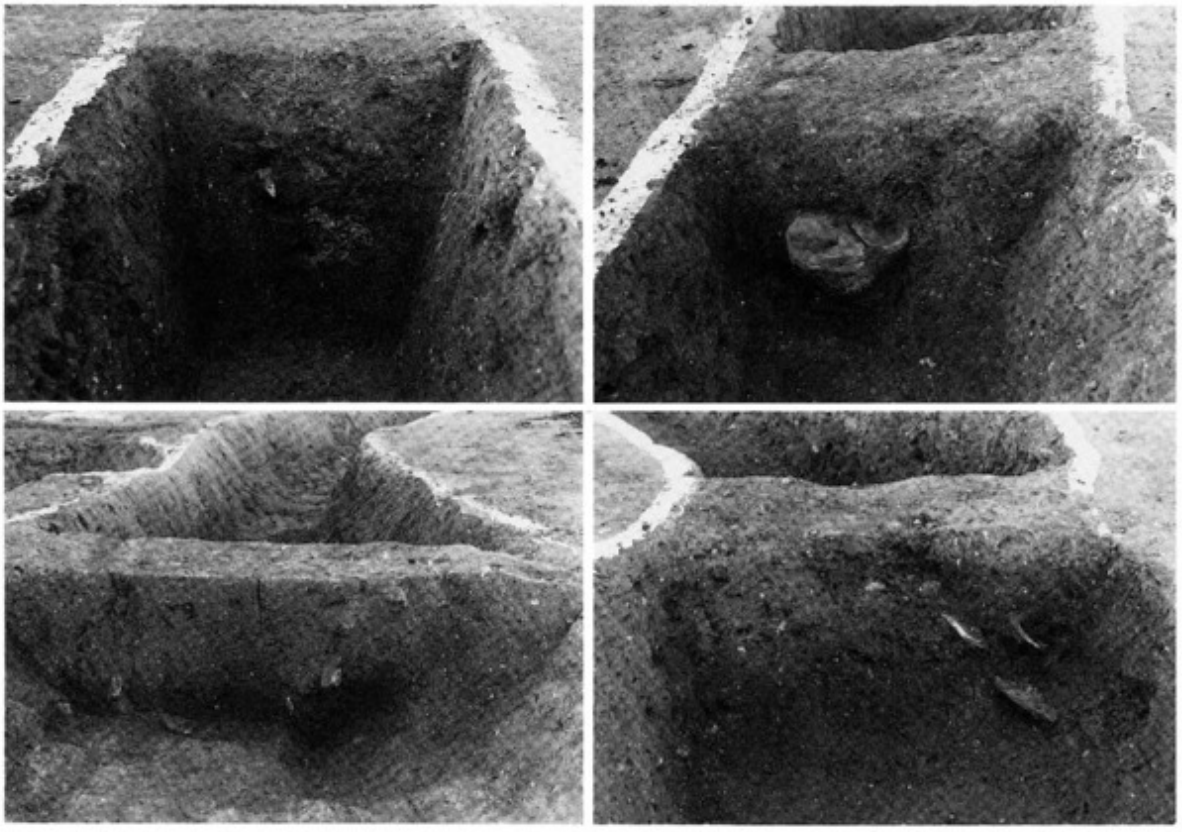
鍛冶炉３金床台

鍛冶炉３炉

図版一九　鍛冶炉三　その三



鍛冶炉３遺物出土状況

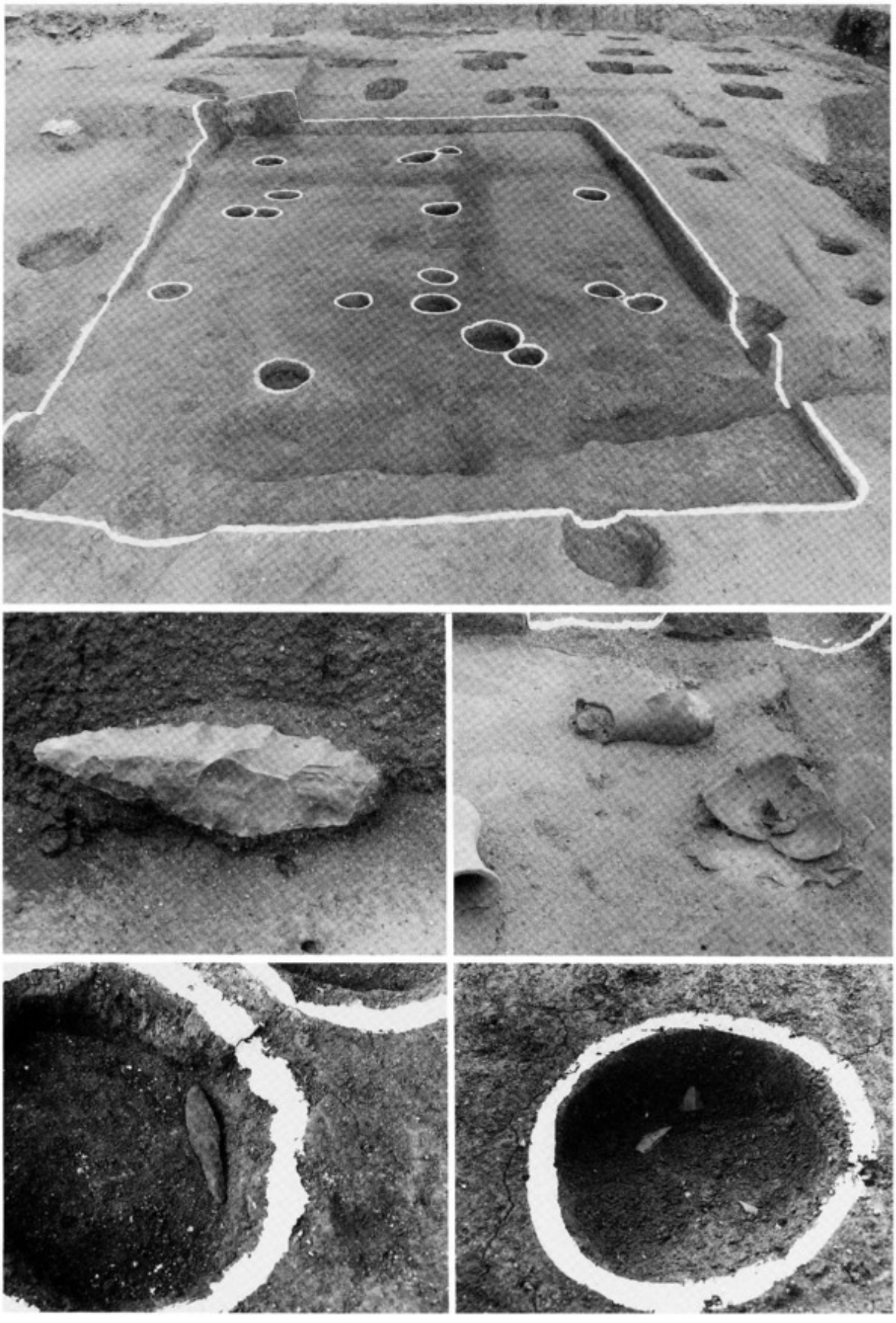


鍛冶炉３周溝断面

図版二〇　鍛冶炉四

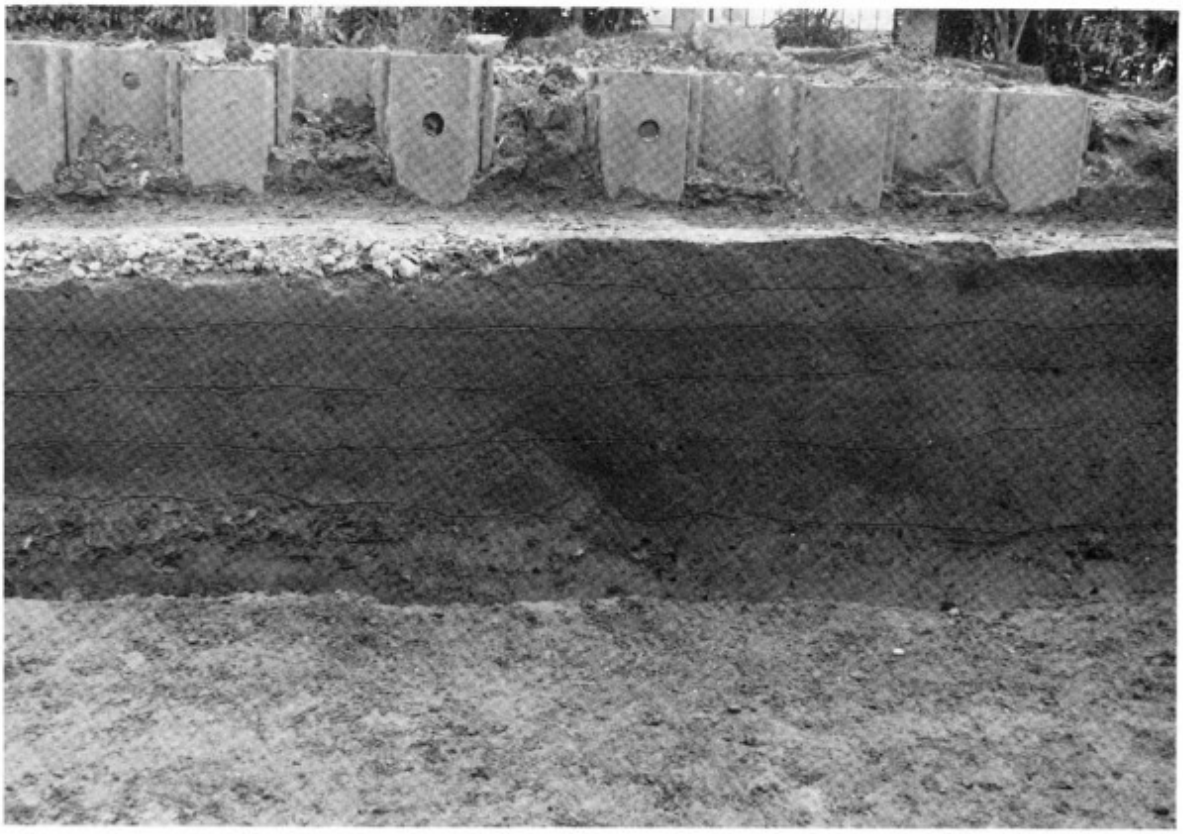
鍛冶炉4全景

鍛冶炉4炉



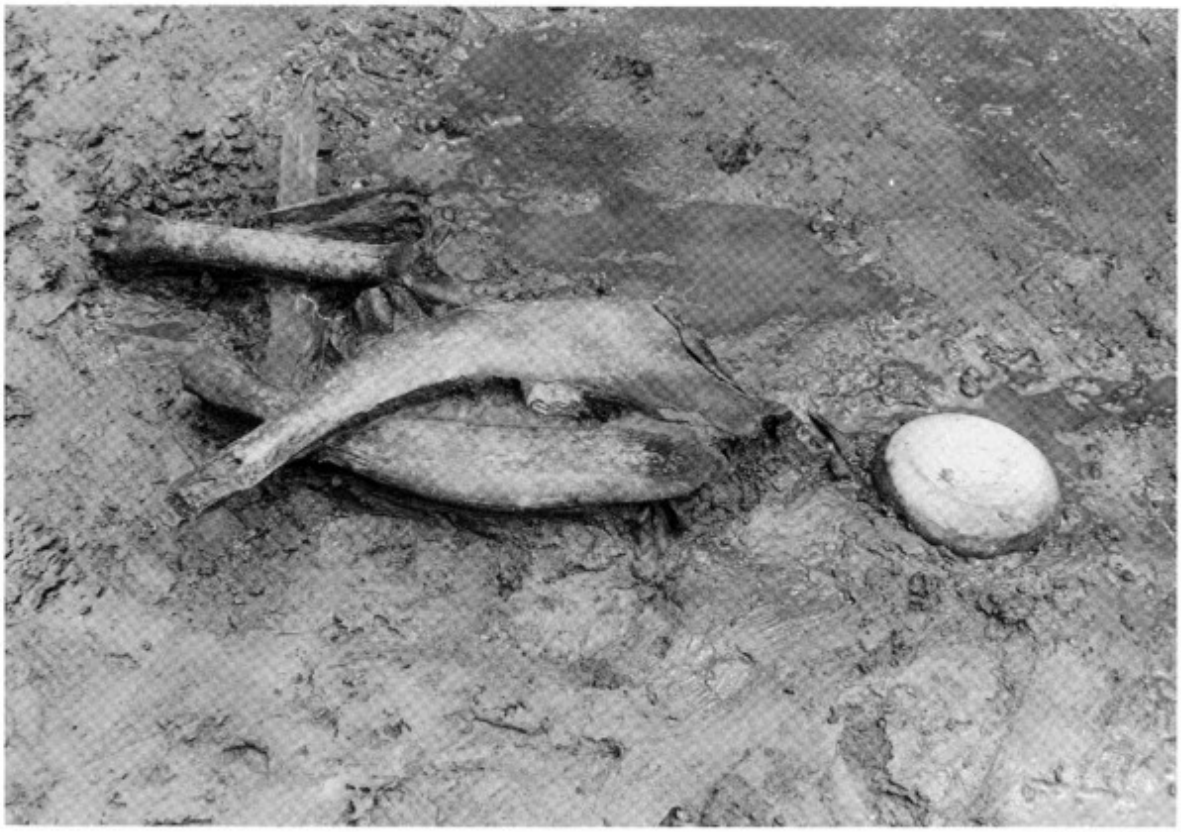
弥生住居

図版二二　土層断面



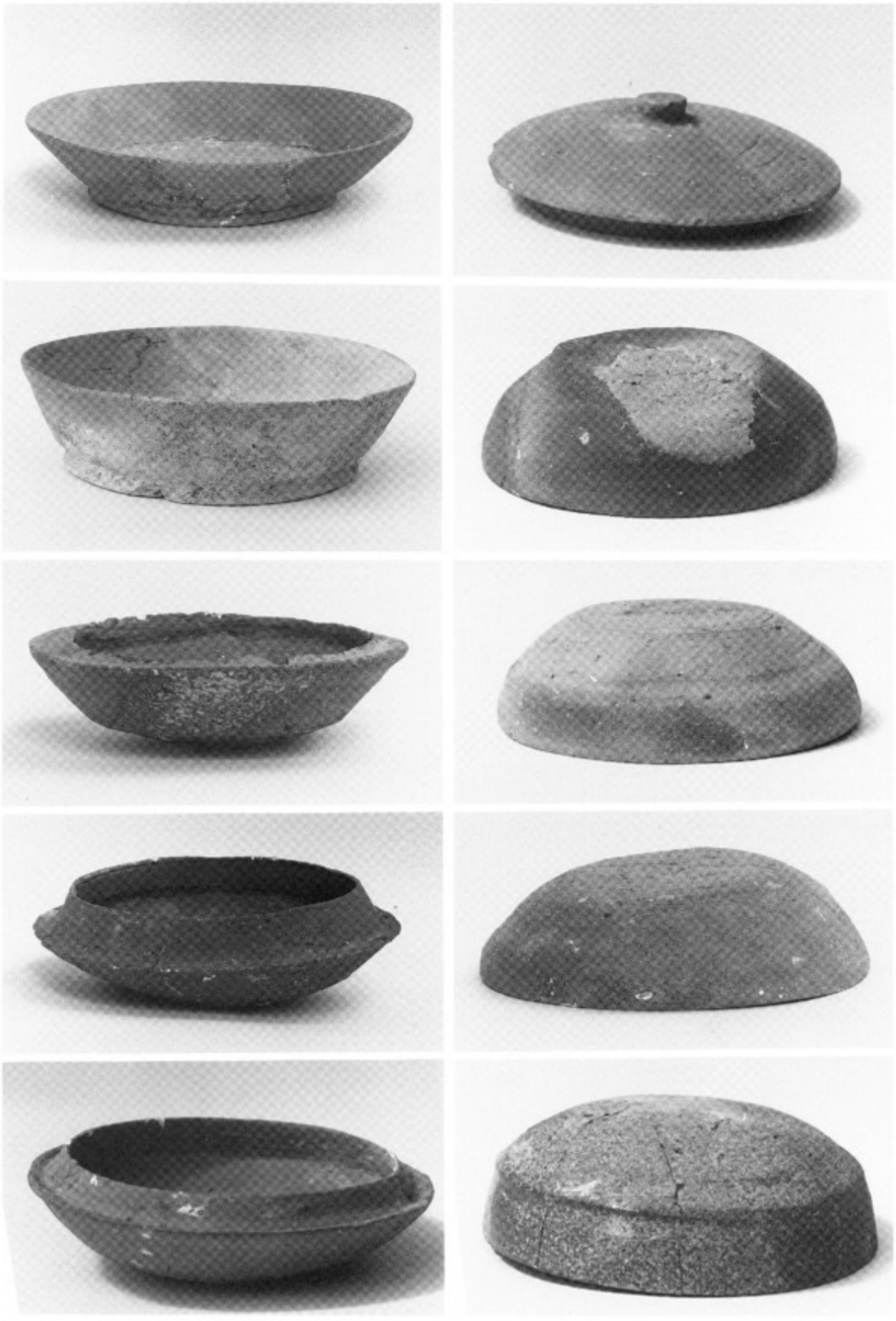
土層断面

土層断面



遺物出土状況

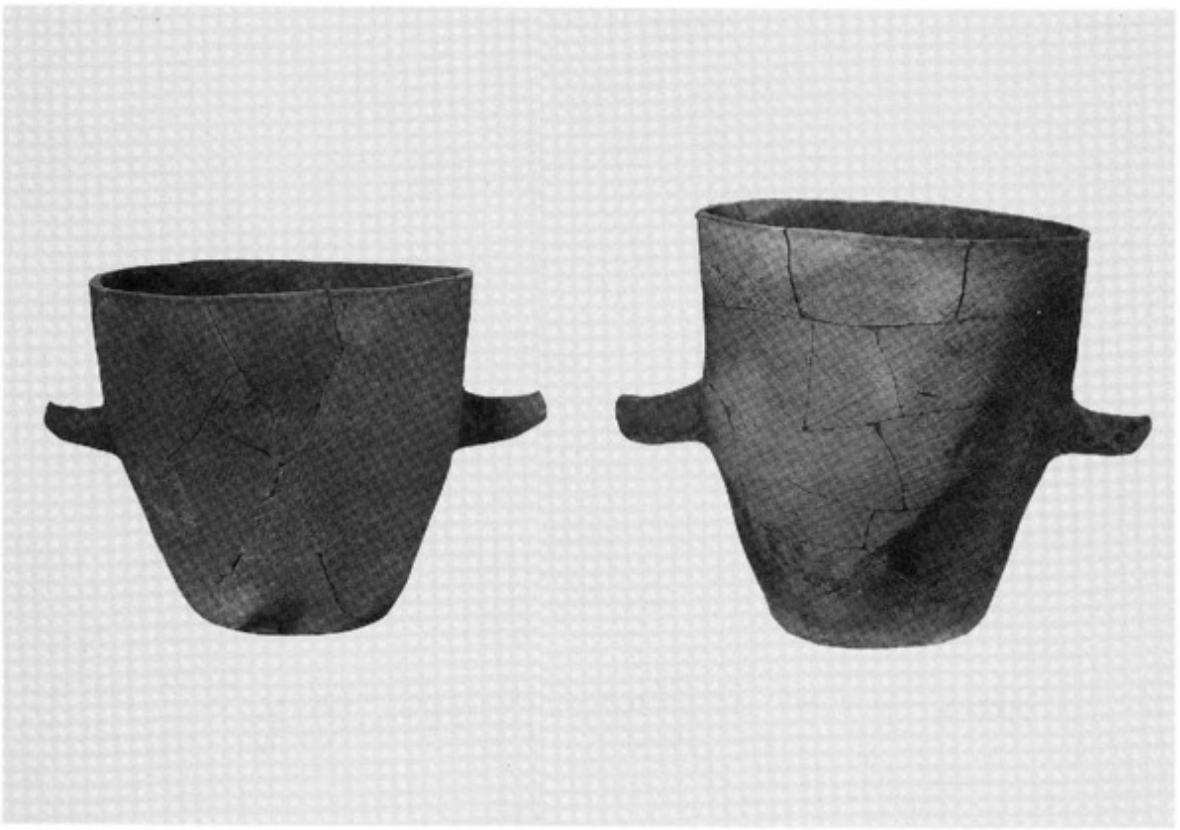
遺物出土状況



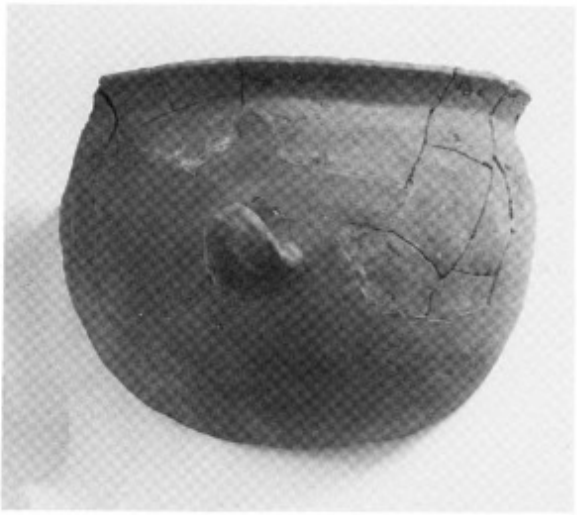
溝1出土遺物

図版二五　土坑四出土遺物

土坑 4 出土遺物

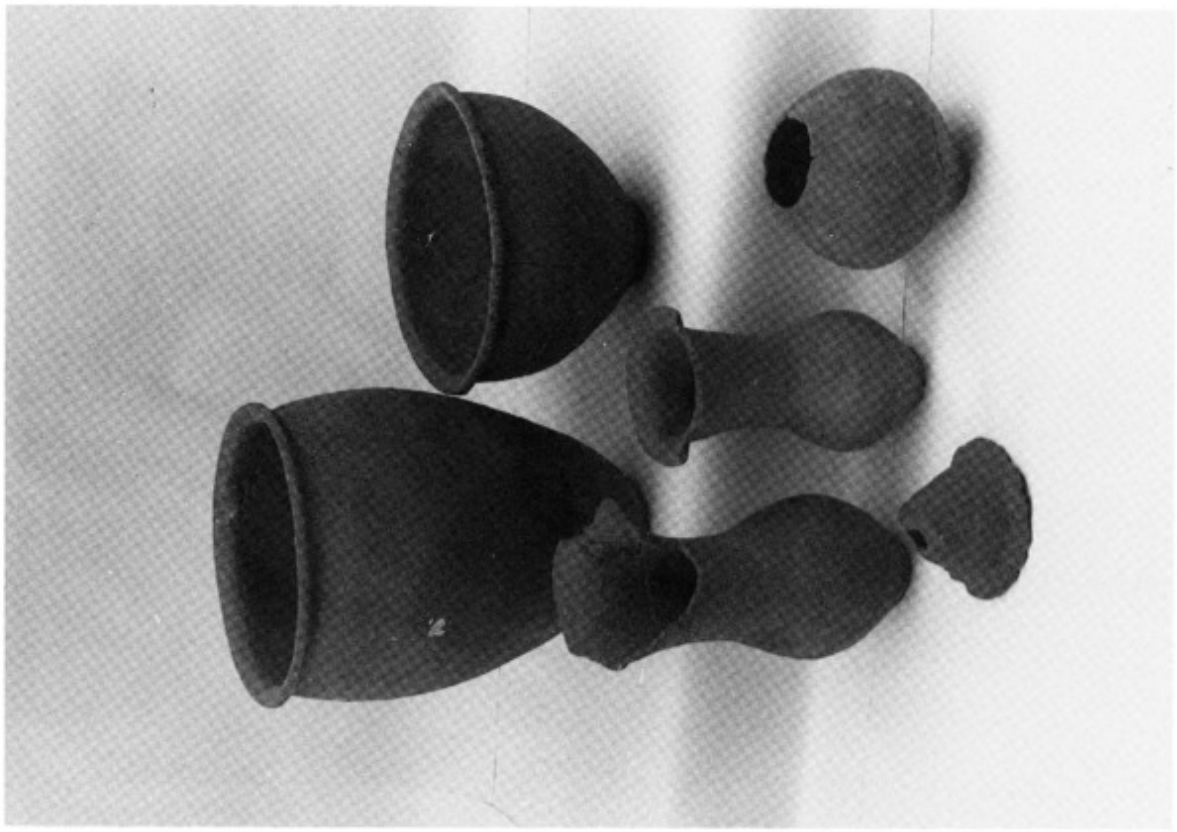


土坑 4 出土遺物



鍛冶炉3、溝4出土遺物

図版二七　弥生住居一出土遺物



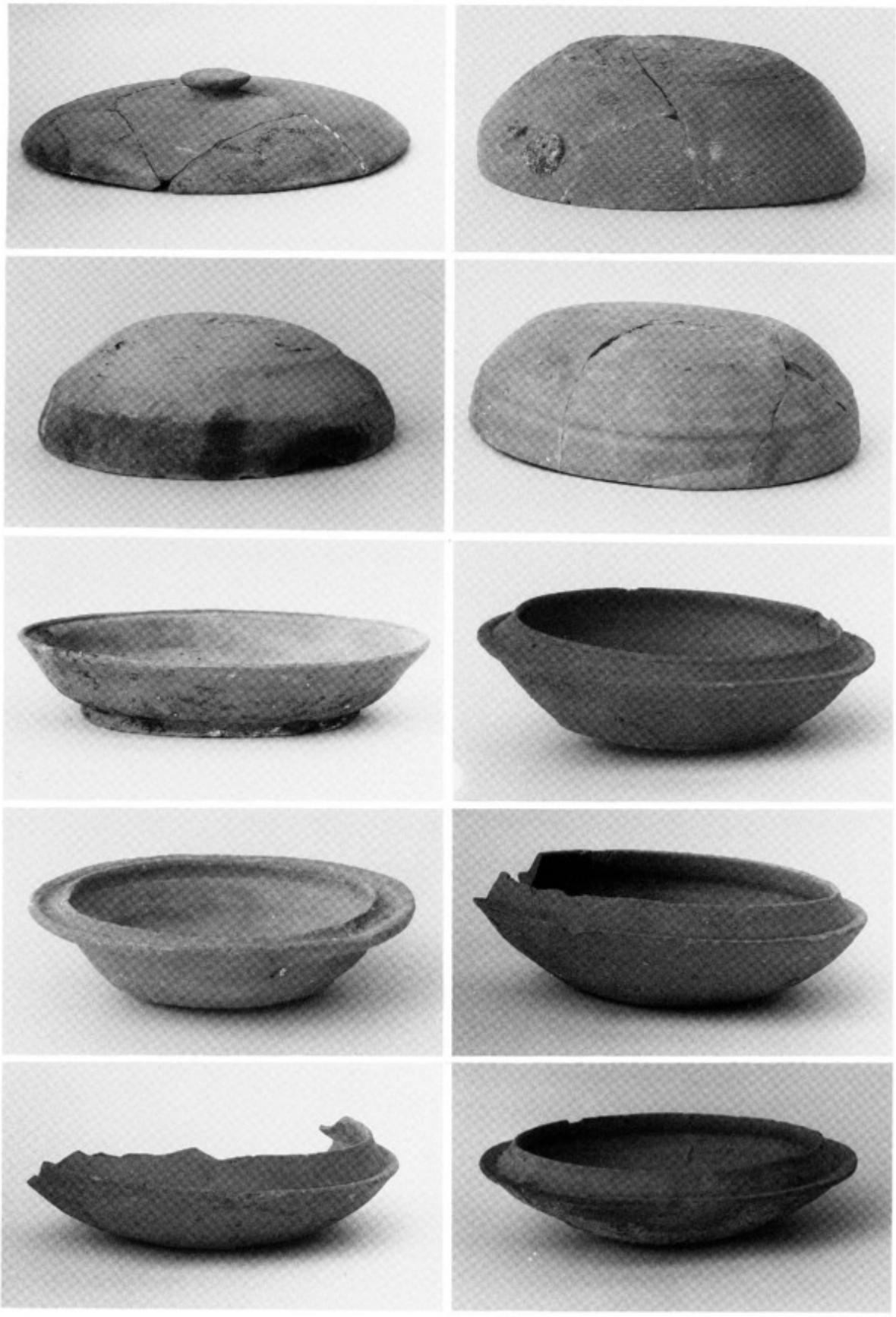
弥生住居1出土遺物

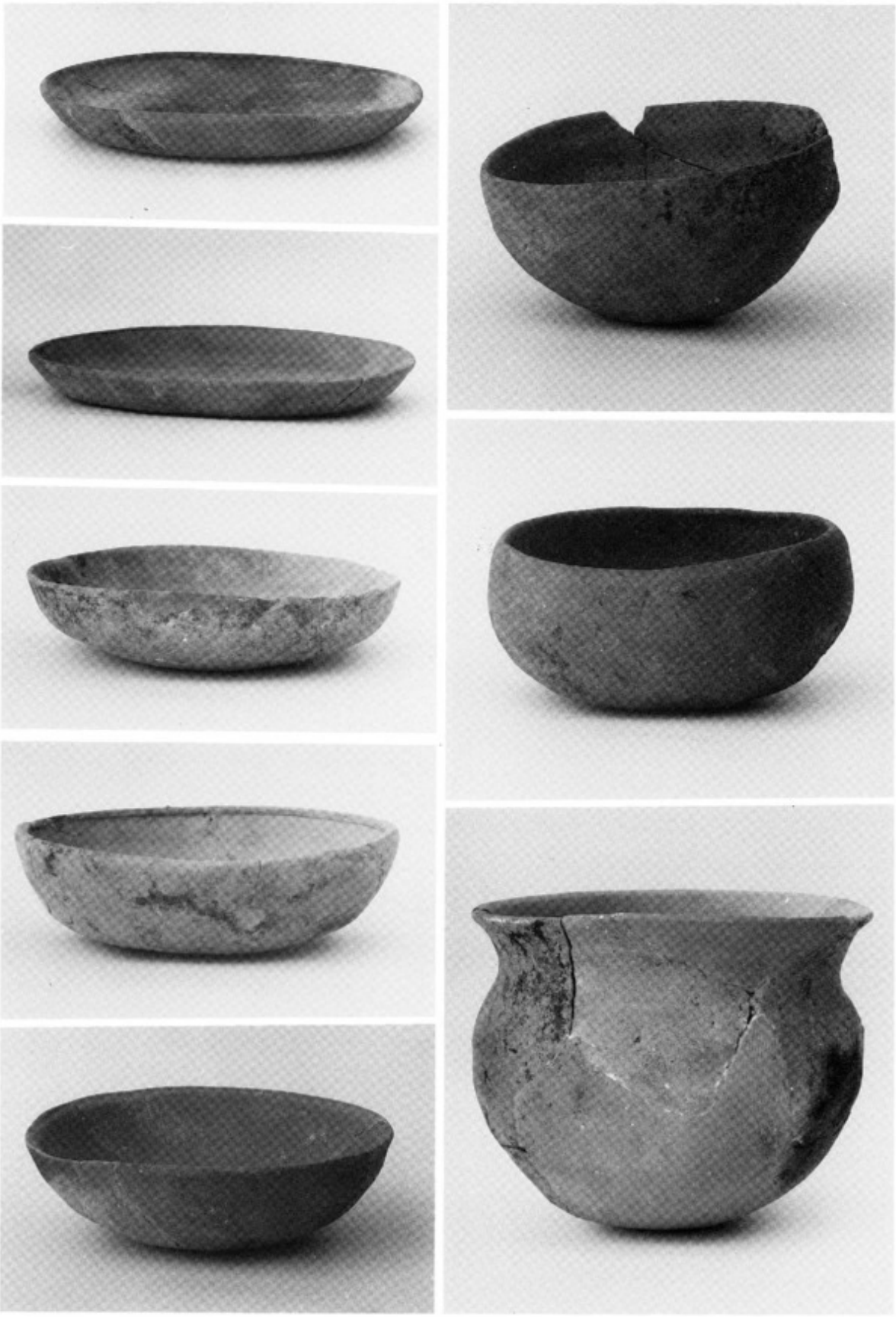
弥生住居1出土遺物

図版二八　奈良時代の遺物

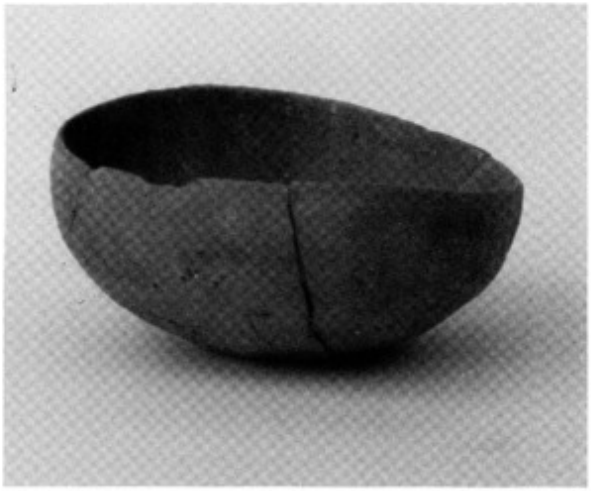
奈良時代の遺物

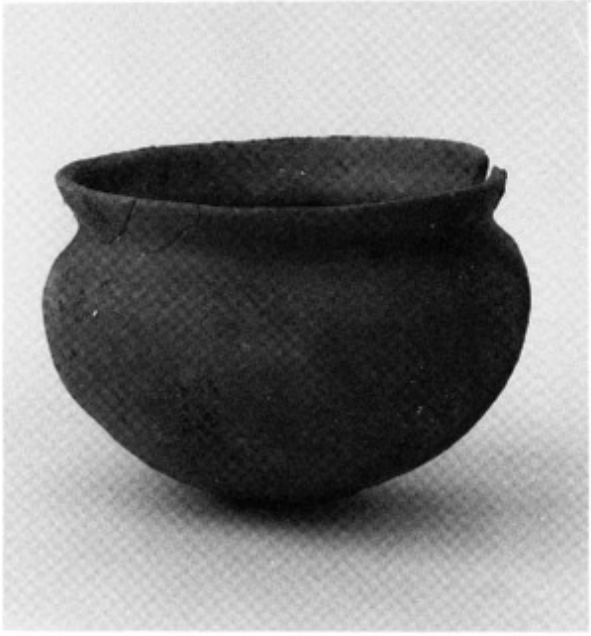
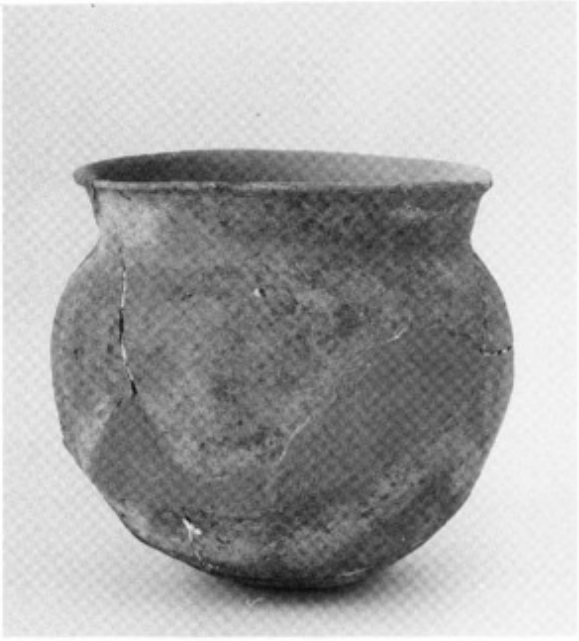
奈良時代の遺物





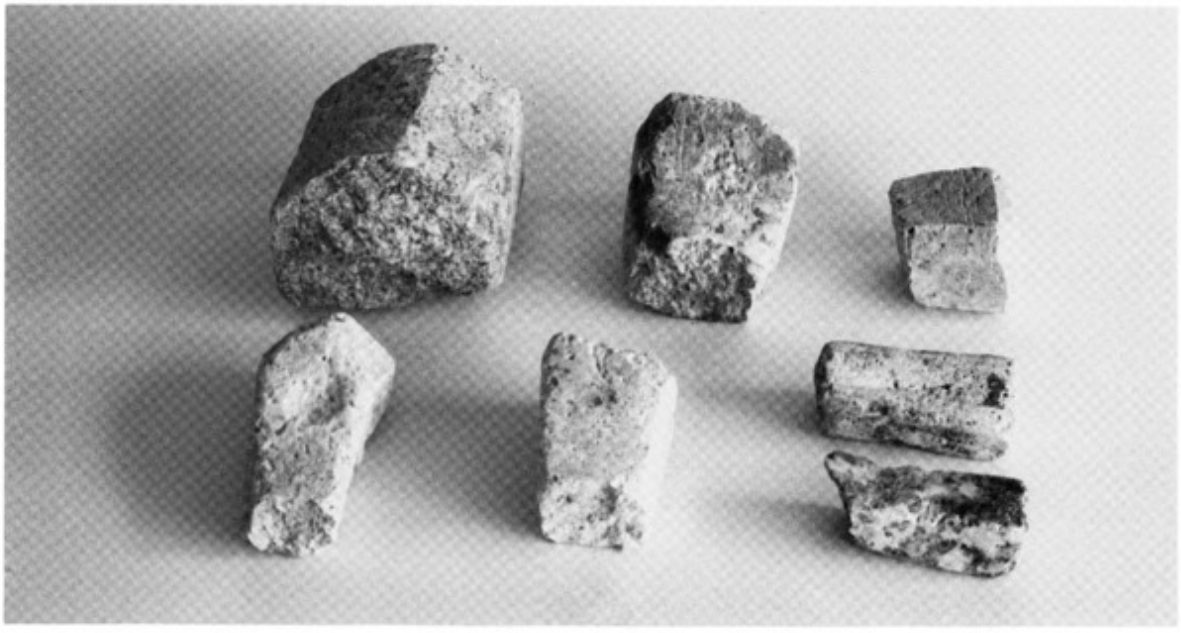
図版三一　包含層出土遺物　その三



包含層出土遺物

図版三一　鞴羽口、鉄滓、砥石



大　県　遺　跡
——堅下小学校屋内運動場に伴う——

1985年度

編集・発行　柏原市教育委員会
〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号
電話　(0729) 72−1501　内5133
発行年月日　昭和63年11月30日
印　　刷　株式会社　中島弘文堂印刷所